秋田県文化財調査報告書第183集

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

―― 太田谷地館跡第２次調査 ――

１９８９・３

秋田県教育委員会

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

―― 太田谷地館跡第２次調査 ――

１９８９・３

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これら過去の文化財遺産は現在に生きる県民の責任で保護し、未来に継承していくことがより良き社会の形成に大事なことと考えます。

このほど農業用基幹道路として西山地区農免農道整備事業が着手され、路線の一部が太田谷地館跡を通過することになりました。このため、昨年度は第1次調査、本年度は第2次調査を実施いたしました。

その結果、平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑8基などが検出され、土師器・須恵器などが出土しました。特に竪穴住居跡からは能代以北に分布する白頭山火山灰が検出され、年代を特定できる貴重な資料を得る事ができました。

本書は調査成果をまとめたものであり、郷土の歴史研究と埋蔵文化財の保護に広く活用していただければ幸いです。

最後に、この調査にご協力いただきました秋田県農政部鹿角農林事務所、鹿角市教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

平成元年3月25日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1　本報告書は、鹿角市・西山地区農免農道整備事業に係る太田谷地館跡第２次発掘調査報告書である。調査は昭和63年８月29日～同年11月12日にわたって実施した。

2　本報告書の執筆は、第４章第１節３の(１)を和泉昭一、それ以外を柴田陽一郎が行った。

3　第５章　自然科学的分析　「太田谷地館跡出土火山灰の蛍光Ｘ線分析」は、奈良教育大学教授　三辻利一氏の玉稿であり、心から感謝申し上げる。

4　土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』に拠った。

5　遺跡の発掘調査にあたり、秋田県立十和田高等学校教諭　鎌田健一氏、鹿角市教育委員会社会教育課主任　秋元信夫氏からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

凡　　例

1　竪穴住居跡の柱穴に付した数値は、床面からの深さである。(単位cm)

2　各遺構・遺物に付している略記号は以下の通りである。

　ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＤ……空堀　　ＳＫ……土坑　　ＳＮ……焼土遺構

　ＳＸ……性格不明の遺構　　Ｍ……鉄製品　　Ｓ……石

　遺物出土状況図で使用した番号は、現場で遺構毎に採り上げた番号である。

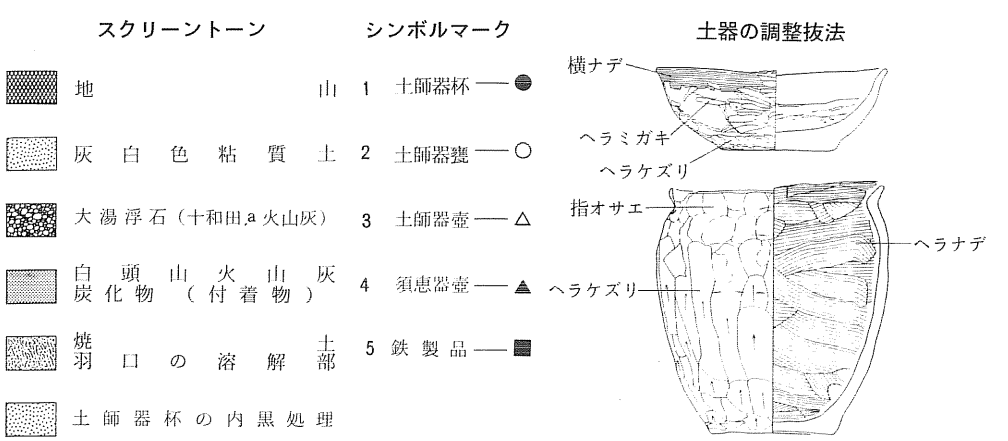
3　遺構はその性格に関係なく全て通し番号とし、第１次調査に引き続き150から付した。

4　挿図中の遺物実測図と拓本は全て通し番号とし、図版中の遺物もそれにしたがった。

5　観察表中の法量の推定値は(　)で表示した。

6　須恵器は土師器と区別するため、挿図中の実測図断面を黒く塗りつぶしている。

7　挿図中のスクリーントーン・シンボルマーク・土器の調整技法は以下のようにした。



目　　次

序
例　言・凡　例
目　次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　発掘調査に至るまで…… 1
　第２節　調査の組織と構成…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 3
　第１節　遺跡の位置と立地…… 3
　第２節　歴史的環境…… 5
第３章　調査の概要…… 8
　第１節　遺跡の概観…… 8
　第２節　調査の方法…… 13
　第３節　調査の経過…… 13
第４章　調査の記録…… 15
　第１節　遺構と遺物…… 15
　　１．縄文時代…… 15
　　(1)　土坑…… 15
　　２．弥生時代…… 16
　　(1)　土坑…… 16
　　(2)　焼土遺構…… 16
　　(3)　柱穴様ピット…… 17
　　３．平安時代…… 17
　　(1)　竪穴住居跡…… 17
　　(2)　土坑…… 43
　　(3)　焼土遺構…… 44
　　(4)　空堀跡…… 44
　　(5)　柱穴様ピット…… 50
　　(6)　その他の遺構…… 51
　　４．その他の遺構と遺物…… 51
　　(1)　土坑…… 51
　　(2)　焼土遺構…… 51
　　(3)　柱穴様ピット…… 57
　第２節　遺構外出土の遺物…… 57
　　１．縄文時代の遺物…… 57
　　(1)　土器…… 57
　　(2)　石器…… 58
　　２．弥生時代の遺物…… 58
　　(1)　土器…… 58
　　３．平安時代の遺物…… 58
　　(1)　土器…… 58
　　(2)　鉄製品…… 58
　　(3)　土製品…… 58
第５章　自然科学的分析…… 80
　第１節　火山灰分析…… 80
第６章　まとめ…… 84
写真図版

挿　図　目　次

第１図　太田谷地館跡周辺の地形…… 4
第２図　太田谷地館跡の位置と周辺の遺跡…… 6
第３図　工事計画図と発掘調査区…… 9・10
第４図　遺構配置図…… 11・12
第５図　遺跡基本土層図…… 14
第６図　ＳＩ150竪穴住居跡 …… 19・20
第７図　ＳＩ150竪穴住居跡 カマド…… 21・22
第８図　ＳＩ150竪穴住居跡カマド遺物出土状況 23・24
第９図　ＳＩ151竪穴住居跡 …… 27・28
第10図　ＳＩ151竪穴住居跡カマド平面図
　　遺物出土状況…… 29・30
第11図　ＳＩ152竪穴住居跡平面図・遺物出土状況 …31・32
第12図　ＳＩ157竪穴住居跡 …… 33
第13図　ＳＩ157竪穴住居跡火山灰検出状況 …… 34
第14図　ＳＩ157竪穴住居跡遺物出土状況 …… 35
第15図　ＳＩ157竪穴住居跡カマド …… 36
第16図　ＳＩ157竪穴住居跡カマド遺物出土状況 37
第17図　ＳＩ158竪穴住居跡 …… 39
第18図　ＳＩ158竪穴住居跡火山灰検出状況 …… 40
第19図　ＳＩ158竪穴住居跡遺物出土状況 …… 41
第20図　ＳＩ158竪穴住居跡カマド …… 42
第21図　ＳＤ102空掘跡 ……45・46
第22図　ＳＫ土坑…… 52
第23図　ＳＫ土坑・ＳＮ焼土遺構…… 53
第24図　ＳＫ土坑・ＳＮ焼土遺構・柱穴様ピット・
　　ＳＸ性格不明の遺構…… 54
第25図　柱穴様ピット分布図……55・56
第26図　弥生時代の遺構内出土遺物…… 59
第27図　ＳＩ150竪穴住居跡出土遺物(1) …… 60
第28図　ＳＩ150竪穴住居跡出土遺物(2) …… 61
第29図　ＳＩ150竪穴住居跡出土遺物(3) …… 62
第30図　ＳＩ151竪穴住居跡出土遺物 …… 63
第31図　ＳＩ152竪穴住居跡出土遺物 …… 64
第32図　ＳＩ157竪穴住居跡出土遺物 …… 65
第33図　ＳＩ158竪穴住居跡出土遺物 …… 66
第34図　ＳＤ102空掘跡出土遺物 …… 66
第35図　平安時代の遺構内出土遺物…… 68
第36図　遺構外出土遺物(1)縄文土器…… 69
第37図　遺構外出土遺物(2)縄文・弥生土器…… 70
第38図　遺構外出土遺物(3)弥生土器・石器…… 71

第39図　遺構外出土遺物(4)土師器……　72
第40図　遺構外出土遺物(5)土師器・須恵器・鞴羽口……　73
第41図　土師器把手付土器……　74
第42図　鉄製品・鉄滓・鞴羽口……　75
第43図　太田谷地館跡出土火山灰のRb－Sr分布図……　82
第44図　太田谷地館跡出土火山灰のK－Ca分布図　82
第45図　太田谷地跡館出土火山灰のFe量……　82
第46図　火山灰の蛍光X線スペクトル……　83
第47図　時代別遺構・遺物分布図(1)……　86
第48図　時代別遺構・遺物分布図(2)……　87

表　目　次

第１表　太田谷地館跡と周辺の遺跡一覧表……　7
第２表　ＳＤ102土層観察表（Ａ～Ｂ）……　47
第３表　ＳＤ102土層観察表（Ｃ～Ｄ）……　48
第４表　ＳＩ150出土土器観察表 ……　76
第５表　ＳＩ151出土土器観察表 ……　77
第６表　ＳＩ152出土土器観察表 ……　77
第７表　ＳＩ157出土土器観察表 ……　77
第８表　ＳＩ158出土土器観察表 ……　77
第９表　ＳＤ102出土土器観察表 ……　78
第10表　平安時代の遺構内出土土器観察表……　78
第11表　遺構外出土土器観察表……　78
第12表　土師器把手付土器観察表……　79
第13表　火山灰の分析結果……　83

図　版　目　次

図版１　太田谷地館跡航空写真（北▷）
図版２　１．調査前（北東▷）
　　２．調査後（南西▷）
図版３　１．遺跡基本層位　ＭＤ61グリッド東壁(北▷)
　　２．遺跡基本層位　ＭＤ71グリッド東壁(北西▷)
　　３．北東部大湯浮石（第Ⅱ層）検出状況（西▷）
図版４　１．SI150竪穴住居跡検出状況（北東▷）
　　２．SI150竪穴住居跡完掘後（北西▷）
図版５　SI150竪穴住居跡カマド検出及び遺物出土状況など
　　１．竪穴住居跡土層断面－Ｃ～Ｄ－（北東▷）
　　２．カマド検出状況（北西▷）
　　３．カマド土層断面－Ｃ～Ｄ－（北東▷）
　　４．カマド遺物出土状況（北西▷）
　　５．カマド土層断面－Ｃ～Ｄ－（北東▷）
　　６．カマド完掘後（北西▷）
　　７．カマド土層断面－Ｃ～Ｄ－（南西▷）
　　８．カマド内土製支脚出土状況（北東▷）
図版６　１．SI151竪穴住居跡完掘後（西▷）
　　２．SI152竪穴住居跡完掘後（北西▷）
図版７　１．SI157竪穴住居跡完掘後（東▷）
　　２．SI157竪穴住居跡土層断面（南西▷）
図版８　１．SI157竪穴住居跡火山灰検出状況（東▷）
　　２．SI157竪穴住居跡火山灰検出状況（東▷）
　　３．SI157竪穴住居跡炭化材出土状況（東▷）
図版９　１．SI158竪穴住居跡遺物出土状況（南東▷）
　　２．SI158竪穴住居跡火山灰検出状況（南西▷）
図版10　１．SI158竪穴住居跡土層断面－Ａ～Ｂ－（南西▷）
　　２．SI150・157・158竪穴住居跡完掘後（南▷）
図版11　１．SK174土坑検出状況（北西▷）
　　２．SK174土坑精査状況（南西▷）
　　３．SK174土坑土層断面（北東▷）
　　４．SX176その他の遺構検出状況（北▷）
　　５．SX176その他の遺構土層断面（南▷）
　　６．SX176その他の遺構遺物出土状況（南▷）
　　７．柱穴様ピット５土層断面（北東▷）
　　８．柱穴様ピット５把手付土器出土状況（北東▷）
図版12　１．SD102空堀跡LRライン土層断面－Ｃ～Ｄ－（北東▷）
　　２．SD102空堀跡ＭＡライン完掘後（南東▷）
　　３．SD102空堀跡調査後（南西▷）
図版13　SI150竪穴住居跡出土遺物(1)
図版14　SI150竪穴住居跡出土遺物(2)
図版15　SI157竪穴住居跡出土遺物
図版16　SI158竪穴住居跡住居跡・柱穴様ピット３・５出土遺物

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

鹿角市の西山地区は、丘陵地や山地斜面を切り開いて作られている果樹園・畑地などが多く、そこに至る道路は勢い狭く急勾配が多かった。このため、果物や野菜などの農産物の搬出路の整備が望まれていた。これを受けて秋田県農政部は、昭和57年に西山地区農免農道整備事業計画を策定し、昭和65年度の工事終了・開通ををめざして、昭和58年に一部工事を着工した。この農道の全長は6.51㎞で、鹿角市尾去沢の北約１㎞の久保田橋を起点として、北は鹿角市十和田の神田に至り、米代川西岸に沿って北上するものである。

本農道の計画路線周辺には周知の遺跡が存在していたが、一部工事が着工されていたため、路線変更は困難と判断された。そこで県農政部鹿角農林事務所は文化財保護法に基づき秋田県教育委員会に遺跡調査の依頼を行った。秋田県教育委員会ではこれを受けて、計画路線上の遺跡調査の要・不要、遺跡の有無を確定するため、昭和59年の６月26・27日と12月３・４日の２回に分けて遺跡分布調査を実施した。６月は路線上を踏査し、12月は前者の結果をふまえて坪掘りによる補足の試掘調査を行ったもので、その結果８遺跡が存在することがわかった。

昭和60・62年には遺跡分布調査の結果をうけて、路線内での発掘調査面積を決定するため３回に分けて遺跡範囲確認調査を実施した。昭和60年６月10～12日に堪忍沢・高瀬館の各遺跡、同年10月14～19日には中畑・太田谷地館・用野目川向Ⅰ・高屋館の各遺跡、昭和62年には用野目川向Ⅱ・Ⅲ遺跡の範囲確認調査を行ったが、その結果、発掘調査を必要とするのは堪忍沢・高瀬館・太田谷地館・高屋館・用野目川向Ⅲの５遺跡であることを確定した。

この間、発掘調査は昭和61年の堪忍沢遺跡、高瀬館跡から始まり、昭和62年には太田谷地館跡第１次調査が、昭和63年には太田谷地館跡第２次調査、用野目川向Ⅲ遺跡、高屋館跡第１次調査が実施された。

第２節　調査の組織と構成

所　在　地　　秋田県鹿角市花輪字中畑27番地外

調 査 期 間　　昭和63年８月29日～11月12日

調査対象面積	2,500㎡
調 査 面 積	2,500㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田陽一郎(秋田県埋蔵文化財センター文化財主事) 和泉　昭一(秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)
総 務 担 当	加藤　　進(秋田県埋蔵文化財センター主査) 高橋忠太郎(秋田県埋蔵文化財センター主事)
調査協力機関	秋田県農政部鹿角農林事務所 鹿角市教育委員会 鹿角市高屋自治会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

１．地理的位置（第１・２図）

本遺跡は鹿角市花輪字中畑に所在し、おおよそ北緯40度13分、東経140度46分の位置にある。遺跡はＪＲ東日本花輪線花輪駅から直線距離にして北へ５㎞の地点で、国道282号から西に折れて米代川を渡ると高屋集落があり、この集落から西へ約500ｍほど登りきった台地上に立地する。

２．地形・地質概況（第１・２図）

鹿角地方は秋田県の北東部に位置し、北に青森県、東は岩手県に境を接している。本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区別される。

東に標高100～800ｍの奥羽脊梁山脈、東に標高200～350ｍの高森山地が真近に臨んでおり、これら山麓線の間には花輪盆地が南北に長く、北に開けた三角形を呈して広がっている。盆地内には、十和田火山起源の火山噴出物とその二次堆積物からなる段丘が広く分布していて、花輪以南ではその発達が良好で、その間には沖積地が広がる。また、東の岩手県に源流をもつ米代川は、はじめ脊梁山脈を西に流下して盆地内にいたってその西端を北流する。

米代川の両岸には６つの段丘面が確認されており、右岸はその発達が顕著で、左岸は少なく、その大部分は山地で、河岸段丘は盆地の西端を米代川に沿うようにわずかに分布する。特に西山付近の尾去沢から高屋の間ではほとんど沖積地は形成されず、目立った段丘もなく、標高180～300ｍの山地・斜面が連続して米代川に臨む。

高屋集落の西側台地は標高152～175ｍで、緩斜面となっている所はあるものの比較的平坦部も多く、現在果樹栽培、畑作などが行われている。この台地は幅約1,200ｍ、長さ約1,600ｍの南北に細長い段丘面で、鳥越段丘に相当する。本段丘は、十和田火山噴出物第１期の軽石流堆積物である鳥越軽石質火山灰層（約12,000年前）が上面で、その下に高市軽石質火山灰層が堆積したものと思われ、最下位の新第三紀・中新世の相内玄武岩部層の上にのる。段丘下の北には花軒田川があり、東流して米代川に注ぐ。

以上のように太田谷地館跡は、米代川左岸の鳥越段丘が米代川の１支流である花軒田川や小さな沢によって開析された舌状台地上に立地しており、昭和62年の第１次調査ではその舌状部分を、本年は第２次としてその付け根部分の北西側を調査したのである。

第１図　太田谷地館跡周辺の地形

第２節　歴史的環境

鹿角地方は前述のように、東西の山地間に花輪盆地が開け、そこを北流する米代川の両岸には段丘地形が発達しており、右岸に段丘が多い。その段丘面の標高が150～200ｍ前後の所に遺跡が集中する傾向があり、縄文時代の古い時期から人々の生活の痕跡を辿る事ができる。

古くは、縄文時代草創期の遺物として、中の崎遺跡から爪形文土器が出土している。縄文時代の集落跡としては前期末の清水向遺跡があり、県内で最も早く縄文時代の住居跡が見つかった遺跡として知られる。中期になると遺跡数は増加し、天戸森遺跡のように140軒もの竪穴住居跡を検出した大規模な集落跡を調査した例もある。後期になると、大湯環状列石に代表されるように配石を伴った遺構などが検出されるようになり、宗教的意味あいが強くなる遺跡が多く認められるようになる。昭和63年に調査された玉内遺跡からは、後期末から晩期前半の土壙墓、土器棺墓が検出されている。弥生時代の遺跡は30数箇所で確認されているが、遺物の出土は散発的でまとまった資料はない。古代・中世の遺跡については秋田県教育委員会、東北縦貫自動車道関係の発掘調査と鹿角市教育委員会の発掘調査によって、平安時代の竪穴住居跡などや館跡における多くの資料が蓄積されてきた。

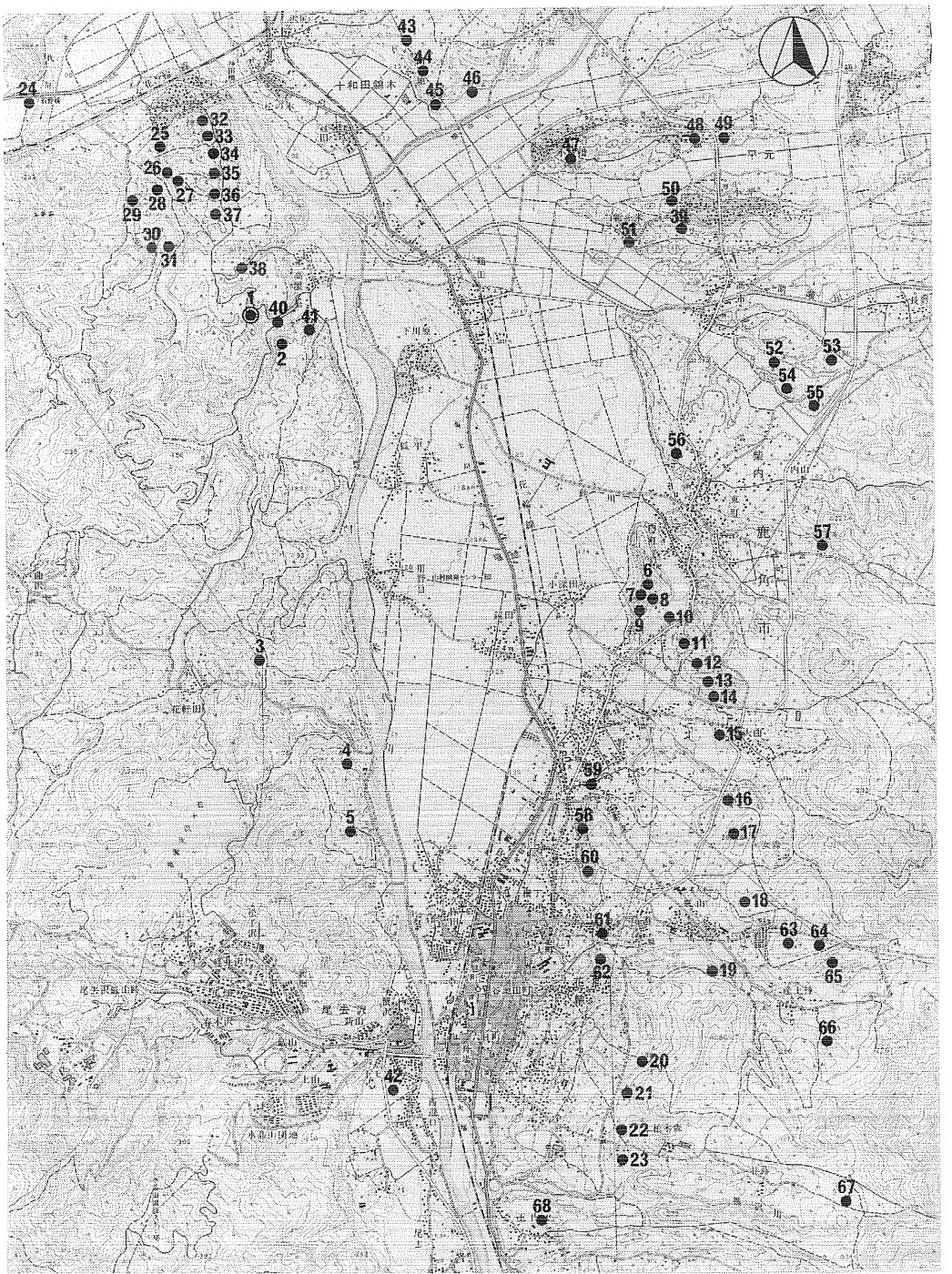
一方、米代川左岸は山地が多くて、段丘が少なく、右岸に比べかなり遺跡数が少ない。しかし数少ない段丘の平坦面や緩斜面には縄文～中世の遺跡が立地する。太田谷地館跡周辺では、北約1.0～1.5㎞の地点に縄文時代を主とした遺跡群が立地し、その数は13を数える。その中には弥生時代や平安時代と複合している遺跡もある。西山地区農免農道関係遺跡の調査は、第１章で述べたように、太田谷地館跡第１次調査を含めて３遺跡の調査を終了している。堪忍沢遺跡は、平安時代中葉～末葉の遺跡で13基の製鉄炉などが検出され、太田谷地館跡第１次調査では平安時代末葉の竪穴住居跡51軒、空堀３条などが検出された。また、高瀬館跡は13世紀末～14世紀初めの青磁蓮弁文椀が出土し、方形竪穴状遺構11基などが検出されている。

参考文献

井上　武・上田良一他　「秋田県総合地質図幅『花輪』」　秋田県　1973(昭和48年)

藤本幸雄　「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』秋田県教育委員会　1981(昭和56年)

藤本幸雄　「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県教育委員会　1984(昭和59年)



（１：50,000）

第２図　太田谷地館跡の位置と周辺の遺跡

第１表　太田谷地館跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田谷地館	縄文・弥生・平安・中世	35	上ノ野Ⅶ	縄文
2	高屋館	縄文（後期）・中世	36	上ノ野Ⅷ	縄文
3	用野目川向Ⅲ	縄文・弥生・平安	37	上ノ野Ⅸ	縄文
4	高瀬館	中世	38	戸羽の沢	縄文
5	堪忍沢	縄文・平安	39	高市向館	中世
6	西町	縄文	40	花輪B	縄文（後期）・弥生
7	西町Ⅱ	縄文	41	花輪C	縄文（晩期）
8	西町Ⅰ	縄文・弥生	42	下モ平	続縄文
9	乳牛	縄文（晩期）	43	冠田	平安
10	下乳牛	縄文・平安	44	曲谷地A	古墳
11	乳牛平	縄文・平安・中世	45	曲谷地B	古墳
12	妻の神Ⅲ	縄文・平安・中世	46	枯草坂	古墳
13	妻の神Ⅱ	縄文・平安	47	小枝指館	
14	妻の神Ⅰ	縄文（晩期）・平安・中世	48	平元館Ⅰ	縄文（後期）
15	猿ケ平Ⅱ	縄文（早期～晩期）	49	平元館Ⅱ	平安
16	猿ケ平Ⅰ	縄文（中期～晩期）	50	小平館	
17	案内Ⅱ	縄文	51	新斗米館	
18	案内Ⅰ	縄文・平安	52	高市館	
19	孫右衛門館	縄文・平安	53	餅野Ⅱ	平安
20	柏木森	縄文・平安	54	餅野Ⅰ	続縄文・平安
21	明堂長根	縄文	55	餅野Ⅲ	縄文
22	一本杉	縄文・平安・中世	56	万谷野	平安
23	上葛岡Ⅳ	縄文	57	餅野Ⅳ	平安
24	石野	古墳	58	天戸森	縄文（中期）
25	上ノ野Ⅰ	弥生	59	陣場	縄文
26	上ノ野Ⅱ	縄文	60	御休堂	縄文（前期～後期）・平安
27	上ノ野Ⅹ	縄文	61	白山堂	縄文（後期）
28	上ノ野Ⅲ	縄文	62	日向屋敷Ⅰ	縄文（中期）
29	板橋Ⅰ	縄文（晩期）	63	東山A	縄文・弥生
30	板橋Ⅱ	縄文（後期）	64	東山B	縄文
31	板橋Ⅲ	縄文（後期）	65	赤坂B	弥生
32	上ノ野Ⅳ	縄文（中期）	66	産土神A・B・C	縄文
33	上ノ野Ⅴ	縄文・平安	67	甘蕗	縄文
34	上ノ野Ⅵ	縄文・平安	68	玉内	縄文（晩期）

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

高屋集落の西側には、上面幅約東西1,200ｍ、長さ約南北1,600ｍに細長い鳥越段丘が花軒田川や小さな沢によって開析され、いくつかの舌状台地を形成している。これら台地は緩斜面かあるいはほぼ平坦で、果樹園や畑地として利用されている。太田谷地館跡はそのような舌状台地の１つに立地する。調査区の標高は約156ｍで、台地南東側直下の沖積地との比高差は約40ｍほどある。

昨年実施した太田谷地館跡第１次調査の調査区は、舌状台地の付け根部から南東側の舌端部までで、今回の第２次調査は、付け根部から山寄りの北西側が調査区にあたる。調査区の現地表面はほぼ平坦であるが、北がやや高く他の３方向に緩やかに傾斜し、特に空堀のある南東方向ではその傾向が顕著である（第３・４図）。

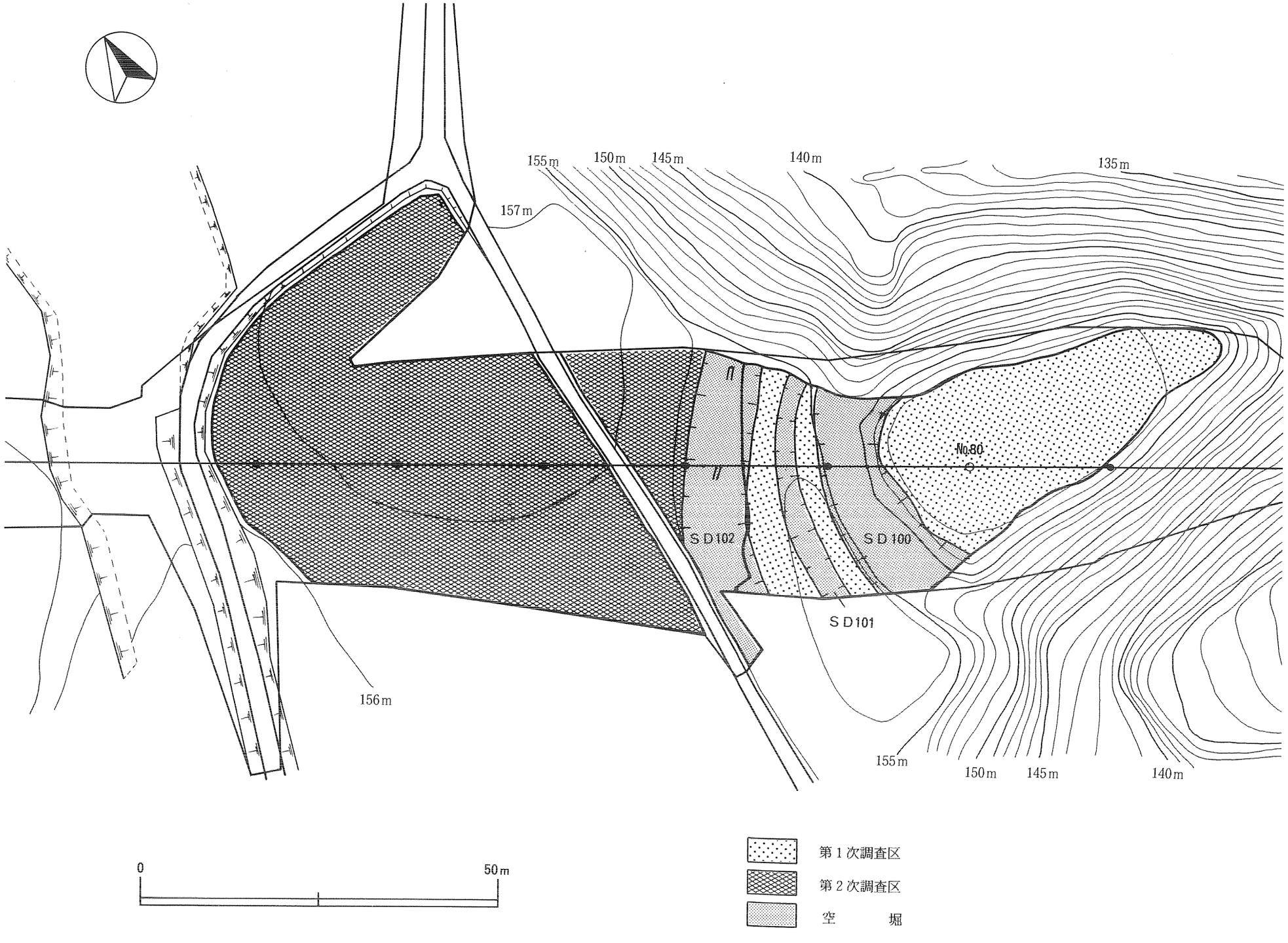
遺跡基本層位の土層断面図（第５図）はＭＤライン（ＭＤ61～ＭＤ75グリッド）の北壁に沿って作成した。それによれば､中央部の平坦部は表土から地山まで深さが60～70㎝である。ＭＤ72グリッドから北西端にかけては50㎝前後と層厚は薄くなる。北西端から下の農道にかけての斜面の土層観察によれば、第Ⅰ層は最も厚いところで100㎝、第Ⅱ層は30～40㎝と厚く、ブロック状になっている。これは、ＭＤ70グリッド以西の平坦部には第Ⅱ層・第Ⅲ層がないことから、小高い場所を削平後、平坦にして斜面に盛土したものと観察される。そのことは、西縁辺部一帯の第Ⅰ層が薄く、しかも２層目がすぐ地山になるということ、遺構・遺物の密度が極めて希薄であるということからもうかがえる。

第Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ2/2)。〔表土〕　径１～５ミリの軽石粒が20％混入する。層厚20～25㎝である。

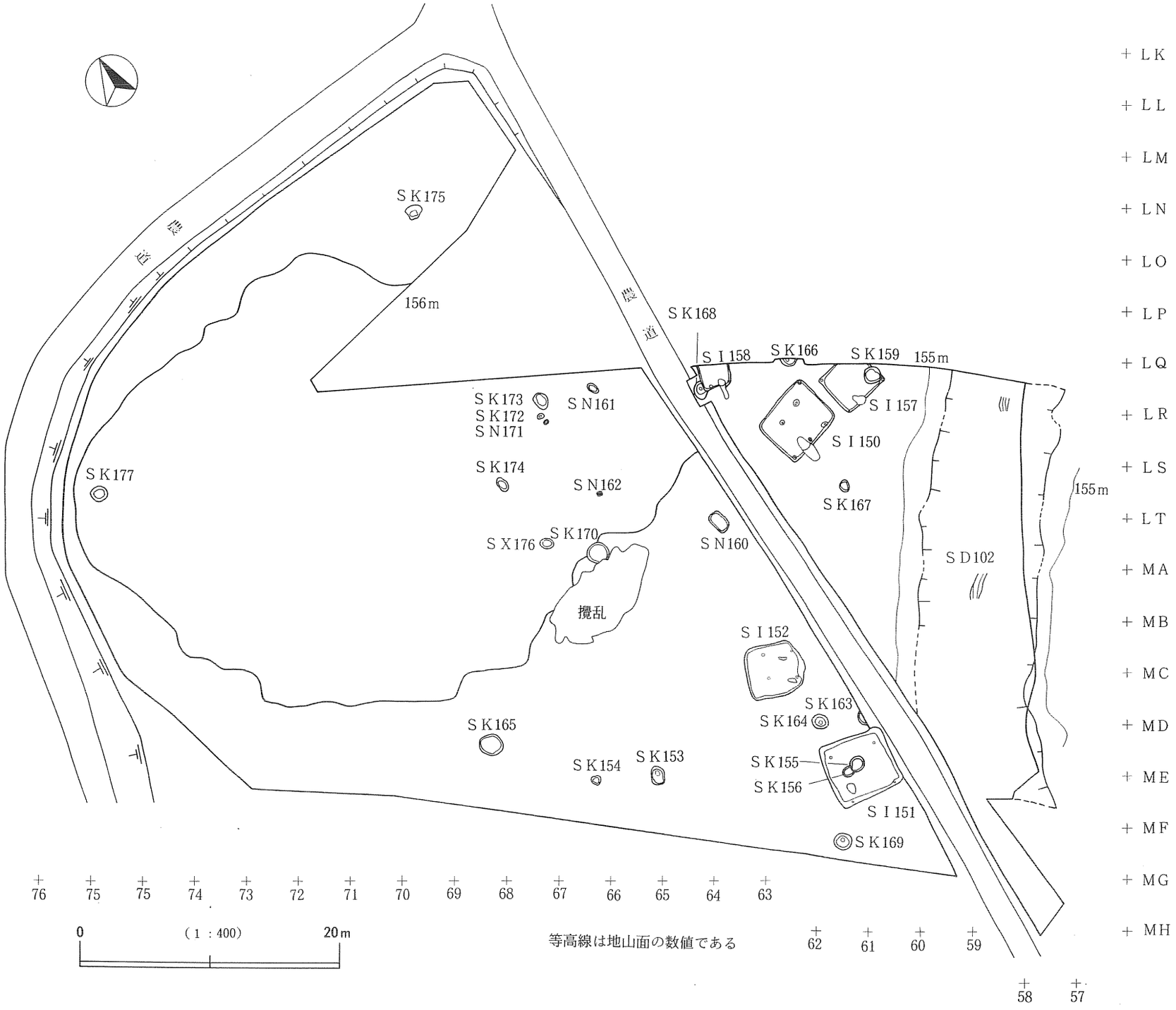
第Ⅱ層　淡黄色土（10ＹＲ8/4)。〔大湯浮石層－十和田a火山灰〕　径１～５ミリの軽石粒が主体であるが黒褐色土（10ＹＲ2/2）中に10～30％混入している場合も多い。平面的にはまばら になっている所もあるが、平均５㎝の層厚でＬＲライン以北では15㎝ほどの層厚がある。竪穴住居跡などはこの層から掘り込まれている。

第Ⅲ層　黒褐色土（7.5ＹＲ2/2)。〔遺物包含層〕　第Ⅳ層に比較して茶色味がかっているが、平面的にはかなり見分けが難しい。

第Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ2/2)。〔遺物包含層〕　径１～２ミリの地山粒子が１％混入する。



第３図　工事計画図と発掘調査区


農道
農道
SK175
156m
SK168
SI158
SK166
SK159
155m
SI157
SI150
SK167
155m
SD102
SK173
SK172
SN171
SN161
SK174
SN162
SK177
SX176
SK170
SN160
攪乱
SI152
SK163
SK164
SK165
SK154
SK153
SK155
SK156
SI151
SK169
+LK
+LL
+LM
+LN
+LO
+LP
+LQ
+LR
+LS
+LT
+MA
+MB
+MC
+MD
+ME
+MF
+MG
+MH
76 75 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63
62 61 60 59
58 57
0 (1：400) 20m
等高線は地山面の数値である

第４図　遺構配置図

縄文時代のＳＫ164土坑などはこの層から掘り込まれている。

第Ⅴ層　暗褐色土（10ＹＲ3/4）。〔地山漸移層〕　径５～15ミリの地山粒子が30％、径20～50ミリの地山ブロックが混入する。

第Ⅵ層　褐色土（10ＹＲ4/6）。〔地山－鳥越軽石質火山灰〕　十和田火山の噴出物である。

鹿角地方には「鹿角四十二館」と総称されるほど中世城館が多い。範囲確認調査によると、太田谷地館跡は舌状台地の舌状部の付け根部分に空堀があること、この台地の沢を隔てた南隣にも平坦な舌状台地があることなどから、両台地は１つの遺跡で、中世の全二郭を有する館跡であるとされていた。だが、昭和62年の第１次調査の結果、舌状台地部分には、竪穴住居跡51軒、土坑73基など遺構が激しく重複して検出され、それらは平安時代末葉に属するものであった。

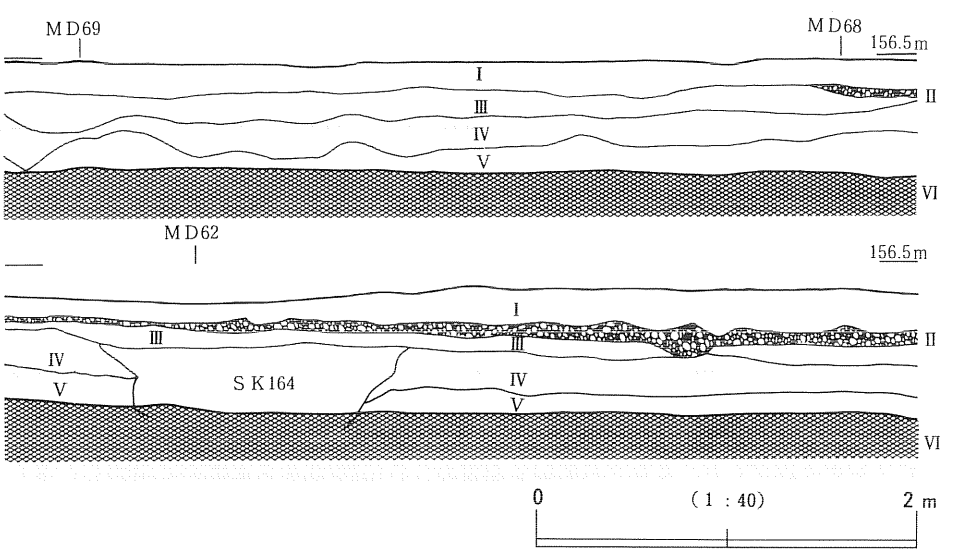
第２節　調査の方法

第１次調査のグリッド設定は、調査区中央に打設されている工事用中心杭No81からNo80を見通し、これを基線とした。この基線は、実際には東南東－西北西を指しているのであるが、仮に南北基線とし、中心杭No80を基準点ＭＡ50とした。第２次調査は第１次調査の基線を踏襲し、中心杭No80からＭＡ51・49のグリッド杭を見通し、基線とした。したがってNo75をＭＡ60として、それを中心に東にＬＴ・ＬＳ・ＬＲ……、西にＭＢ・ＭＣ・ＭＤ……、南に59・58・57……、北に61・62・63……を振り当て、各グリッドの呼称は、４ｍ×４ｍの方眼の南東隅の交点座標をそのグリッドの呼称とし、それはアルファベットとアラビア数字の組み合わせによった。基線と真北のずれは基線から63度48分北偏している。遺構番号は、第１次に調査したＳＤ102はそのままとし、その他は150から遺構の性格に関係なく通し番号を付した。遺構の確認は第Ⅱ層の大湯浮石層と第Ⅲ層、第Ⅵ層地山の上面で行った。

第３節　調査の経過

調査は８月29日から開始し、午前中は作業員説明会、午後からは調査地やプレハブ用地・駐車場の草刈りを行った。９月５日にはグリッド杭打設、および今回の調査区にあった第１次調査の排土移動を終了した。９月２日粗掘を南東のＳＤ102空堀から本格的に開始し、９月６日には空堀のＬＲライン、ＭＡラインの土層断面の観察から２時期あると推定した。９月８日、ＳＤ102上部埋土（黒褐色土＋地山ブロック）は昭和20年頃、農地造成の折に北西の高い方から重機で上を動かし埋めたものである事が判明。９月12日にはＳＤ102空堀の底面を確認し、

１時期であることが確定した。空堀の規模は、ＬＲラインの上面幅で8.22ｍ、深さ6.34ｍで、東の沢に向かって緩い弧を描き、自然地形をうまく利用している。この間、農道の西側つまり、調査区中央部の粗掘も併行して第Ⅱ層、第Ⅲ層上面でそれぞれ遺構確認をしながら掘下げを進める。大湯浮石上面で小さい柱穴様のプランを検出するも断面形が浅いⅢ・鍋底状となっていて、柱穴かどうか判然としないものが多い。９月26日、ＳＤ102と農道の間と農道の南西脇で、大湯浮石層を掘り込んだ方形プランの竪穴住居跡（ＳＩ150、151）を検出した。９月28日、ＭＡラインから北西部の粗掘がだいぶ進行し、土杭や柱穴様ピットが検出されたが、分布密度はさほど高くないようだ。９月30日、ＭＡラインから北東部の粗掘を開始する。10月３日頃までこの地区の粗掘を集中的に行い、土坑や柱穴様ピット・焼土遺構はあるが、数は少なく、竪穴住居跡はないことがわかったきた。全体的な遺構の分布は、農道の両脇周辺に集中する傾向の強い事がはっきりしてきた。10月11日、調査区北東端寄りでは縄文・弥生土器が出土するものの遺構は検出できない。農繁期のためこの頃から作業員の出勤率が半分以下となり、作業の進行が遅くなりだしてきた。10月19日、ＳＩ150竪穴住居跡の東側で検出された竪穴住居跡（ＳＩ157、158）の検出状況写真撮影後精査に入り、10月25日、いずれも焼失家屋で、炭化材上に黄褐色土が流れ込んで堆積している事が判明し、火山灰ではないかと推察された。これら住居跡の精査と併せて、中央部の土坑・焼土遺構などの平・断面図作成・写真撮影も行った。10月下旬になって霜・降雪に悩まされ、調査の作業能率が落ちてきた。11月９日、天気の合間を見計らって、ＳＩ157・158と調査区全体の写真撮影を行った。11月12日、図面のチェック・補足後、資材を撤収して調査を終了した。



第５図　遺跡基本土層図

第４章　調査の記録

第１節　遺構と遺物

発掘調査の結果、縄文時代の土坑６基、弥生時代の土坑２基、焼土遺構１基、平安時代の竪穴住居跡５軒、土坑８基、焼土遺構１基、空堀跡１条など計29遺構を検出した。その分布をみると、空堀跡（ＳＤ102）から調査区中央部までは比較的密であるが、北西側では数が極端に減少する。その他に、遺構周辺に柱穴様ピットがやや広めに分布するが、これらは規模・断面形に規則性がなく、時代を特定できないものが多い。ＳＤ102は第１次調査で検出し、一部調査されていたもので、平安時代末葉とされる３条ある空堀のうち舌状台地部の一番外側に位置しており、今回調査した竪穴住居跡などよりは時期が新しい。竪穴住居跡は５軒のうち４軒が、第Ⅱ層の大湯浮石降下以後に構築されている。

１．縄文時代

(1)　土坑（第22図）

ＳＫ164

ＳＩ150竪穴住居跡の北、ＭＤ61グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形はやや上に開く円筒形で、底面中央に円形のピットが１箇所にある。規模は坑口部1.62ｍ、坑底部0.65ｍ、深さ2.18ｍで、底面のピットは上端0.24ｍ、下端0.15ｍ、深さ0.30ｍで、土層断面の観察によれば幅0.12ｍの棒状の痕跡が認められる。埋土は第５層に地山ブロックが多量に混入している。出土遺物はない。

ＳＫ168

ＳＩ158竪穴住居跡の西、ＬＱ64グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形はやや上に開く円筒形で、基本層位の第Ⅲ層から掘り込まれている。底面中央に円形のピットが１箇所にある。規模は坑口部1.27ｍ、坑底部1.08ｍ、深さ1.30ｍで、底面のピットは上端0.27ｍ、下端0.14ｍ、深さ0.56ｍである。出土遺物はない。

ＳＫ169

ＳＩ151竪穴住居跡の南西、ＭＦ61グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形はやや上に開く円筒形で、底面中央に円形のピットが１箇所にある。規模は坑口部1.45ｍ、坑底部1.37ｍ、深さ1.41ｍである。底面のピットは上端0.30ｍ、下端0.20ｍ、深さ0.38ｍである。埋土は

全体的にレンズ状の堆積を示す。出土遺物はない。

ＳＫ163

ＳＩ151竪穴住居跡の北、ＭＣ61グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状である。規模は坑口部1.18ｍ、坑底部1.06ｍ、深さ0.25ｍである。出土遺物はない。第Ｖ層の地山漸移層から掘り込まれており、埋土は大湯浮石粒子を含まず、黒・暗褐色土で地山細粒を含むことから、縄文時代に属するものと判断した。

ＳＫ165

ＭＤ68グリッドに位置し、平面形は円形で、断面形は浅皿形である。規模は坑口部1.78ｍ、深さ0.10ｍで底面はややデコボコしている。出土遺物はない。埋土は黒褐色～褐色で大湯浮石粒子を含まず、ＳＫ169と似た様相を呈することから縄文時代に属するものと判断した。

ＳＫ177

北西端のＬＳ75グリッドに位置し、平面形は円形で、断面形は上がやや開く円筒形である。規模は坑口部で1.36ｍ、坑底部で0.98ｍ、深さ1.13ｍである。埋土は12層に分層したが、４～９層に地山粒子・ブロック混入し、11層は地山主体で厚さ0.13～0.22ｍである。形態・規模・埋土の状況から縄文時代に属するものと判断した。

２．弥生時代

(1)土坑（第23・26図）

ＳＫ172

ＬＲ67グリッドに位置し、第Ⅲ層を掘り下げていて検出した。断面形は上がやや開く円筒形である。規模は坑口部で0.68ｍ、坑底部で0.48ｍ、深さ0.69ｍである。遺物は、弥生土器(第34図１～３)が埋土より出土した。外面に細かい撚糸文を施すもので、弥生時代末葉の小坂Ｘ式に比定される。

ＳＫ173

ＬＲ67グリッドに位置し、平面形は不整楕円形で、断面形は鍋底形である。規模は坑口部で1.35ｍ、坑底部で1.11ｍ、深さ0.55ｍである。埋土は１層が大湯浮石主体で４層にも多く混入する。これは埋まりかけていて、中ほどがくぼんでいる時にレンズ状に堆積したもので、他の土層は褐色～黒褐色を呈する。遺物は弥生土器、フレイク、土師器杯・甕の破片が混じって出土しているが、確認面や埋土の状況から、弥生時代の土坑と考えられる。第26図４～10は弥生土器で４・５・７は外面に朱を塗った壺形土器かと思われるもので、４と６は口唇部に細い撚糸文を施文しており、小坂Ｘ式に比定される。11はロクロ使用の土師器杯である。

(2)　焼土遺構（第24・26図）

ＳＮ161

ＬＱ66グリッドの第Ⅲ層中で検出した。平面形は楕円形で0.95×0.62ｍ、厚さは0.04ｍで、特に下に掘り込みはない。確認面で弥生土器片が出土している。第26図12・13は胴部に細い撚糸文を縦に施文しているもので、小坂Ｘ式に比定される。

(3)　**柱穴様ピット**（第25・26図）

ピット１

ＬＱ67グリッドで検出した。平面形は円形で、径0.38ｍ、深さ0.46ｍで、埋土は黒色土と浮石粒子が混じる。小坂Ｘ式に比定される土器片（第26図14）が出土している。

３．平安時代

(1)　竪穴住居跡

ＳＩ150　竪穴住居跡（第６～８・27～29図、第４表、図版４・５・10・13・14）

ＬＲ61・62、ＬＱ61～63の各グリッドにまたがり、主軸方位がＳ－20°－Ｅ、壁長が東壁3.9ｍ、西壁3.95ｍ、南壁4.83ｍ、北壁4.8ｍの方形プランを呈し、南壁の南西隅部寄りにカマドを付設した竪穴住居跡である。本住居跡の周辺グリッドは第Ⅱ層（大湯浮石－以下、浮石と呼ぶ）の堆積がほとんどなく、表土Ⅰ層下はⅢ層の層序になるが、ＬＳ・ＬＲ62グリッドの一部にⅡ層がわずかに残り、本住居跡の南西隅部は、その一部を掘り込んだ状況で検出された。壁高は、東壁46㎝、西壁58㎝、南壁42㎝、北壁56㎝で、５°～21°の傾斜で立ち上がる。柱穴は、北西隅部を除く各隅部、南壁下に３本、北壁から1.2～1.3ｍ内側に２本の計８本設けられ、その埋土は地山粒と浮石粒が混入した黒褐色土である。Ｐ２・３はカマドの位置から上部構造に伴う柱穴の可能性がある。床面はカマドが付設された南西部分を除いて貼床が施され、一段高い状況を呈する。したがって低い部分に相当する南西部は平坦でよく踏み固められ堅緻であるのに対し、貼床はやや軟弱で北東隅部が特に著しい。床面積は19㎡を測る。埋土は15層に分層された。１～３・９・10・13～15層は浮石粒・地山粒を混入する黒褐色土を主体とし、１・２層は浮石粒がシモフリ状に多量に混入する。４層は地山軽石ブロックを主体、５～８・11・12層は浮石・軽石ブロックを主体とする。したがって４～８・11・12層は人為的堆積を呈することから、北東～南東方向からの投棄が想定できる。カマドは南壁の南西隅部寄りに付設されており、両袖部分を円形～楕円形に掘り込んだ後、手前の床面を幅70㎝、長さ100㎝の不整楕円形に３～７㎝掘り下げている。両袖部は灰白色粘質土・地山土・黒褐色土を積んで構築している。支脚は地山土を積んだ上部に土師器杯を逆位に据えている。煙道部はやや起伏を呈しながら緩く立ち上がり、煙出部で一旦くぼんでからやや垂直に立ち上がる。埋土は31層に分層され、９～11層が袖部構築土、２・３・６・８・９・18～20・22～28層は天井部の崩落土である。また、芯

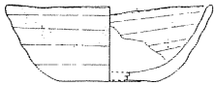
材として20～40cmの扁平な石、多量の土器破片が使用されている。

遺物はカマド及びカマドに隣接する北東部分に集中して出土した。鉄滓１点、須恵器破片２点、弥生土器破片２点で、その他はすべて土師器破片である。小破片を含めた土師器破片の総点数は100点をややこえるが、接合後図示できた破片・復原土器数は35点である。杯・椀が10点で、他の25点は土師器甕である。またロクロ成形の土師器は９点（杯４点・椀１点・甕４点）で他は非ロクロ成形である。住居跡から出土する土器については出土地点・層位・接合関係から転用・遺棄・廃棄・流入のケースが想定される。（註１）以下では本住居跡出土の土器破片について可能なかぎり想定を行う。なお、土器の説明は最初が挿図中の番号で、括弧内が現場で取り上げた時の番号で、接合できたものである。

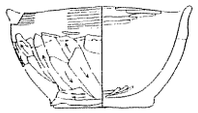
①カマド構築時に芯材・支脚に転用された土器は出土状況から16(74)・21(86)・23(35)・25(78)・27(66)・28(56)・36(42)・37(52・77)・42(31・33・44・58・69・76・80～82)・43(83)・45(22・34・53・87)・46(77)・47(15・16・46・70・71・72・79・85)・48(28・41・43・49・63・67)・49(59・61)の15点である。これらの土器はカマドの支脚・両袖部を構築する９～11層・天井部崩落土の２・３・６・９・18～20・22～28層から出土している。②床面から埋土中にかけて出土する流入の土器は24(４)・26(24)・30(36)・32(47)・33(18)・34(45)・35(５)・38(13)・39(48)・40(38)・44(64)・50(８)である。また転用と想定する①の土器の中で37(52)・42(31)・45(22・87)・47(46・79)・48(41)の一部(括弧内)の破片は流入と想定される。これらの土器はカマド天井部崩落後の１・13～15・21層上面、埋土の自然堆積を呈する１～３・９層から出土している。③床面から埋土にかけて出土する廃棄された土器は②の場合との識別が困難な場合が多い。しかし本住居跡の場合、埋土の一部が人為的堆積を呈することから、少なくともその層に含まれた土器破片は廃棄と想定できる。19(29・30)、①の土器の中では47(15・16)・48(28・41)の一部の破片で埋土中の4・12・14層から出土している。④遺棄は住居廃絶時に残された場合であるが、22(６・25)は埋土の３・９層下部から出土していることからこのケースに想定される。

ＳＩ151　竪穴住居跡（第９・10・30図、第５表、図版６）

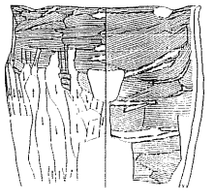
ＭＤ60・61、ＭＥ60・61グリッドに位置し、第Ⅱ層（大湯浮石）上面で検出した。主軸方位がＳ－５°－Ｗ、壁長が東壁4.65ｍ、西壁4.95ｍ、南壁4.95ｍ、北壁4.75ｍの方形プランを呈し、南壁の南西隅部寄りにカマドを付設した竪穴住居跡である。壁高は東壁70cm、西壁62cm、南壁64cm、北壁67cmで１°～２°の傾斜で立ち上がる。壁直下には、幅７～35cm、深さ３～16cmの壁溝が巡り、底面に径10～20cm、深さ３～10cmのピットが検出された。カマド付設部分では、付設以前に壁溝の埋め戻しが行われている。埋土は20層に分層されたが、大湯浮石粒・地山粒を混入する黒褐色土を主体とした自然堆積を呈する。床面積は20㎡を測り、よく踏み固められているが、南東隅部、南西隅部の貼床が施された部分はやや軟弱である。柱穴は南側壁溝内に２



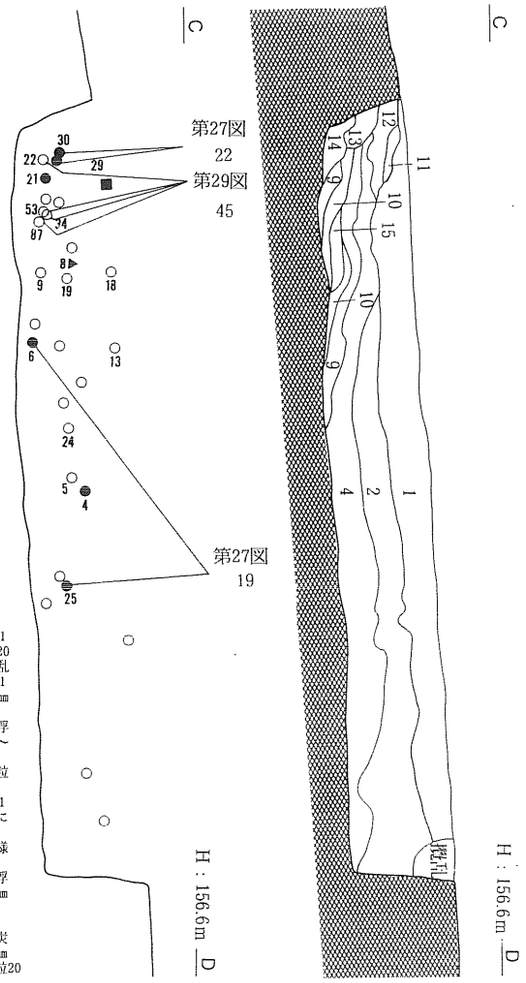
第27図19（１/５）

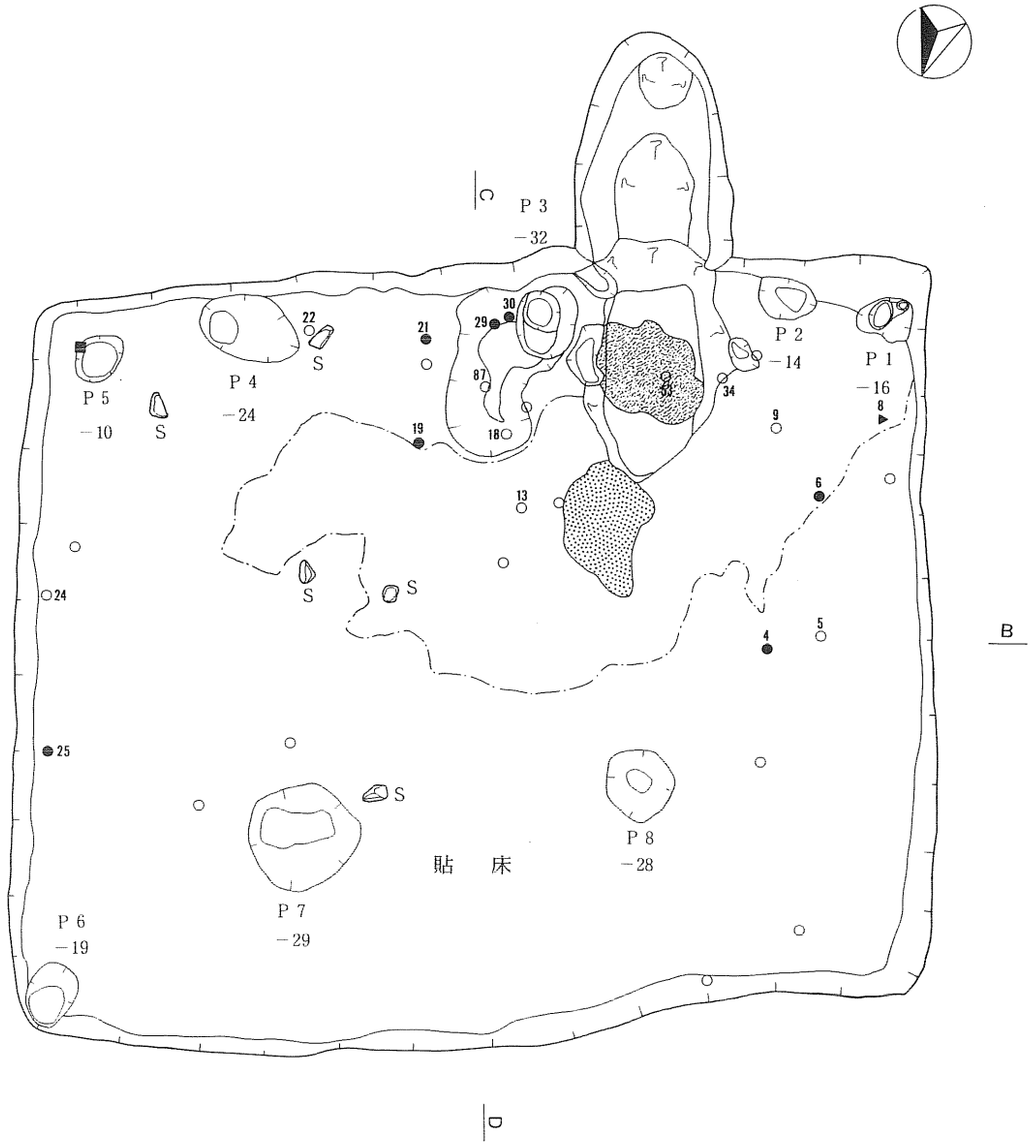


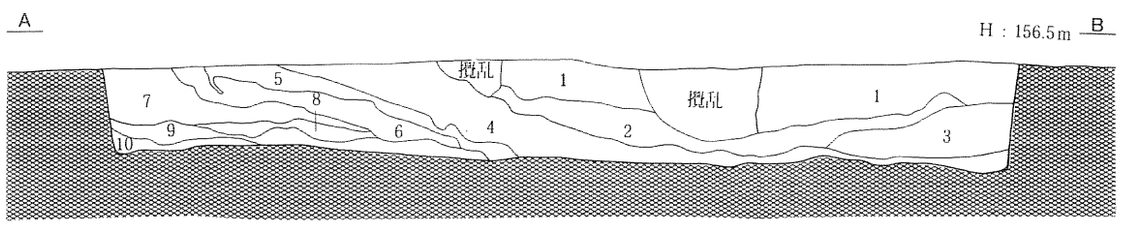
第27図22（１/５）



第29図45（１/８）



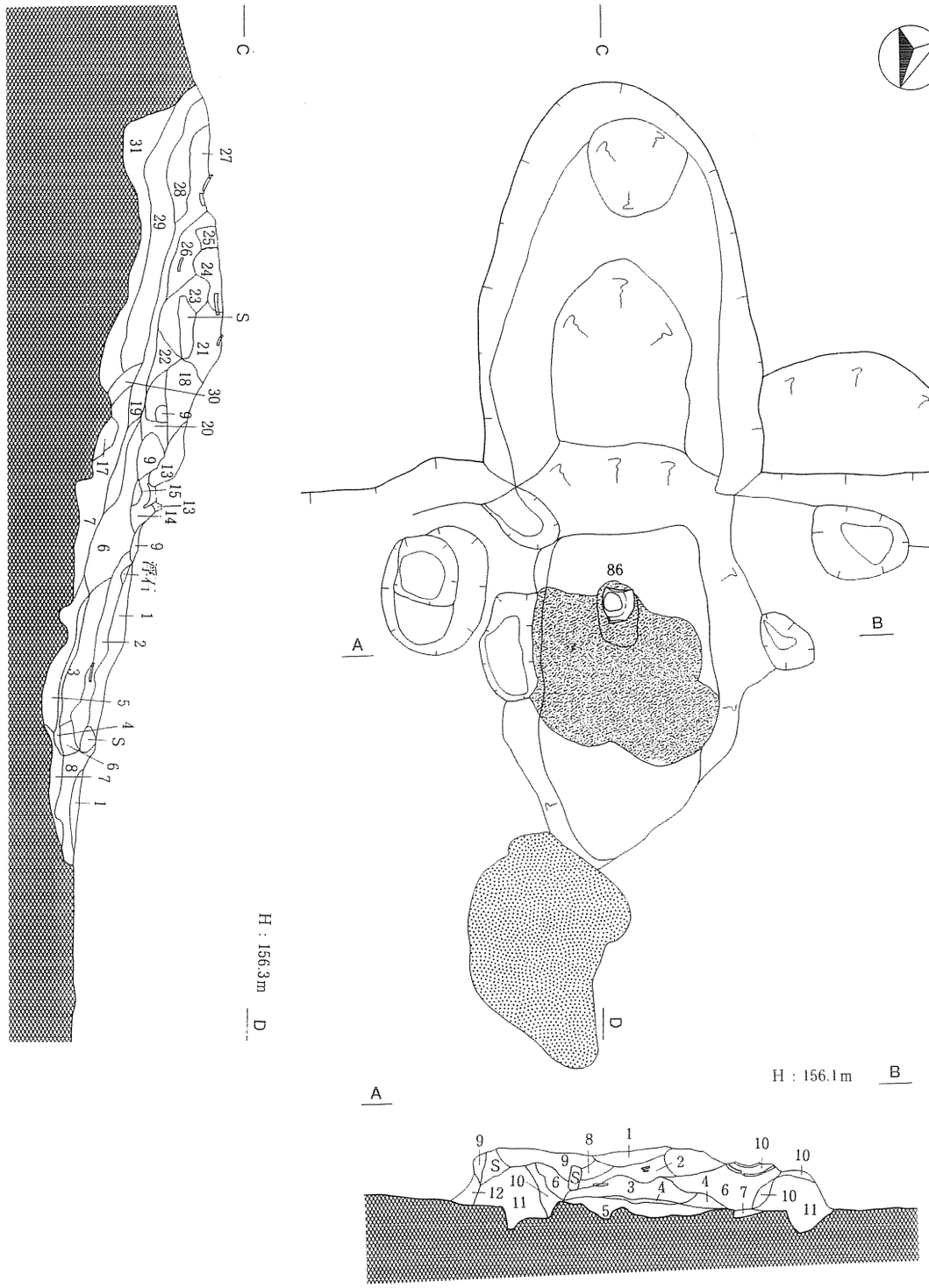




1	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、１㎜～３㎜大の浮石粒混入、10㎜～20㎜大の浮石５％混入、部分的に攪乱
2	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、１㎜～３㎜大の浮石粒50％、軽石５㎜～30㎜大50％、炭化物３㎜大２％
3	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜～３㎜大30％、軽石５㎜～30㎜大10％、部分的に攪乱
4	黒 色 土（10ＹＲ２/１）	軽石ブロック、１㎜～２㎜の浮石粒３％、しまりあり
5	黒 色 土（10ＹＲ２/１）	粒子細、粘性あり、しまりあり、１㎜～３㎜大の浮石粒30％、部分的に20㎜～30㎜大の浮石２％混入
6	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	浮石ブロック土、基本的に11と同様であるが、しまりが大
7	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜～５㎜大40％、軽石粒10㎜～20㎜大５％、炭化物３㎜大１％
8	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	浮石ブロックを多量に混入
9	黒 色 土（10ＹＲ２/１）	粒子細、粘性あり、しまりあり、炭化物２㎜～５㎜大１％、浮石粒５㎜大１％、地山粒１㎜大１％、軽石粒20㎜～30㎜一部混入
10	黒褐色土（10Ｙ'Ｒ２/２）	浮石ブロック混合土、しまりやや欠ける、浮石粒１㎜～５㎜大とブロック状を呈する
11	にぶい黄色土（7.5ＹＲ６/３）	浮石ブロック１㎜～10㎜大、黒褐色土（10ＹＲ２/２）混合、しまりなし
12	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりなし、１㎜大の浮石粒２％、軽石粒５㎜～10㎜大１％
13	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりなし、２㎜～５㎜大の浮石粒３％
14	黒褐色土（10ＹＲ３/２）	粒子細、粘性あり、しまりなし、１㎜大の浮石粒若干、軽石３㎜～５㎜大１％
15	黒褐色土（10ＹＲ３/２）	粒子細、粘性あり、しまり強、浮石粒、軽石粒、炭化物、灰白色粘土粒混入

0　（１：40）　2 m

第６図　ＳＩ150竪穴住居跡



1	黒褐色土（10ＹＲ３/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒１㎜～２㎜大、焼土粒２㎜～３㎜大10%混入、炭化物２㎜大１%混入
2	褐　色　土（10ＹＲ４/４～４/６）	粒子細、粘性中、しまり強、軽石粒５㎜大５%、焼土粒３㎜大２%、浮石粒若干混入
3	褐　色　土（10ＹＲ４/６）	粒子細、粘性中、しまり強、軽石ブロック若干、焼土粒２㎜大３%、炭化物１㎜大１%混入
4	褐　色　土（7.5ＹＲ４/６）	粒子細、粘性なし、しまりあり、焼土粒、炭化物多量混入、黒褐色土粒50%混入
5	明赤褐色土（５ＹＲ５/８）	しまり強、軽石ブロック状混入、（焼土層）
6	褐　色　土（10ＹＲ４/６）	粒子細、粘性中、しまり強、浮石粒２㎜大10%、焼土粒３㎜大２%混入
7	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまり強、浮石粒若干、焼土粒１㎜～２㎜大２%、軽石ブロック状混入
8	黒褐色土（10ＹＲ３/２）	粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒、軽石粒、焼土粒混入、（2.5Ｙ６/３）にぶい黄色粘土ブロック混入
9	にぶい黄色粘土（2.5Ｙ６/３）	粒子細、粘性中、しまり強、焼土粒２㎜大１%混入、（５Ｙ７/２）灰白色ブロック混入
10	にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）	粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜大５%、軽石粒１㎜大10%混入
11	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒１㎜～２㎜大20%、軽石粒２㎜～６㎜大５%混入
12	黒　色　土（10ＹＲ２/１）	粒子細、粘性中、しまりやや欠ける、地山粒２㎜～３㎜大２%混入
13	黒褐色土（10ＹＲ３/２）	粒子細、粘性若干、しまりやや欠ける、浮石粒多量混入、軽石ブロック状５%
14	黒褐色土（10ＹＲ２/３）	粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒、軽石粒10%混入、炭化物１㎜大若干混入
15	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒10%、軽石ブロック状２%混入
16	褐　色　土（7.5ＹＲ４/６）	粒子細、粘性あり、しまりあり、焼土粒、軽石粒多量混入、黒褐色土状５%混入（４層に対応できる）
17	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	７に対応できる、軽石粒及びブロック多量混入
18	９に対応	
19	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性あり、しまりあり、軽石粒10%混入
20	14に対応	
21	13に対応	
22	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒５%、軽石粒３㎜大５%混入
23	19に対応	
24	褐　色　土（10ＹＲ４/４）	粒子細、粘性あり、しまりあり、軽石粒の混入３㎜大５%、浮石粒３㎜大１%
25	褐　色　土（10ＹＲ４/４）	粒子細、粘性あり、しまりあり、軽石粒の混入１㎜～５㎜大10%
26	22に対応	
27	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒及び軽石粒多量混入、（10ＹＲ４/４）褐色土ブロック混入
28	黒褐色土（10ＹＲ２/３）	粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒若干、軽石粒多量混入、軽石ブロック（赤変）５%混入
29	黒　色　土（10ＹＲ２/１）	粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜大若干、軽石粒３㎜大１%混入
30	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性あり、しまりやや欠ける、軽石粒２㎜～５㎜大10%混入
31	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性あり、しまりあり、軽石粒２㎜～３㎜大５%混入

0　（１：20）　1 m

第７図　ＳＩ150竪穴住居跡　カマド

第８図　ＳＩ150竪穴住居跡カマド　遺物出土状況

本、北壁から0.1ｍほど内側に２本設けられ、径13～23㎝を測り、埋土は浮石粒・地山粒を少量混入する。カマドは南西隅部の貼床上に付設されているが、かなり崩壊していたため下部構造をわずかにうかがえる程度であった。貼床を含めた埋土の状況から主軸方向を同一にする２時期のカマドが想定できる。第１期は貼床面から深さ15～20㎝、幅28～42㎝で南壁に向かってかなり起伏をもちながら掘り込まれているが、南壁に進むにつれて掘り込み面が不明瞭になり、煙道部は看取できなかった。埋土から、河原石、鞴羽口が１点出土したことから、芯材として石を使用し、支脚として鞴羽口が転用されたと想定できる。第２期は、第１期を一度埋め戻してから約15㎝南壁寄りに構築されている。焚口部は径40～60㎝、深さ５～10㎝の楕円形で、南壁に向かう煙道部はかなり起伏をもちながら緩く立ち上がる。袖部・支脚は不明であるが、周囲に河原石、灰白色粘質土が散在していたことから、芯材・構築材としてこれらが使用されたと想定できる。両時期とも、埋土の状況、特に焼土面を重視して位置決定を行ったが、第２期の北東部に、やはり貼床上で同レベルの焼土面が存在する。掘り込みは看取できなかったが、第２期のカマドに伴うものかは不明である。

遺物は、番号を付して取り上げた土器破片25点、鞴羽口１点、鉄滓１点、その他に埋土一括が数点である。番号を付した土器破片はカマドの埋土・周囲の床面に集中して出土した土師器甕の破片のみである。出土状況及び接合関係から遺棄された２個体の土師器甕が識別でき、他は流入した可能性が強い。57(２・５～８・10・11・19・20・23・25)は、口縁部が「く」の字に外反する小形の甕で、58～60(３・４・９・15～18)は、同一個体で口縁部がやや外傾し、体部の膨らみが少なく、底部がわずかに丸底風を呈する。いずれも粗いケズリ・ナデの調整が施されている。61(24)は第１期のカマド底面から出土し、溶融物の付着した鞴羽口の破片である。外面は丁寧なケズリ調整が施され、内面は成形の工程をうかがわせる痕跡があるが、過熱のためか遺存状態がきわめて悪い。

ＳＩ152　竪穴住居跡（第11・31図、第６表、図版６）

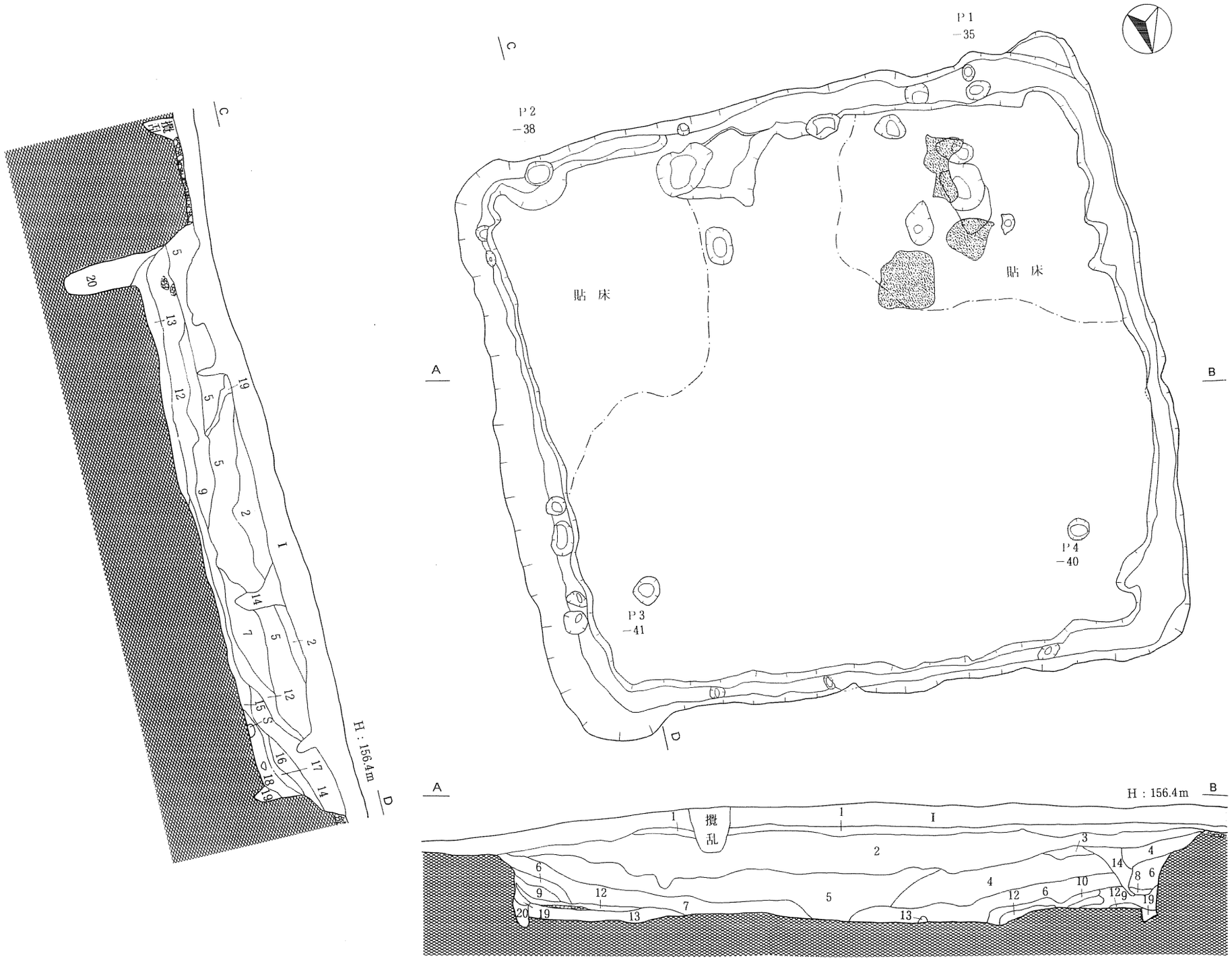
ＭＢ62・63グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で検出した。主軸方位がＳ－80°－Ｅ、壁長が東壁3.35ｍ、西壁3.85ｍ、南壁3.95ｍ、北壁3.3ｍの隅丸方形プランを呈する竪穴住居跡である。壁高は東壁42㎝、西壁45㎝、南壁42㎝、北壁は４層上面まで掘り下げてしまったため残存壁高27㎝で、10°～39°の傾斜で立ち上がる。全体がやや外側に張り出すが、東壁が特に顕著で傾斜も緩い。柱穴は東壁際に２本、西壁から1.2～1.4ｍ内側に２本設けられ、径20～30㎝を測り、埋土は地山粒を多量に混入する黒褐色土である。配置としては、住居跡の主軸方向とややズレがある。埋土は10層に分層され、６・７・８・10層は貼床に相当する。１～６層は大湯浮石粒・地山粒を混入する黒褐色土・暗褐色土で２・５層には大湯浮石粒がシモフリ状に多量に混入する。床面積は14㎡で、北東隅部を除く全面に貼床が施されている。北東隅部はよく踏み固めら

れているが、貼床の部分はやや軟弱で、特に南西部はかなり軟弱である。カマドは東壁の北東隅部寄りに付設され、大部分は貼床上に位置する。構造は不明な点が多いが、床面の焼土範囲が焚口部に相当し、両側のピット状の落ち込みが袖部の掘り方と想定できる。埋土は３層に分層され、灰白色粘質土・地山土が主体であることから、これらはカマド構築材に、また周辺に散在する石は芯材とし使用されたと考えられる。支脚・煙道部は不明であるが、支脚の位置と思われる部分で、著しい過熱のため赤変した粘土塊が５点出土したことから、支脚の芯材あるいは天井部の崩落土と考えられる。並置する形で南東隅部で焼土を検出した。北東隅部のカマド焚口部と同様に床面（貼床）を掘り込んだ形跡はなく、主軸方向も一致する。本遺構における初期のカマドを想起させるものである。

遺物は、カマド付近で出土した土器破片に番号を付して取り上げ、他は小破片のため埋土一括で取り上げた。番号を付した土器破片は10点である。69（１・２）が須恵器甕の破片である以外は、全て土師器甕の体部破片である。接合資料は69以外１点もなく、また、出土状況から埋土一括として取り上げた遺物（縄文土器・土師器）も含めて流入・混入と考えられる。

ＳＩ157　竪穴住居跡（第12～16・32図、第７表、図版７・８・10・15）

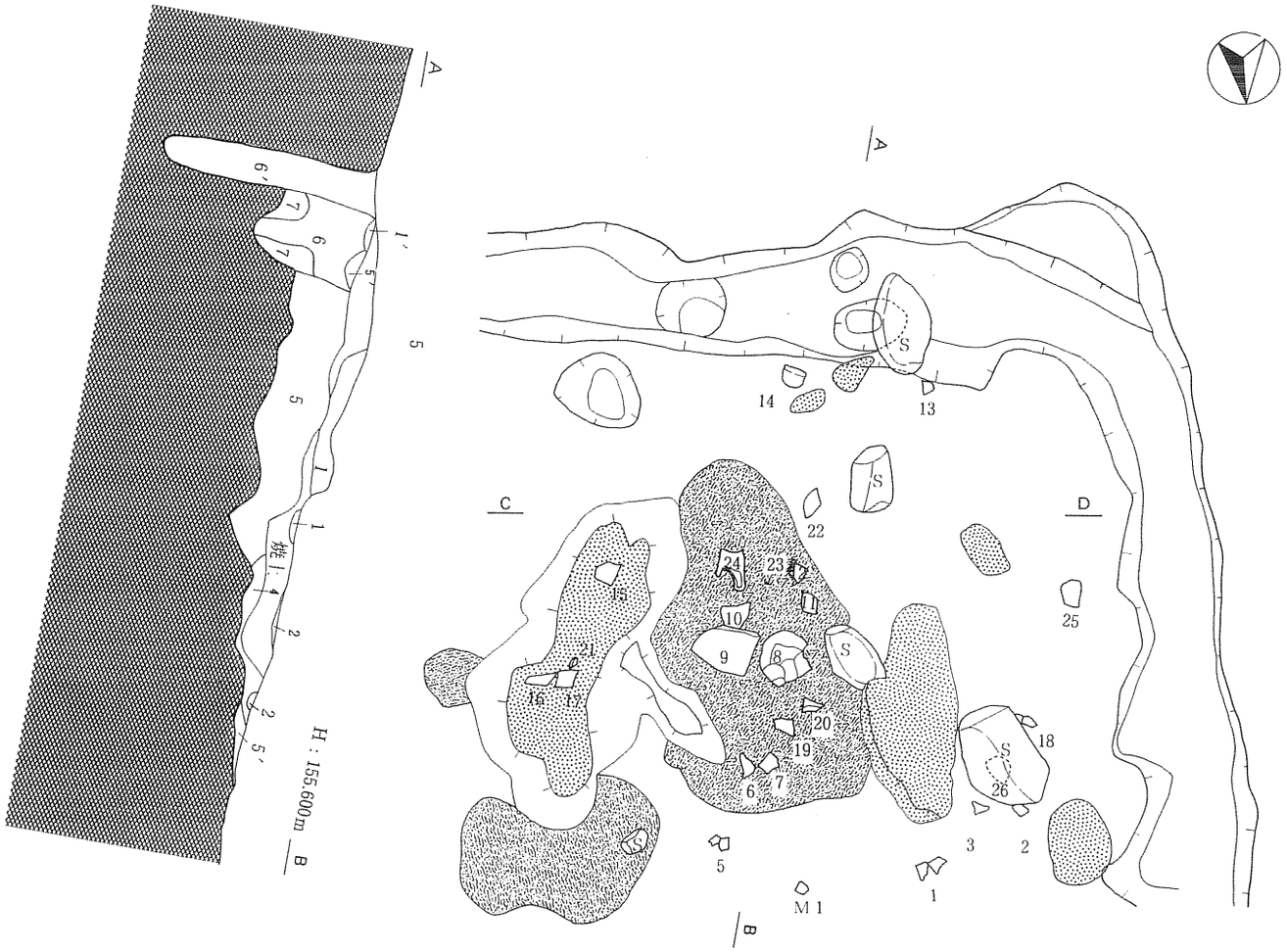
ＬＱ60・61グリッドに位置し、北・東壁の一部が調査区外になるためその全容を明らかにはできなかったが、南壁の南西隅部寄りにカマドを付設した竪穴住居跡である。南東隅部はＳＫ159と重複しているが、検出時にＳＫ159が新しいことを確認している。西壁から71～91㎝離れたところにＳＩ150が位置し、ＳＩ150の東壁と本住居跡の西壁はほぼ平行関係にある。また、東部にはＳＤ102空堀跡が位置し、それに伴う整地事業の始まりのところに一部あたるためか、かなり削平されていた。したがって確認面はカマドから西側は第Ⅲ層上面、東側は地山面である。主軸方位がＳ－15°－Ｅ、壁長が西壁3.4ｍ、南壁3.7ｍ、東・北壁は不明であるが、ほぼ方形プランを呈すると考えられる。壁高は東壁21㎝、南壁35㎝、北壁36㎝で５°～７°の傾斜で立ち上がる。壁直下には幅６～15㎝、深さ５～10㎝の壁溝がカマド付設部分を除いて巡り、底面には円形・楕円形の小ピットを伴う。埋土には炭化物、焼土粒が混入する。床面は緩い起伏を呈し、やや軟弱で、西壁から50～90㎝内側の部分に貼床が施されている。全面に炭化物・焼土粒が多く混入し、北東部では焼土が散在している。床面積は10㎡であるが、調査区外の部分を含めた推定では14㎡と思われる。柱穴は各隅部・西壁からやや内側に計５本設けられ、埋土には炭化物・焼土粒・地山粒が混入する。柱穴の配置から東壁寄りにも対応する２本の柱穴を想定できる。埋土は14層に分層され、炭化物・焼土粒・大湯浮石粒・地山粒を混入する。10層は床直上の堆積土であるが、赤変した地山ブロック、多量の焼土粒が主体であるため床面の可能性をうかがわせる。10層の上面には部分的に炭化物を看取できた。５層は所謂火山灰である。基本層位の第Ⅱ層（大湯浮石）とはまったく異質のものである。本住居跡の中央部・壁際を除

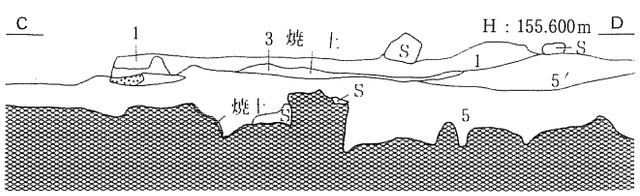


1　黒褐色土（10ＹＲ３/１）　粘性弱、しまり中、白い軽石粒１㎜～５㎜大30%
2　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性弱、しまり中、白い軽石粒１㎜～５㎜大30%、火山灰―大湯浮石
3　２と同色・同質であるが、やや褐色味が強く、白い軽石の混入が少ない
4　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性弱、しまり中、白い軽石粒１㎜～３㎜大５%、大湯浮石粒１㎜～２㎜大30%、地山粒３㎜10%
5　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性弱、しまり中、地山粒１㎜～15㎜大５%、白い軽石粒３㎜大10%、細砂（大湯浮石層？）10%
6　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性弱、しまり中、地山粒１㎜～30㎜大30%、３に比し粒子の大きいのが目につく、白い軽石粒１㎜～３㎜大15%、細砂（大湯浮石層？）
7　２と同じ
8　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性弱、しまり弱、細砂40%、白色軽石粒１㎜～２㎜大５%
9　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性弱、しまり弱、地山粒５㎜～20㎜10%、細砂20%、白色軽石粒２㎜～３㎜大１%、６と８の中間
10　褐 色 土（10ＹＲ２/１）　粘性中、しまり弱
11　８と似るが白色軽石、細砂の混入度やや高い
12　地山ブロックと黒褐色土が混じりあっている、粘性弱、しまり弱
13　10と同じ（貼床）
14　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性中、しまり中、地山粒２㎜～５㎜大５%、浮石１㎜～５㎜大10%（撹乱か？）
15　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性弱、しまり中、ややボソボソ、地山粒２㎜～５㎜大15%、浮石粒１㎜～５㎜大20%
16　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性弱、しまり中、地山粒５㎜～10㎜大１%、浮石粒１㎜～５㎜大25%
17　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性弱、しまり中、浮石粒１㎜～５㎜大15%、地山粒５㎜～10㎜大１%
18　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粘性弱、しまり中、浮石粒１㎜～５㎜大５%、地山粒５㎜～10㎜大１%、２㎜～５㎜大10%
19　黒褐色土（10ＹＲ２/２）
20　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性弱、しまり弱、地山粒10㎜～30㎜大５%、浮石粒１㎜～２㎜大10%

0　（１：40）　2 m

第９図　ＳＩ151竪穴住居跡

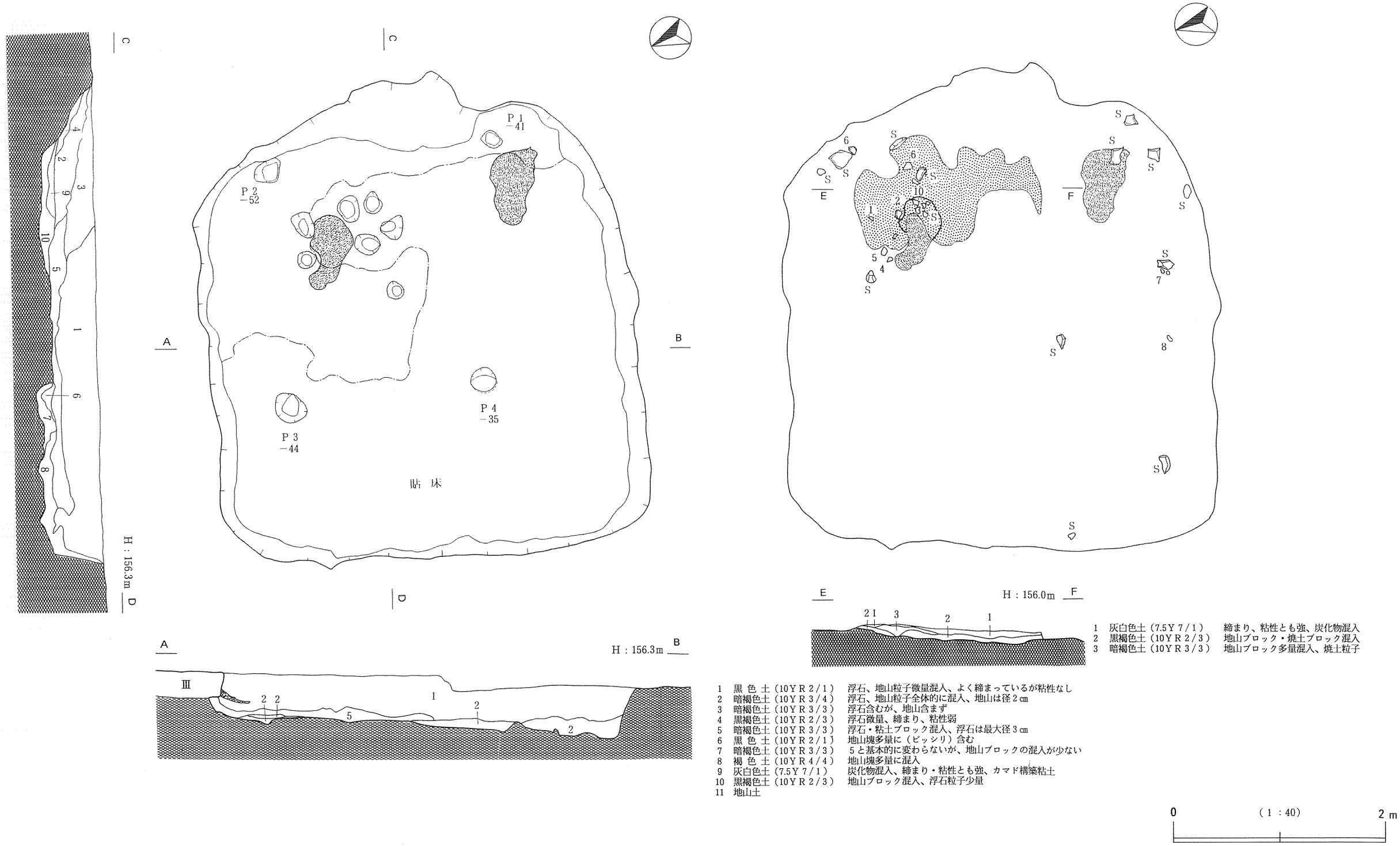




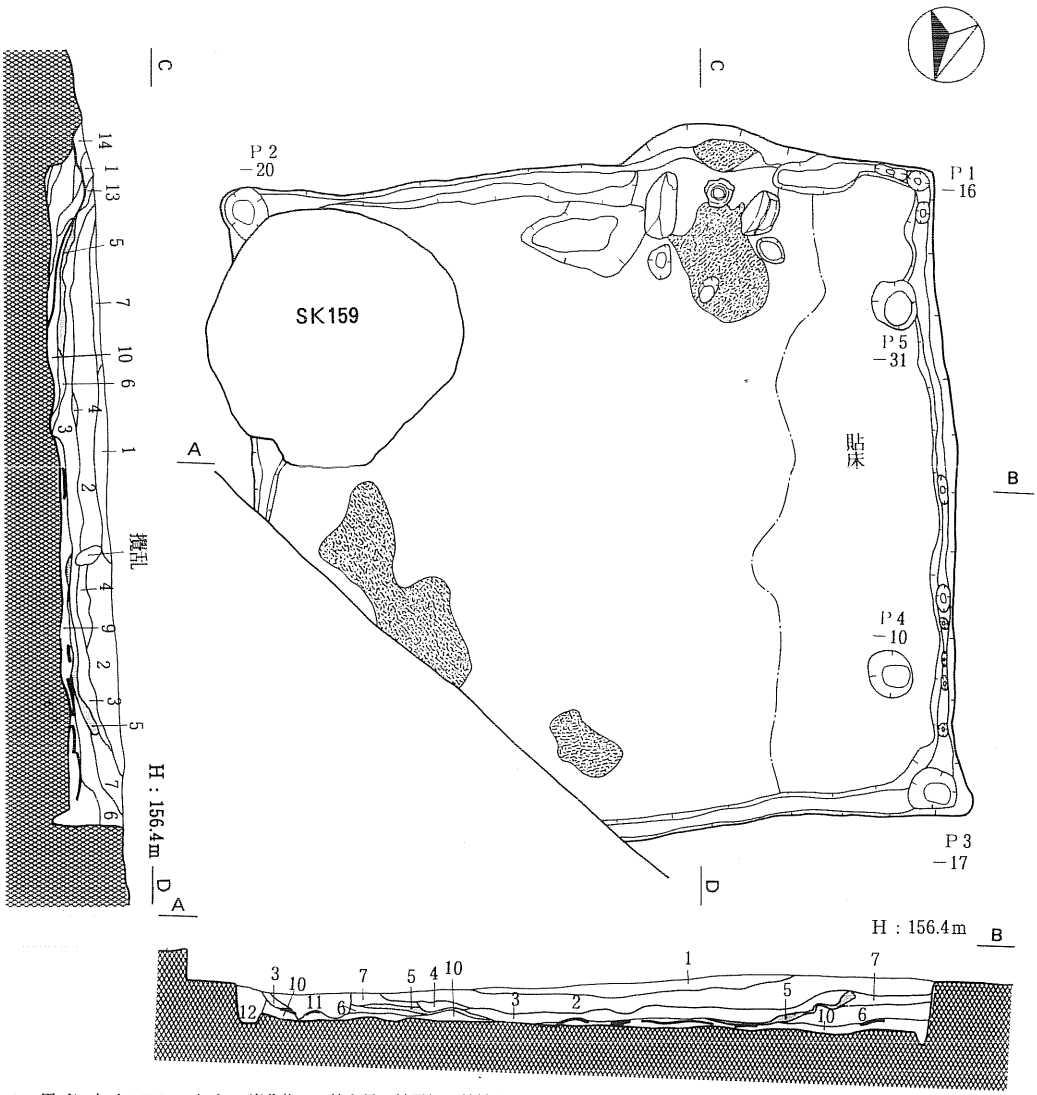
1　地山、大湯浮石、にぶい黄褐色（10ＹＲ５/４）粘質、黒褐色土（10ＹＲ３/２）が混じったもの、地山ブロック（10～30㎜）が全体の30%位混入全体的に見れば、粘土の大きいブロック状となる、一部天井の崩落土、粘性、しまり中
2　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性中、しまり中、地山細粒10%混入
3　褐 色 土（10ＹＲ４/６）　粘性中、しまり中、ややボロボロしている（焼土）、地山細粒20%混入、加熱を受け赤色変化したもの
4　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性中、しまり中、地山細粒５%混入
5　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性中、しまり中、地山大粒20%混入、（貼床）
6　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性中、しまり中、地山細粒30%混入
6′　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　６とほぼ同じだが黒味が強くボソボソしている
7　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粘性中、しまり中、地山中粒～大粒40%混入

第10図　ＳＩ152竪穴住居跡　カマド平面図・遺物出土状況

0　（１：20）　1 m



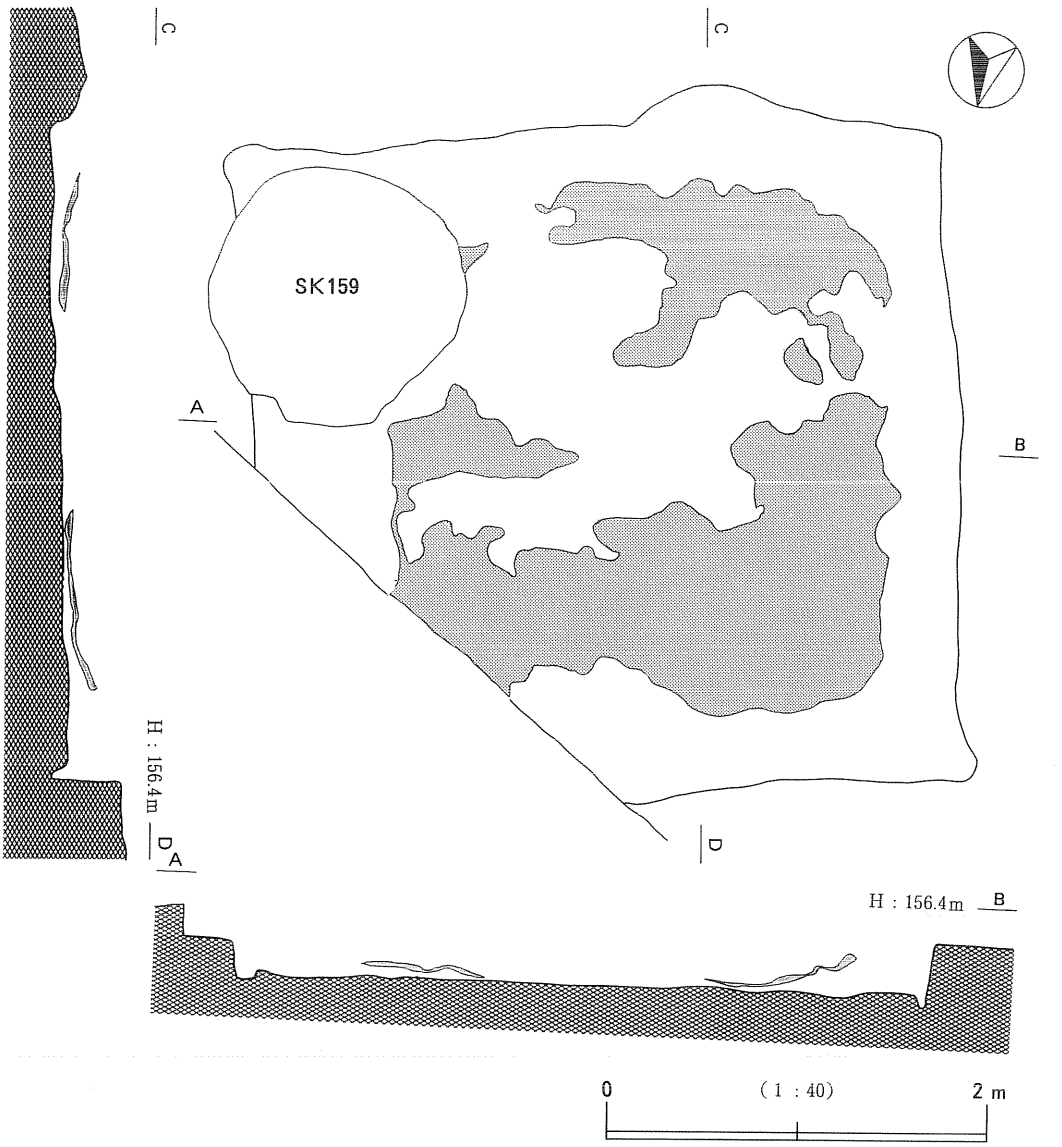
第11図　ＳＩ152竪穴住居跡　平面図・遺物出土状況



1　黒 色 土（10ＹＲ1.7/１）　炭化物シミ状多量、粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜～２㎜大２％
2　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性若干、しまり強、浮石粒１㎜～３㎜大20%、地山粒１㎜～５㎜大15%、炭化物２㎜大１％
3　黒 色 土（10ＹＲ1.7/１）　炭化物シミ状層、しまりあり、地山粒１㎜大５％、焼土粒１㎜～２㎜大２％
4　黒 色 土（10ＹＲ２/１）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜～５㎜大５％、炭化物シミ状20%、地山粒１㎜～３㎜大10%
5　にぶい黄～明黄褐色土（2.5Ｙ６/４～６/６）　粒子細、粘性なし、しまりあり（白頭山火山灰）
6　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜～３㎜大20%、炭化物１㎜～２㎜大２％、焼土粒１㎜大２％
7　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性若干、しまりやや欠ける、浮石粒１㎜大30%、地山粒１㎜～５㎜大５％
8　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性若干、しまり強、炭化物シミ状10%、浮石粒１㎜～３㎜大20%
9　黒 色 土（10ＹＲ２/１）　粒子細、粘性若干、しまりあり、炭化物シミ状３㎜～５㎜大１％、焼土粒10㎜大１％
10　褐 色 土（10ＹＲ４/４）　地山軽石ブロック＋褐色土粒、多量混合土、焼土ブロック20%、一部地山赤変
11　黒 色 土（10ＹＲ２/１）　粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒ブロック30%、軽石粒３㎜～10㎜大３％、焼土粒１㎜～５㎜大１％、炭化物シミ状多量
12　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性若干、しまりなし、浮石粒１㎜大３％、軽石粒１㎜～10㎜大80%、炭化物３㎜大２％
13　褐色土～にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/４～５/４）　粒子細、粘性中、しまりあり、浮石粒１㎜大１％、焼土ブロック一部あり
14　黄褐色土～明褐色土（10ＹＲ５/６～2.5Ｙ５/８）　粒子細、粘性中、しまりあり、12層の赤変化したもの

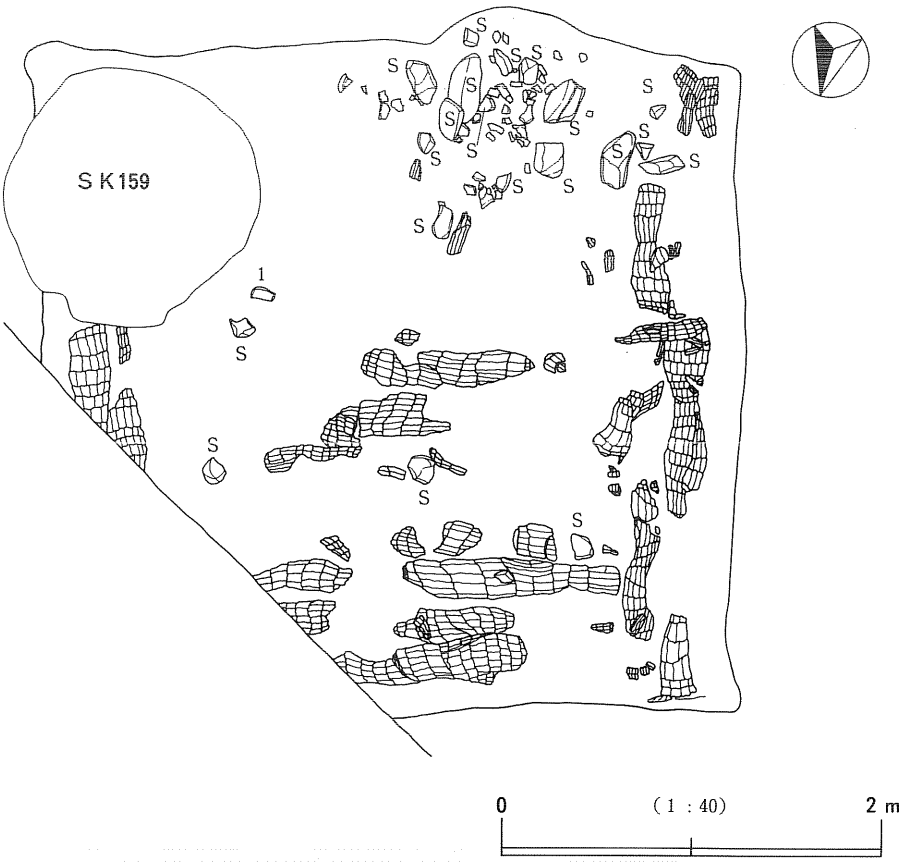
0　（１：40）　2 m

第12図　ＳＩ157竪穴住居跡



第13図　ＳＩ157竪穴住居跡　火山灰検出状況

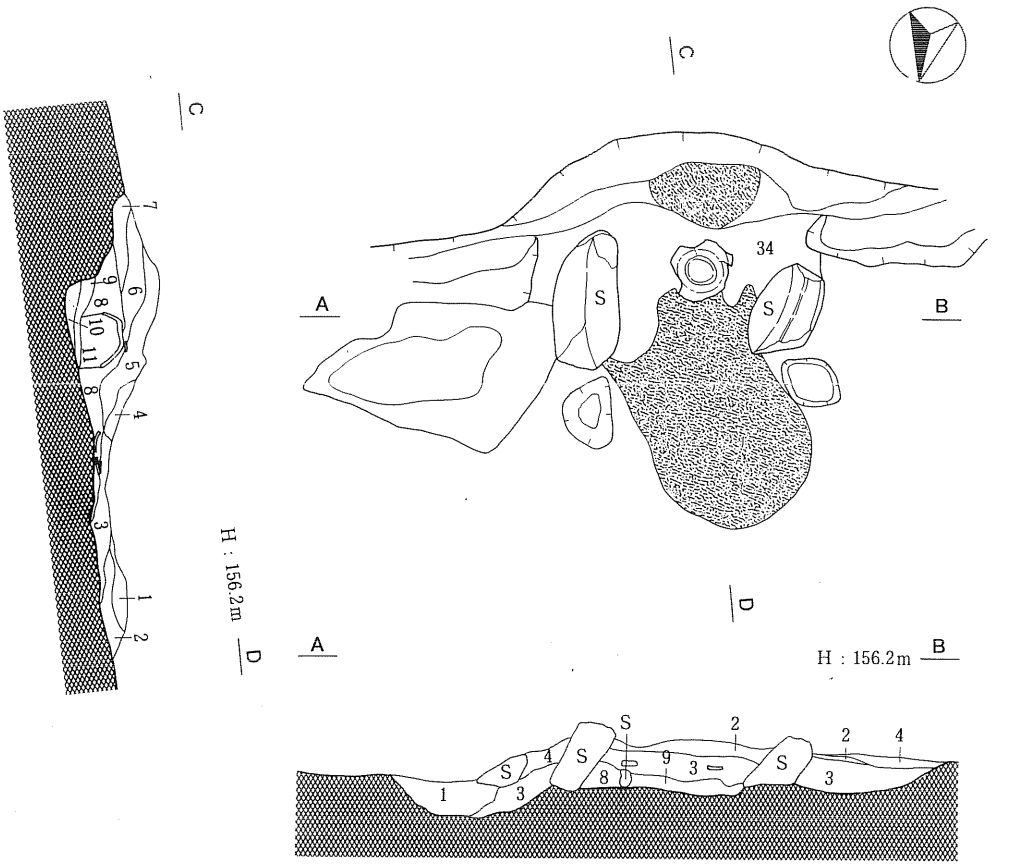
く部分に見られ、厚いところで６㎝を測りレンズ状の堆積を呈する。本住居跡は焼失家屋で、火山灰直下の炭化物・焼土粒が住居跡を覆い、カマドから南東隅部を除いた部分に炭化した板材が遺存していた。幅13～24㎝、長さ50～114㎝、厚さ１～２㎝を測り、南壁を除く各壁に沿う方向で壁際からやや内側に２～３枚並んでいる。東壁中央寄りにそれと直交する板材がある。板材の用途としては腰板・矢板・敷板が想定できるが、いずれも決めてを欠く。カマドは南壁・南西隅寄りに付設されている。カマドは、幅70㎝、長さ40㎝の不整形のくぼみを掘り、扁平な河原石を据えた後、外側を褐色土・暗褐色土で充填して両袖部を構築し、手前の床面を幅45㎝、



第14図　ＳＩ157竪穴住居跡　遺物出土状況

長さ98cmの楕円形に２～10cm掘り下げて焚口部を構築する。焚口部から煙道部付近へは垂直に立ち上がって移行する。煙道部は削平を受けて不明である。支脚は地山土を積んだ上に土師器甕を逆位に据えている。埋土は11層に分層された。大湯浮石粒を混入する暗褐色土～褐色土が主体でカマド構築土である。カマド周囲に石が散在していることから、芯材として使用されたと想定できる。

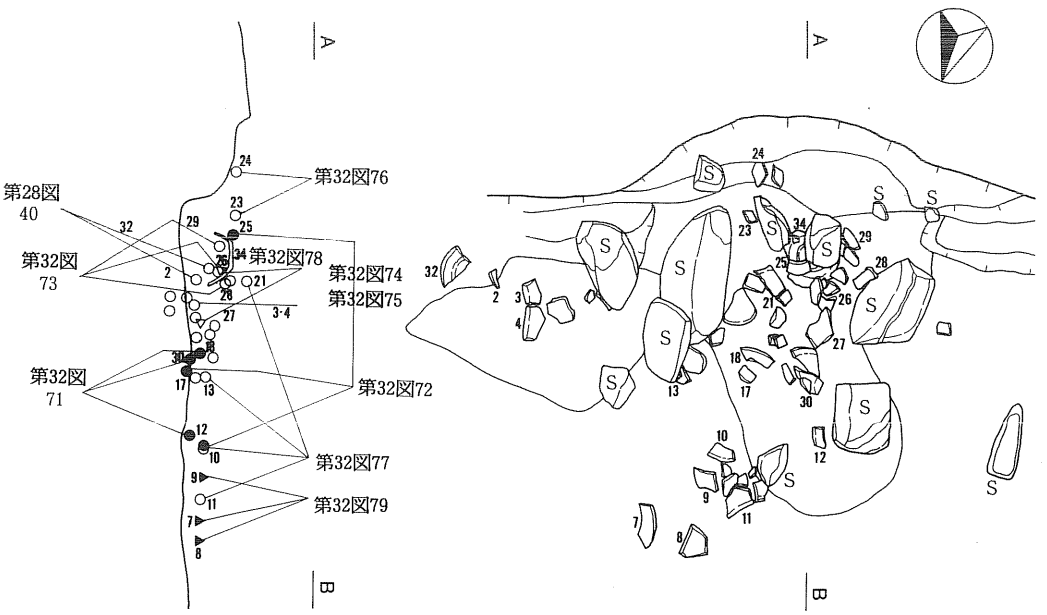
遺物は、35点出土し、その大部分がカマドから集中して出土した土師器（32点）・須恵器（３点）の破片で、全て５層（火山灰）下からの出土である。土師器破片のうち大半が甕で、杯・壺は９点、ロクロ成形が11点、非ロクロが21点である。接合後、図示できた土器破片・復原土器は10点である。出土状況・接合関係からＳＩ150と同様の想定を行った場合、78（34）が転用、71（12•18•30）・72（10•17•25）・73（26•28•29）・74（26•27）・76（23•24）・77（10•11•13•21）が遺棄、40（２•32）・70・75（34）・79（７～９）は流入・廃棄と想定される。40は３点の破片から接合されており、残り１点はＳＩ150のＲＰ38である。どちらも流入の破片と想定したが垂直分布での違いから両遺構の有機的関係を想起させる資料である。

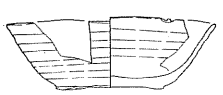


1	褐色土（10ＹＲ４/４）	しまり粘性なし、浮石粒２㎜～５㎜
2	褐色土（10ＹＲ４/６）	粒子細、浮石粒0.5㎜～1.0㎜、しまり粘性あり
3	褐色土（10ＹＲ３/４）	暗浮石粒３㎜～５㎜、しまり粘性あり
4	暗褐色土（10ＹＲ３/３）	浮石ブロック20㎜～40㎜多量に含む（黄色味がかっている）しまり・粘性なし
5	褐色土（10ＹＲ４/６）	粒子細、浮石粒0.5㎜～１㎜
6	暗褐色土（10ＹＲ３/４）	浮石粒３㎜、しまり・粘性あり
7	にぶい褐色土（7.5ＹＲ６/３）	しまりあり、粘性強、焼土粒１㎜～３㎜、浮石粒２㎜～５㎜少量
8	褐色土（7.5Ｙ４/４）	粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒３㎜大２％、軽石粒２㎜～５㎜大５％
9	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒１㎜大１％、軽石粒１㎜～２㎜大３％
10	黒褐色土（10ＹＲ２/２）	９と同様であるが焼土粒及び軽石性多量20％
11	地山土（赤変）	

0　（１：20）　1 m

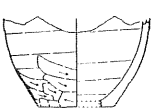
第15図　ＳＩ157竪穴住居跡　カマド



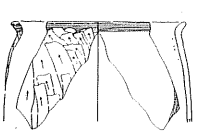


第32図71（１／５）

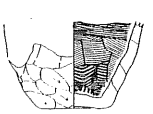
第32図72（１／５）



第32図73（１／８）



第32図77（１／８）



第32図78（１／８）

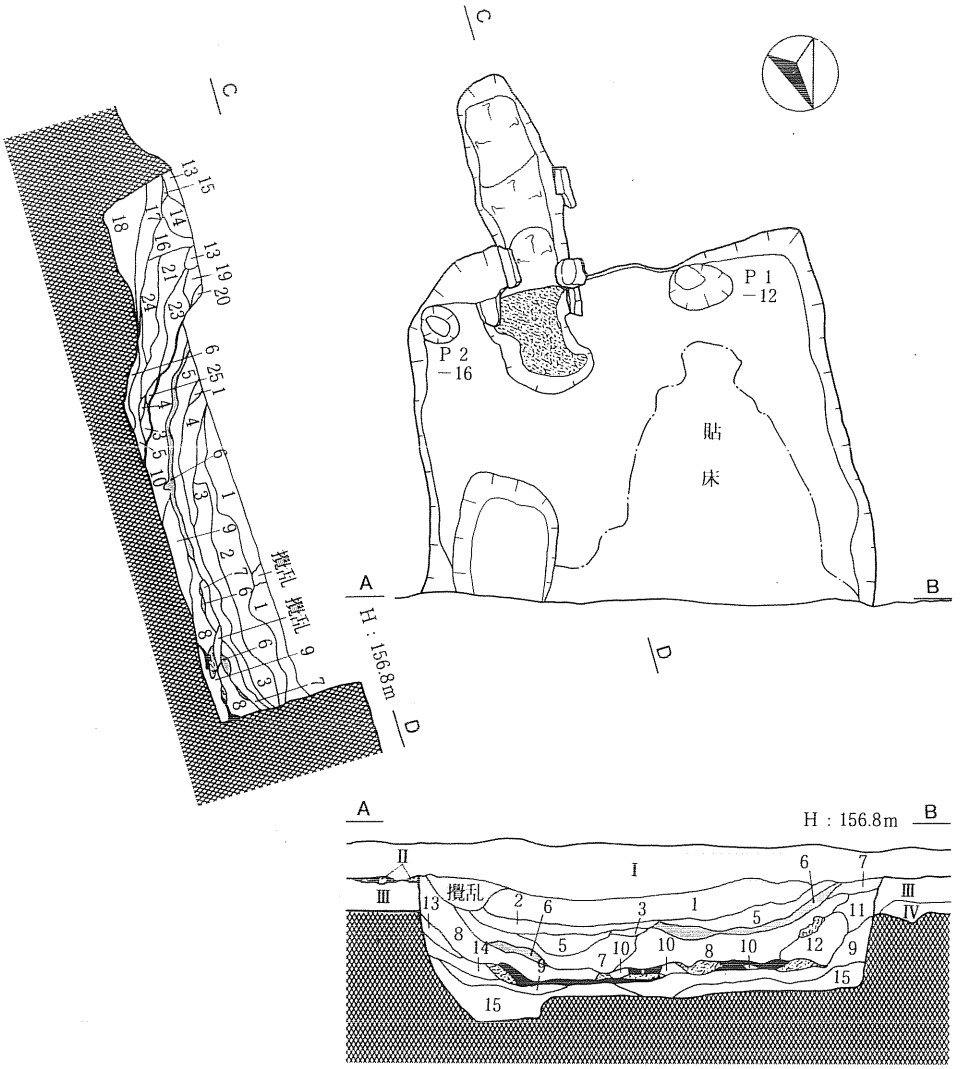
0　（１：20）　1 m

第16図　ＳＩ157竪穴住居跡　カマド遺物出土状況

ＳＩ158竪穴住居跡（第17～20・33図、第８表、図版９・10・16）

ＬＱ63・64グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で検出した。主軸方位がＳ－７°－Ｗ、南壁南東隅寄りにカマドが付設された竪穴住居跡であるが、北壁が調査区外にあたるため、全容は不明である。したがって壁長は南壁のみ計測可能で2.14ｍを測る。壁高は東壁37㎝、西壁40㎝、南壁42㎝で２°～３°の傾斜で立ち上がる。柱穴は南東隅部・南壁下に２本設けられ、径20～25㎝の略円形を呈し、埋土は焼土粒・炭化物を混入する。Ｐ１は本来隅部に配されるはずだったのが、南西隅部は縄文時代の土坑（ＳＫ168）と重複するため、柱穴の構造上、避けられた可能性がある。床面積は調査部分だけで４㎡を測る。床面は緩い起伏を呈し、やや軟弱で、焼土粒・炭化物が混入し、北西部から北東部にかけては貼床が施されている。東壁下に長軸65㎝以上、短軸55㎝を測る土坑状の落ち込みを検出した。埋土は貼床と同様の単一層であるため、本住居跡より古い時期の遺構に貼床を施した可能性がある。埋土は15層に分層された。大湯浮石粒・焼土粒・炭化物を混入する黒褐色～暗褐色土が主体で自然堆積を呈する。床面よりやや浮いた部分に焼土及び炭化層が看取でき、直上の６層は火山灰である。カマドが付設された南側から北側にかけてレンズ状の堆積を呈し、厚いところで７㎝を測る。調査区外との境界にあたる部分で埋土を観察した結果、第Ⅱ層（大湯浮石）を掘り込んで本住居跡が構築され、実際の壁高は東壁60㎝、西壁40㎝以上となり、６層の火山灰は大湯浮石より新しい火山灰と識別できる。本住居跡もＳＩ157と同じ焼失家屋で、炭化した板材が北側に遺存していた。幅10～18㎝、長さ25～57㎝、厚さ1～3㎝を測り、東西方向に並んでいる。また、これに直交して上になる板材がほぼ中央部にみられる。炭化材の検出、埋土の状況からＳＩ157も本住居跡と同じ面で構築された可能性が高い。カマドは南壁、南東隅寄りに付設されている。幅40㎝、長さ55㎝の不整方形に床面を２～３㎝掘り込んで焚口部を構築し、その後両袖部の芯材となる河原石を側壁上端に押しつけて、灰白色粘質土、地山土を積み上げている。焚口部から煙道部へは緩い傾斜で移行し、煙出部で垂直に立ち上がる。煙道部は幅42㎝、長さ117㎝を測る。支脚は検出されなかった。埋土は、26層に分層され、6・26層は焼土、2・7・8層は袖部構築材、1・3・4・9・10・13・19・21・25層は天井部崩落土に相当する。また芯材として河原石が使用されている。

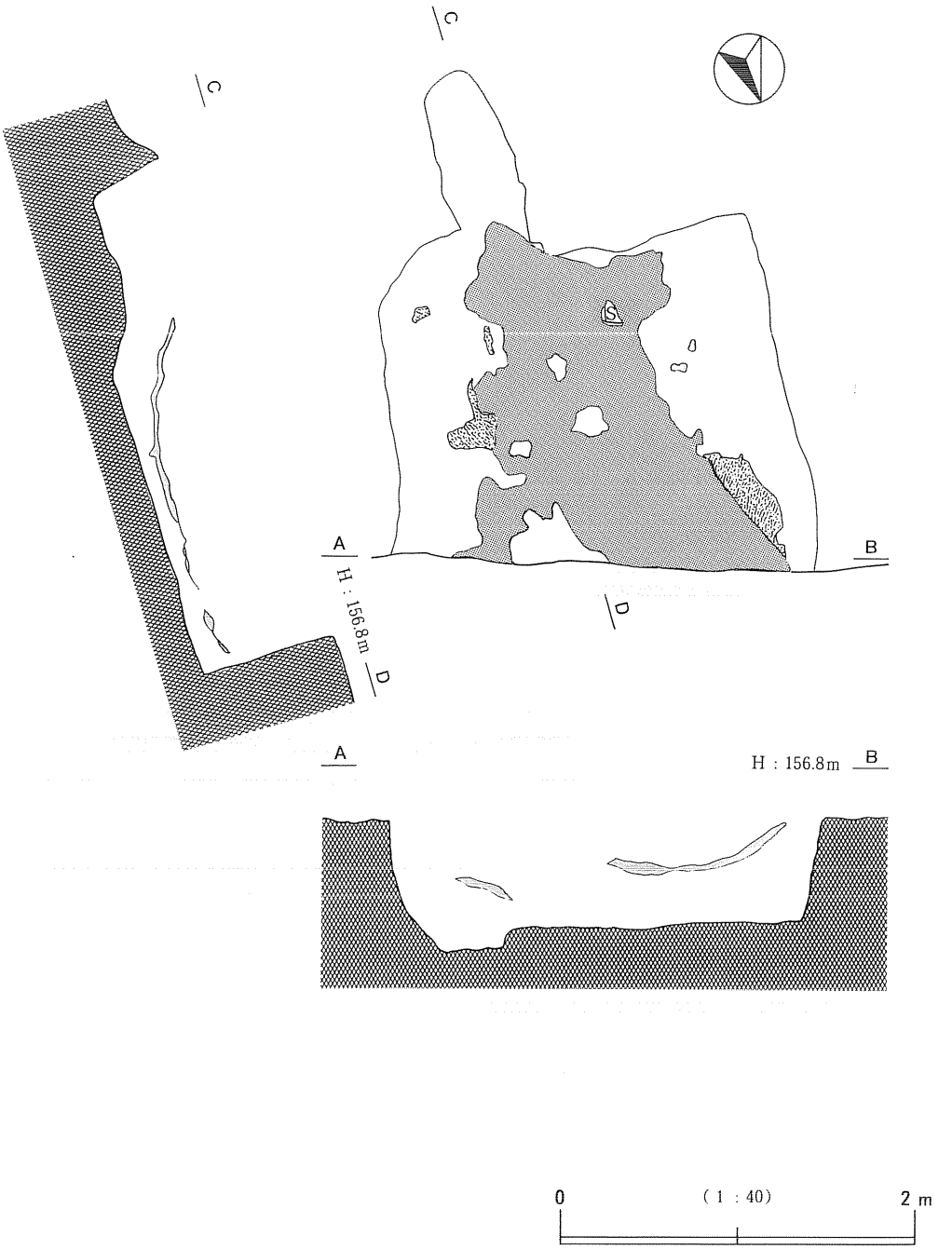
遺物は番号を付して取り上げた土器片が10点である。縄文土器片１点を除けば、全て土師器破片で６層（火山灰）下からの出土である。接合後図示できた遺物は７点で、ロクロ成形の土師器杯２点、土師器甕１点、非ロクロ成形の土師器甕３点、鞴羽口破片１点である。出土状況、接合関係からＳＩ150と同様の想定を行った場合、81（８・10）、85（２～５）は遺棄、82（７・10）、83（６）、84（９）は流入が想定される。80（10）、86（カマド内一括）はカマド埋土の６層下部から出土 している。カマドにおける位置関係からどちらかが支脚に転用された可能性が強い。86は、丁寧なヘラケズリ調整された鞴羽口の破片である。



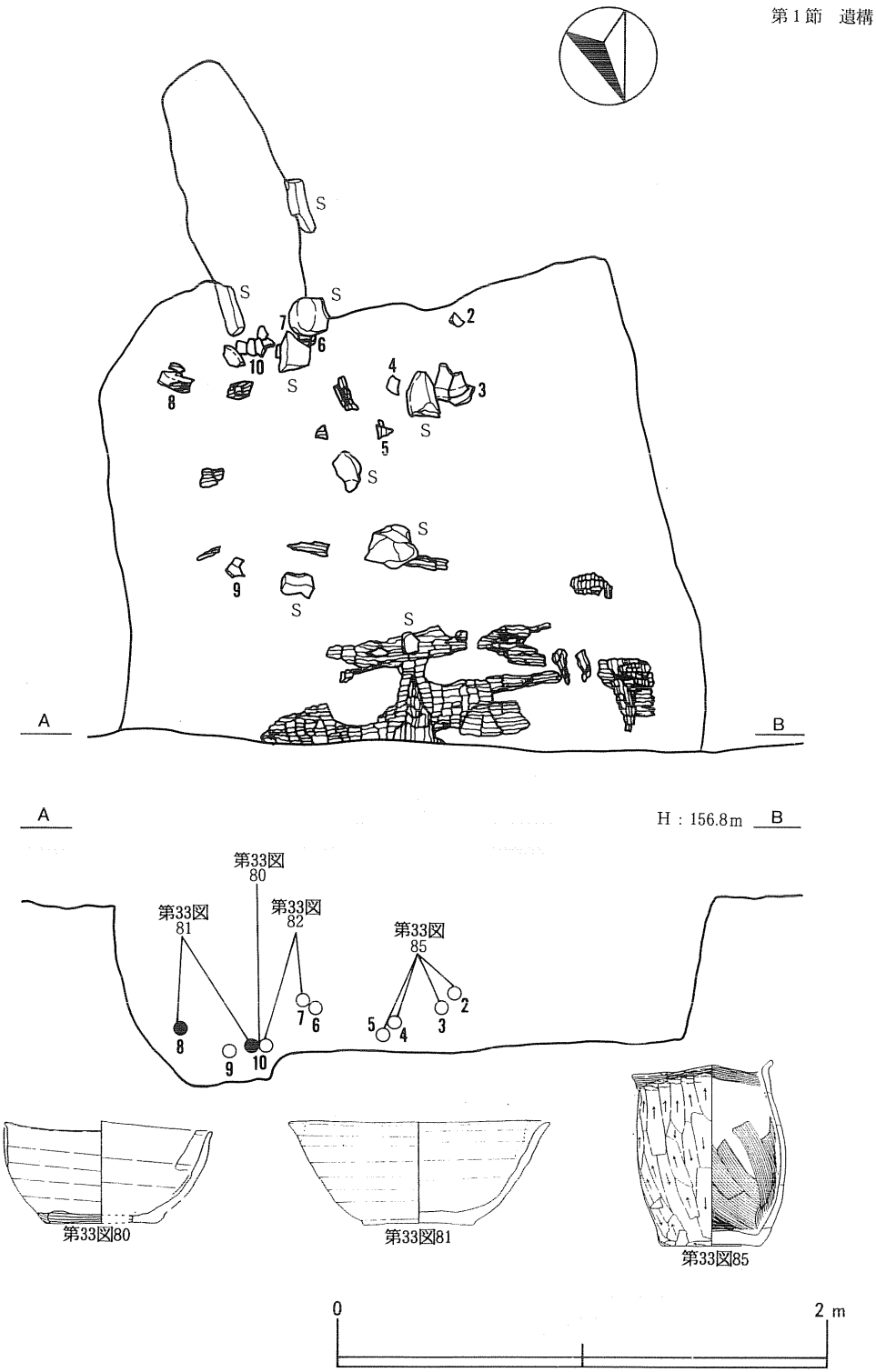
1　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性若干、しまり強、浮石粒２㎜～５㎜大80%、地山粒５㎜～６㎜大３%
2　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒少量、軽石ブロック状混入20%、焼土粒５㎜大２%、炭化物２㎜～３㎜大10%、軽石は赤変している
3　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒ブロック状、軽石粒５㎜～10㎜大５%、焼土ブロック少量、炭化物２㎜大若干、軽石は赤変している
4　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒１㎜大５%、炭化物３㎜大２%
5　黒色土（10ＹＲ２/１）　粒子細、粘性なし、しまりやや欠ける、炭化物シミ
6　にぶい黄～明黄褐色土（2.5Ｙ６/４～６/６）　粒子細、粘性なし、しまりあり（白頭山火山灰）
7　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒、地山粒若干、白頭山火山灰10%混入
8　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性若干、しまりあり、炭化物２㎜～３㎜大５%、焼土粒２㎜～３㎜大20%、一部ブロック状あり
9　黒色土（10ＹＲ２/１）　粒子細、粘性あり、しまりあり、焼土粒１㎜～２㎜大５%、炭化物２㎜～５㎜大10%、一部炭化材混入
10　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性なし、しまりあり、浮石粒１㎜～２㎜大、焼土粒１㎜～３㎜大30%、炭化材混入
11　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜～５㎜大５%、軽石粒３㎜大２%
12　暗褐色土（10ＹＲ３/３）　粒子細、粘性若干、しまりやや欠ける、炭化物・焼土粒１㎜～３㎜大10%、地山粒１㎜～３㎜大20%
13　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒１㎜～３㎜大20%
14　黒褐色土（10ＹＲ２/３）　粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒１㎜～５㎜大10%、焼土粒３㎜大１%
15　暗褐色土（10ＹＲ３/３）　粒子細、粘性あり、しまりあり、軽石ブロック状50%、焼土粒３㎜大１%、（貼床）

0　（１：40）　2 m

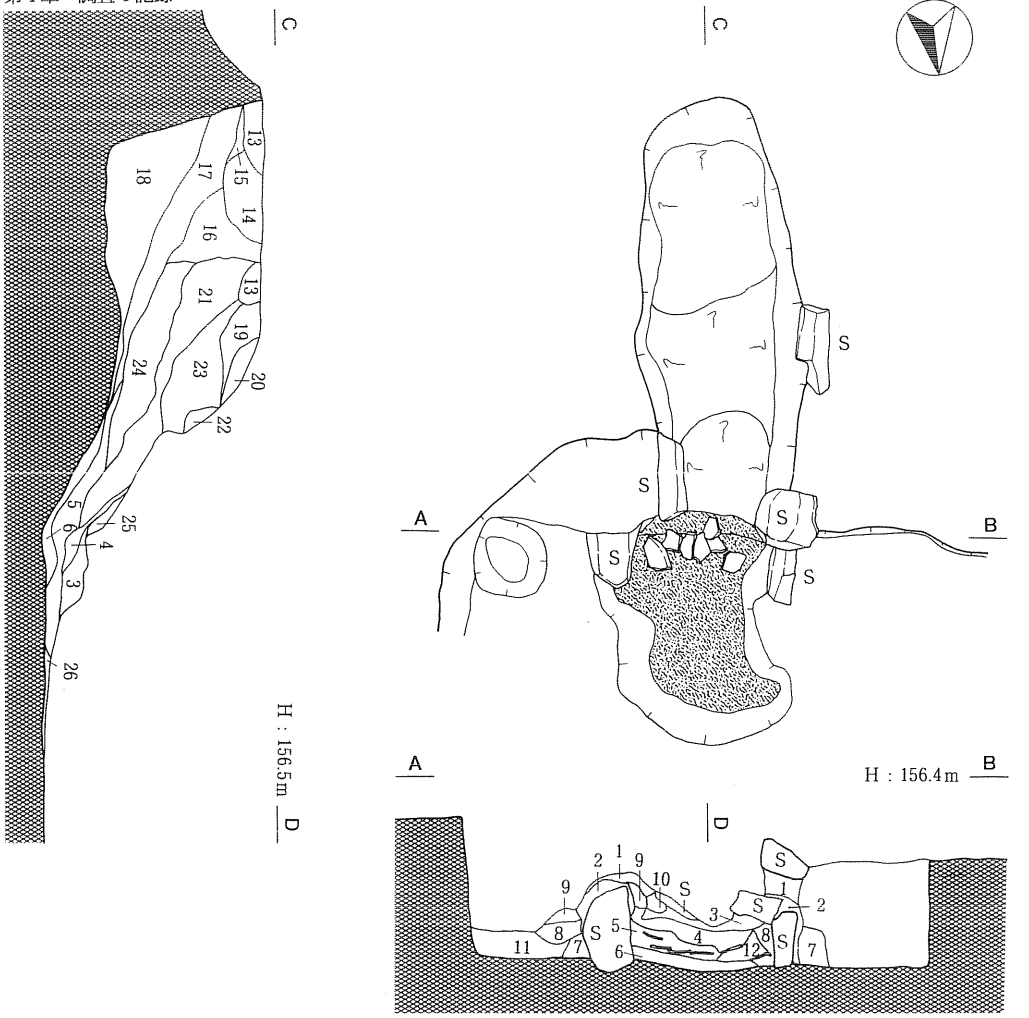
第17図　ＳＩ158竪穴住居跡



第18図　ＳＩ158竪穴住居跡　火山灰検出状況



第19図　ＳＩ158竪穴住居跡　遺物出土状況



1　黒褐色土（10YR2／2）　粒子細、粘性なし、しまりやや欠ける、浮石粒１㎜～２㎜大20%、焼土粒１㎜～２㎜大３％
2　にぶい黄褐色土（10YR5／3）　粒子細、粘性中、しまりあり、軽石粒５㎜大２％
3　黒褐色土（10YR2／2）　粒子細、粘性なし、しまりなし、浮石粒１㎜～２㎜大30%、軽石粒２㎜大２％
4　褐　色　土（10YR4／4）　粒子細、粘性中、しまりあり、浮石粒１㎜大２％、軽石粒３㎜大（赤変）１％
5　黒褐色土（10YR3／2）　粒子細、粘性あり、しまりやや欠ける、浮石粒１㎜大３％、焼土粒１㎜大１％、４層粒３㎜大２％
6　褐　色　土（10YR4／6）　粒子細、粘性なし、しまりあり（焼土）、軽石粒３㎜10%
7　黒褐色土（10YR2／2）　粒子細、粘性なし、しまりあり、浮石粒１㎜～２㎜大１％、軽石ブロック20%、４層ブロック５％
8　暗褐色土（10YR3／3）　粒子細、粘性あり、しまりあり、軽石粒１㎜～２㎜大５％、炭化物２㎜大１％
9　褐　色　土（10YR4／4）　粒子細、粘性あり、浮石粒２㎜大１％、軽石粒２㎜大２％
10　９層と同じである赤変した軽石粒１㎜大30%
11　黒褐色土（10YR2／2）　粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１㎜大２％、軽石ブロック状40%
12　褐色土・暗褐色土（10YR4／4～4／3）　粒子細、粘性中、しまりあり、焼土粒１㎜～２㎜大２％
13　にぶい黄褐色土（10YR5／3）　硬くしまっている
14　暗褐色土（10YR3／4）　粒子細、粘性なし、しまりなし、浮石粒１㎜～２㎜（３㎝ぐらいの大粒若干あり）
15　８層に同じだが、大粒の物少ない
16　黒褐色土（10YR3／2）　粒子細、浮石粒１㎜～２㎜、粘性なし、しまり若干
17　暗褐色土（10YR3／3）　粒子細、浮石粒２㎜～20㎜、粘性なし、しまりなし
18　褐　色　土（10YR4／4）　粒子細、浮石粒１㎜～２㎜、粘性なし、しまりなし
19　にぶい黄褐色土（10YR4／3）　粒子細しかし荒、浮石粒１㎜～５㎜、炭化物１㎜～２㎜30%、粘性あり、しまりあり
20　褐　色　土（10YR4／4）　粒子細、浮石粒１㎜、粘性なし、しまりなし
21　灰黄褐色土（10YR4／2）　粒子細、浮石粒１㎜～２㎜、粘性あり、しまりあり
22　黒褐色土（10YR3／2）　粒子荒、浮石粒３㎜～５㎜、粘性なし、しまりなし
23　暗褐色土（10YR3／3）　粒子細、浮石粒２㎜～３㎜、15層粒１㎜～２㎜30%、炭化物２㎜５％、粘性なし、しまりなし
24　黒褐色土（10YR2／2）　粒子細、浮石粒１㎜、粘性なし、しまりなし
25　にぶい黄褐色土（10YR5／3）　粘性あり、しまりあり、カマド構築粘土
26　赤褐色土（５YR4／8）　（焼土）

0　（１：20）　1 m

第20図　ＳＩ158竪穴住居跡　カマド

(2)　**土坑**（第24・35・42図、第10表、図版11）

ＳＫ153

ＭＥ65グリッド周辺に位置し、平面形は隅丸な不整方形で、断面形は鍋底状を呈するが、かなりデコボコしている。規模は坑口部1.37×1.03ｍ、坑底部0.68×0.56ｍ、深さ1.18ｍである。本遺構は第Ⅱ層（大湯浮石）上面より掘り込まれており、埋土は５層に分層され、レンズ状の堆積を呈し、１・２層には西より流れこんだ浮石粒が混入している。出土遺物はないが、掘り込み面や埋土の状況から平安時代に属すると考えられる。

ＳＫ155

ＳＩ151の床面で検出したもので、ＳＫ156と重複しており、ＳＫ156より古い。カマドの位置からＳＩ151に伴うものではないと考えられる。平面形は円形、断面形は円筒形である。規模は坑口部1.20ｍ、深さ0.62ｍである。埋土は６層に分層したが、全体的に褐色土を主体に地山ブロックが混入して、６層は地山主体土で、埋められた様相を呈する。１層は黒褐色土に地山ブロックを混入しているもので、ＳＩ151構築時に貼られた可能性が強く、厚さ５～15㎝を測る。遺物は小刀１点（第42図223）が出土している。224は茎の部分で223と同一個体と思われる。223は長さ15.2㎝、最大幅2.4㎝、厚さ0.25㎝で、224は長さ4.7㎝、最大幅1.0㎝、厚さ0.4㎝である。

ＳＫ156

ＳＩ151の床面で検出したもので、ＳＫ155と重複しており、ＳＫ155より新しい。カマドの位置からＳＩ151に伴うものではないと考えられる。平面形は円形、断面形は円筒形である。規模は径0.90ｍ、深さ0.46ｍである。埋土上部より土師器甕（第35図98・99）が出土した。埋土は地山ブロックが多く混入しボソボソしており、埋められた様相を呈する。

ＳＫ159

ＳＩ157と重複しており、本遺構が新しい。平面形は円形、断面形は円筒形で、その規模は径1.37ｍ、深さ0.36ｍである。土師器甕の口縁部（第35図101）が出土している。

ＳＫ166

ＳＩ150の東に位置し、東半分が調査区外である。平面形は円形で、断面形は鍋底状である。規模は推定径1.23ｍ、深さは0.36ｍである。埋土は９層に分層したが、２・３・５・７・８層に浮石が混入し、５層にその傾向が著しい。土師器杯（第35図100）が出土している。

ＳＫ167

ＳＩ150の南に位置し、平面形は円形、断面形は浅皿形である。規模は径1.00ｍ、深さ0.28ｍで、埋土は２層に分層したが、１層に大湯浮石がびっしり堆積している。

ＳＫ174

調査区中央部のＬＳ68グリッドに位置し、平面形は不整楕円形、断面形は鍋底状を呈し、底面はデコボコしている。規模は坑口部1.25ｍ、深さ0.45ｍである。埋土は６層に分層したが、第１～４層まで径３～４㎜の円もしくは角礫が数多く検出された。遺物は鉄製品が２点（第42図216、219）、鉄滓がわずかに出土した。

ＳＫ175

北東端のＬM68グリッドの第Ⅱ層（大湯浮石）上面で検出した。平面形は円形で、断面形は浅皿形である。規模は径1.14ｍ、深さ0.15ｍで、底面はややデコボコしている。埋土は４層に分層したが、いずれも大湯浮石が混入し、第１層は40％ほどの割合である。第３層には炭化物が堆積している。遺物は確認面で内面黒色処理した土師器杯（第35図102）と他に埋土より土師器杯が出土した。

(3)　焼土遺構（第24図）

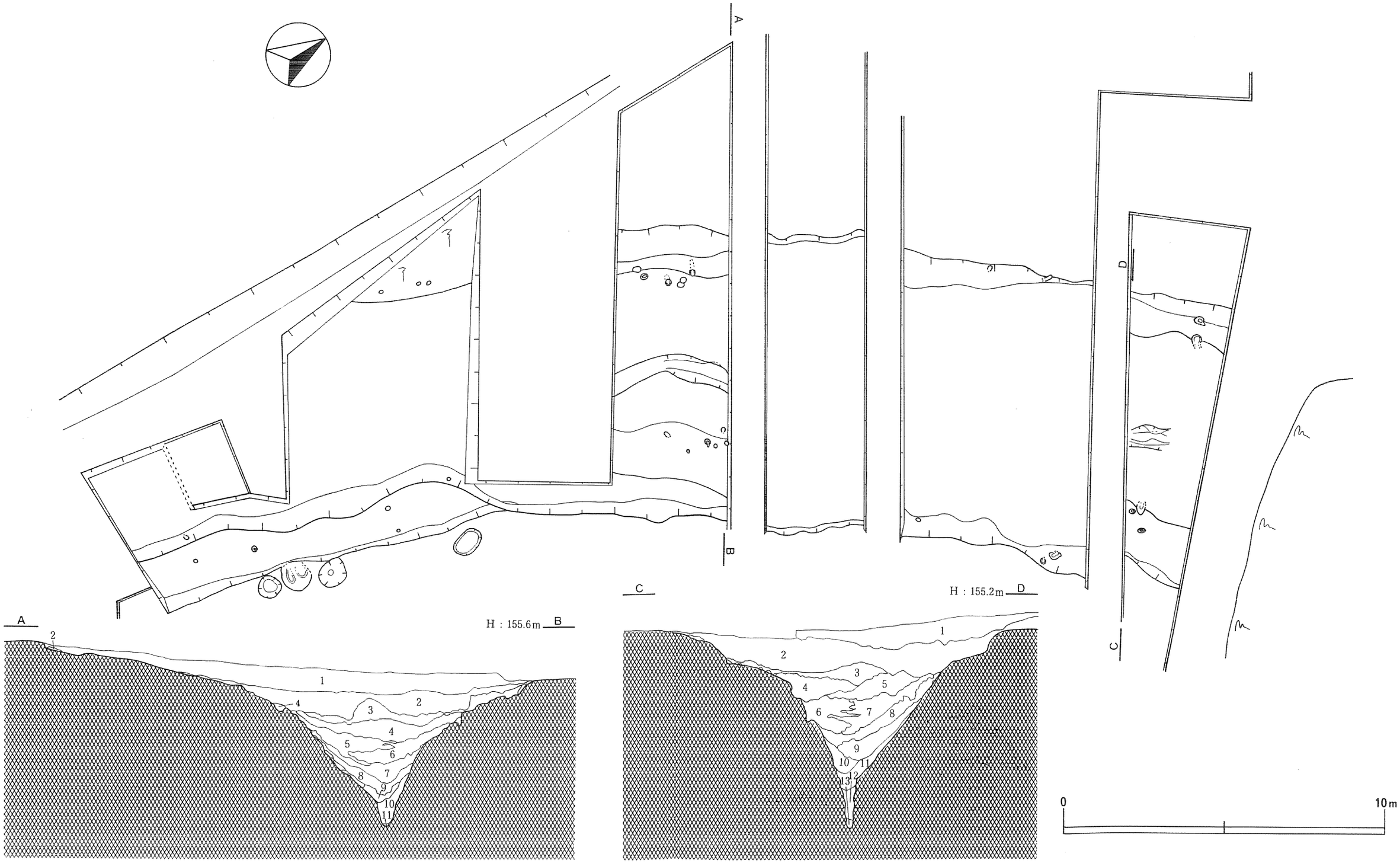
ＳＮ160

農道の西、ＬＳ63グリッドに位置し、平面形は不整楕円形で、わずかに掘り込まれており断面形は浅皿形で深さ12㎝である。埋土は４層に分層したが、１層は大湯浮石が主体で、焼土が混じる。

(4)　空堀跡

ＳＤ102（第21・27・29・34・42図、第２～４表、図版12～14）

調査区の南東端にあり、第１次調査区の北西部との間に３条検出されている中で、一番外側つまり、舌状台地の付け根部に位置する。これら３条の堀跡はＳＤ102のごく一部も含めて、第１次で調査されており、その時期は平安時代末葉とされ、その中でＳＤ102が一番古いと考えられている。本遺構はこの部分の現況地形から推測して、東に突き出た舌状台地付け根部に北側から入り込んだ小さな沢を利用するようにして掘られたもので、その総延長は75ｍほどであろう。平面的には沢に向かって緩い弧を描き、断面形は底面が細い溝状で、北は緩く、南は急に、上面ではかなり緩やかに立ち上がる。調査は堀跡に直交する形でＬＲ・ＭＡラインに沿って２本のトレンチを設定し、他は４ｍ毎に幅１ｍのベルトを残しながら堀の上面を確認した。その規模はＬＲラインで上面幅8.22ｍ、中位幅5.26ｍ、下位幅4.0ｍ、溝状部分の上幅0.50ｍ、下幅0.20ｍ、深さ1.54ｍで、全体の深さは6.34ｍである。ＭＡラインでは上面幅8.86ｍ、中位幅5.08ｍ、下位幅2.28ｍ、溝状部分の上幅0.56ｍ、下幅0.18ｍ、深さ0.76ｍで、全体の深さは4.78ｍである。上面端から中位の肩にかけての間に、円形もしくは楕円形を呈する径18～25㎝のピットが全体的にあり、56㎝ほど横に掘り込んだものもある。これらの埋土はほとんど炭化物粒子がびっしりつまっており、かなり軟かく、藁のようなものが焼けたという印象を受けた。遺物（第27図19、第29図49、第34図87～97）は土師器杯・甕、須恵器杯、鉄製品（第42図222）、



第21図　ＳＤ102　空堀跡

第2表　SD102　土層観察表（A～B）

番号	色調	記号	粘性	硬度	混入物				備考
					炭化物	地山	軽石	砂	
1	黒色土	10YR2/1	あり	あり		3～10mm10%			
2a	黒色土	10YR2/1				多量	多量		攪乱埋土
2b	黒色土	10YR2/1				多量	多量		〃
2c	黒色土	10YR3/1				ブロック10%			〃
2d	暗褐色土	10YR5/3	なし	なし			混入		〃
2e	暗黄褐色土	10YR6/6	なし	なし			10%		〃・黒褐色土
3a	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり		1～2mm5%	5～10mm10%		自然堆積
3b	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり		1mm10%	3～10mm20%		〃
3c	黒色土	10YR2/1	なし	あり		1～2mm10%	5～7mm5%		〃
3d	黒褐色土	10YR2/3	なし	やや欠		1～3mm20%	5～10mm5%		〃
3e	明黄褐色土	10YR6/8				多量	ブロック多量		〃
4a	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり		1～3mm10%	5～20mm20%		人為的堆積
4b	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり		1～5mm15%	5～20mm20%		〃
4c	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり		1～2mm5%	5～10mm10%		〃
4d	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり		多量	ブロック15%		〃
4e	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	5mm1%	1～2mm5%	5～30mm20%		〃
4f	褐色土	10YR4/	なし	あり		1～2mm10%	3～20mm30%		〃
4g	褐色土	10YR4/4	なし	あり		1～3mm10%	ブロック5%		〃
5a	黒褐色土	10YR2/2	なし	やや欠		1mm5%	3～10mm7%		〃
5b	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり	3mm若干	1～2mm3%	3～10mm5%		〃
5c	黒褐色土	10YR2/2	若干	やや欠	2mm1%	1～2mm5%	5～30mm5%		〃
5d	黒褐色土	10YR3/2	あり	なし		1～2mm20%	5～10mm10%		〃
5e	黒褐色土	10YR3/2	なし	やや欠	2～5mm2%	1～2mm5%	3～5mm20%		〃
6a	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	2～5mm1%	1～3mm20%	5～20mm10%		〃
6b	にぶい黄褐色土	10YR4/3	なし	あり	1～2mm若干	1～2mm30%			〃
6c	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	5mm1%	1～3mm30%	20mm10%		〃
6d	暗褐色土	10YR2/4	なし	あり	3mm若干				〃・にぶい黄褐色土
6e	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	1～5mm2%	1～2mm30%	5～10mm10%		〃
6f	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり		1～2mm10%	5～10mm10%		〃
6g	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり	2～5mm3%	1～3mm20%	10～20mm5%		〃
7a	褐色土	10YR4/4	なし	あり		1～2mm20%	3～40mm30%		第三次崩壊土
7b	暗褐色土	10YR3/3	なし	なし	1～2mm20%	1～2mm20%	ブロック20%	少量	〃
7c	暗褐色土	10YR3/3	なし	なし	ブロック		ブロック30%		〃
7d	暗褐色土	10YR3/4	なし	やや欠		1～2mm20%	5～10mm20%	少量	〃
8a	黒褐色土	10YR2/2	なし	やや欠		1～2mm5%	5～10mm3%		自然堆積
8b	暗褐色土	10YR3/4	なし	なし		1～2mm10%	3～30mm5%		〃

8 c	暗褐色土	10YR3/3	な　し	な　し		1～2 ㎜ 5 %	5～20㎜ 3 %		自然堆積
8 d	暗褐色土	10YR3/4	な　し	な　し		1～2 ㎜20%	5～30㎜20%	少量	〃
8 e	褐色土	10YR4/4	な　し	な　し		2 ㎜10%	2～10㎜20%		〃
8 f	褐色土	10YR4/4	な　し	若　干		1～2 ㎜多量	3～5 ㎜多量		〃
8 g	にぶい褐色土	10YR4/3	な　し	あ　り		1～5 ㎜10%		少量	〃
8 h	黒褐色土	10YR2/2	若　干	あ　り	2～10㎜ 1 %	1～3 ㎜ 5 %	5～10㎜10%	少量	〃
9 a	褐色土	10YR4/4	な　し	やや欠			ブロック		第二次崩壊土
9 b	褐色土	10YR4/4	な　し	やや欠			3～5 ㎜90%		〃
9 c	褐色土	10YR4/4	な　し	な　し		1～2 ㎜10%	10～20㎜ 2 %		〃
9 d	にぶい黄褐色土	10YR5/4	な　し	やや欠		ブロック多量	3～10㎜ 5 %		〃
10a	暗褐色土	10YR3/3	な　し	やや欠		ブロック10%	5～10㎜ 5 %		第一次崩壊土
10b	黒褐色土	10YR2/3	な　し	な　し			多量		〃
10c	暗褐色土	10YR3/3	な　し	な　し		1～2 ㎜10%	5 ㎜10%	若干	〃
10d	暗褐色土	10YR3/3	な　し	な　し		1～5 ㎜20%	10～20㎜ 3 %	少量	〃
10e	黒褐色土	10YR3/2	若　干	な　し		1～2 ㎜20%	5～10㎜30%		〃
10f	黒褐色土	10YR3/2	な　し	な　し		1～5 ㎜60%	5 ㎜10%	若干	〃
10g	褐色土	10YR4/4	な　し	な　し		1～5 ㎜50%	3 ㎜		〃
11	砂層			あ　り			2～3 ㎜ 3 %	1～2 ㎜	自然堆積

第３表　SD102　土層観察表（C～D）

番号	色　調	記　号	粘　性	硬　度	混入物				備　考
					炭化物	地　山	軽　石	砂	
1	黒色土	10YR2/1	あ　り	あ　り		3～10㎜10%			
2 a	黒色土	10YR2/1				ブロック20%			攪乱埋土
2 b	黒色土	10YR2/1				多量	多量		〃
2 c	黒色土	10YR2/1				多量	多量		〃
2 d	黒色土	10YR3/1				ブロック10%			〃
2 e	明黄褐色土	10YR6/6					10%		〃・黒褐色土
2 f	暗褐色土	10YR5/3	な　し	な　し			混入		〃
3 a	黒色土	10YR2/3	若　干	あ　り		1～2 ㎜ 5 %	3～5 ㎜ 2 %		自然堆積
3 b	黒色土	10YR1.7/1	な　し	あ　り		1～3 ㎜ 5 %	5～10㎜ 7 %		〃
3 c	黒褐色土	10YR2/2	な　し	あ　り	3 ㎜ 1 %	1～3 ㎜10%	5 ㎜10%		〃
3 d	黒褐色土	10YR2/3	若　干	あ　り		1～2 ㎜ 3 %	少量		〃
3 e	暗褐色土	10YR3/3	な　し	あ　り		2 ㎜ 1 %	少量		〃
4 a	褐色土	10YR4/4	な　し	あ　り		シラス多量	5～10㎜10%		人為的堆積
4 b	暗褐色土	10YR3/3	な　し	やや欠		1～3 ㎜20%	ブロック 3 %		〃
4 c	にぶい黄褐色土	10YR4/3	な　し	やや欠		シラス多量	20%		〃
4 d	にぶい黄褐色土	10YR4/3	な　し	やや欠		2～5 ㎜20%	ブロック10%		〃
4 e						シラスブロック	混入		〃
4 f	黒褐色土	10YR3/2	な　し	やや欠	3 ㎜ 1 %	2～3 ㎜10%	10～20㎜ 5 %		〃

4g	黒褐色土	10YR2/3	なし	あり	1㎜若干	2～5㎜10%	ブロック10%		人為的堆積
4h	にぶい黄褐色土	10YR5/4	なし	なし		シラス多量	5～10㎜3%		〃
4i	褐色土	10YR4/4	なし	なし			1%		〃・明黄褐色土
5a	黒色土	10YR2/1	若干	あり		1～4㎜5%			〃
5b	黒褐色土	10YR2/3	若干	あり		1～10㎜30%	ブロック10%		〃
5c	黒褐色土	10YR2/3					ブロック20%		〃・石鏃出土
5d	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり		1～10㎜40%	ブロック10%		〃
5e	黒褐色土	10YR2/3	若干	あり	3㎜5%	1～5㎜40%	ブロック5%		〃
5f	黒色土	10YR2/1	若干	あり	2㎜1%	1～5㎜20%	5%		〃
6a	褐色土	10YR4/6	なし	あり		1～3㎜50%	少量		〃
6b	黒褐色土	10YR2/3	なし	やや欠		1～5㎜20%	1%		〃
6c	黒褐色土	10YR2/2	若干	あり		1～10㎜30%	ブロック5%		〃
6d	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり	2㎜1%	2～5㎜40%	10%	若干	〃
6e	黒褐色土	10YR2/3	若干	あり	2㎜若干	1～3㎜7%	2%	若干	〃
6f	暗褐色土	10YR3/3	若干	やや欠		1～5㎜10%	1%	若干	〃
6h	にぶい黄褐色土	10YR4/3	なし	なし		シラス多量	多量		〃
6i	にぶい黄褐色土	10YR5/4	なし	なし		シラス多量	10㎜10%		〃
6j	暗褐色土	10YR3/3	なし	なし			3～10㎜20%		〃・明黄褐色土
6k	黒褐色土	10YR2/3	なし	なし		シラス多量			〃
7a	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり		1～5㎜20%	少量		〃
7b	黒色土	10YR2/1	なし	あり	3㎜1%	1～10㎜10%	若干		〃
7c	黒褐色土	10YR2/2				1～3㎜15%			〃
7d	黒褐色土	10YR2/3	なし	あり		多量	3%		〃
7e	黒褐色土	10YR2/2	若干	あり	2㎜1%	1～5㎜20%	20%		〃
7f	黒褐色土	10YR2/2	若干	あり		1～5㎜30%			〃
7g	黒色土	10YR2/1	若干	あり		多量	5%		〃
7h	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり		.1～3㎜20%	少量		〃
7i	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり		多量	5%		〃
8a	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり		2～5㎜20%	少量		第三次崩壊土
8b	褐色土	10YR4/6	なし	やや欠		2～5㎜20%	5～30㎜10%	1㎜若干	〃
8c	黄褐色土	10YR5/8	なし	あり		3～5㎜30%	20～30㎜5%	若干	〃
8d	暗褐色土	10YR3/3	若干	やや欠		2～5㎜10%	ブロック10%	1㎜少量	〃
8e	褐色土	10YR4/4	なし	なし		2～5㎜30%	ブロック50%		〃
8f	暗褐色土	10YR3/4	なし	やや欠		2～3㎜5%	ブロック3%	1～2㎜少量	〃
8g	明黄褐色土	10YR6/8	なし	やや欠		3～10㎜30%			〃・黄褐色土
9a	黒褐色土	10YR3/2		あり	3㎜若干	3～10㎜3%		1～2㎜多量	自然堆積
9b	黒色土	10YR2/1		やや欠		3～6㎜5%		1～2㎜多量	〃
9c	黒色土	10YR2/1		あり		2～10㎜10%		1～2㎜多量	〃・黒褐色土
9d	褐色土	10YR4/4	なし	やや欠		1～10㎜30%	10㎜2%	2%	〃
9e	褐色土	10YR4/4		あり			10～40㎜多量		〃

9f	暗褐色土	10YR3/4		あ　り		3～5㎜10%	20㎜5％	1～2㎜多量	自然堆積・黒褐色土
9g	黒褐色土	10YR2/2	若　干	やや欠	3㎜若干		ブロック10%	1㎜10%	〃
9h	黒褐色土	10YR2/2		やや欠		混入	ブロック	1㎜	〃
9i	明黄褐色土	10YR7/6	な　し	な　し			ブロック5％	1㎜未満若干	〃
9j	黒褐色土	10YR2/2	な　し	な　し					〃
9k	褐色土	10YR4/4	な　し	やや欠		1～5㎜20%	ブロック5％	1～2㎜1％	〃
9l	褐色土	10YR4/4	な　し	な　し		多量	多量	若干	〃
9m	褐色土	10YR4/6	な　し	な　し		2～5㎜20%			〃
10a	暗褐色土	10YR3/3	な　し	な　し		2～5㎜70%	ブロック	少量	〃
10b	暗褐色土	10YR3/4	な　し	やや欠		2～10㎜60%	1％	少量	〃
10c	褐色土	10YR4/4	な　し	やや欠		3～5㎜50%	2％	多量	〃
11a	明黄褐色土	10YR7/6	な　し	あ　り		3～8㎜5％	若干		第二次崩壊土
11b	にぶい黄褐色土	10YR7/3	な　し	な　し		2～5㎜10%	2％		〃・明黄褐色土
11c	暗褐色土	10YR3/4	若　干	な　し					〃・褐色土
11d	にぶい黄褐色土	10YR7/3	若　干	な　し		5～20㎜30%	2％	若干	〃・暗褐色土
11e	にぶい黄褐色土	10YR7/3	な　し	な　し		3～5㎜10%			〃
11f	にぶい黄褐色土	10YR7/3	な　し	な　し		ブロック2％			〃
12a	黄褐色土	10YR5/6	若　干	な　し		2～3㎜80%			崩壊土
12b	明黄褐色土	10YR6/8	若　干	な　し		5～20㎜90%			〃
12c	明黄褐色土	10YR6/8	な　し	な　し		2～8㎜90%			〃
12d	褐色土	10YR4/4	若　干	な　し		2～7㎜80%		若干	〃
12e	にぶい黄褐色土	10YR7/3	な　し	な　し		3～10㎜70%			〃・明黄褐色土
13a	砂層			強				0.5～1㎜砂鉄	自然堆積・縄文土器片
13b	砂層			強				0.5～1㎜砂鉄	

鞴羽口（96）、縄文土器、石鏃（97）が出土している。埋土の詳しい状況は土層大別図（第21図）、土層注記表（第２・３表）にゆずるが、第１・２層は戦後まもなく畑地とする際に北側から重機で押された攪乱層である。遺物の取り上げは大別した土層の３・４層が上層、４層下部～６層上部が中層、６層下部～７層までが下層として行った。

(5)　柱穴様ピット（第24・25・35・41図、第10・12表、図版11・16）

柱穴様ピット２（Ｐ２）

ＬＴ68グリッドに位置し、平面形は円形で、径は上端で0.46ｍ、下端で0.17ｍ、深さ0.54ｍで ある。埋土は黒褐色土に大湯浮石の細粒が混入している。遺物は土師器甕（第35図103）が出土している。

柱穴様ピット３（Ｐ３）

ＭＢ69グリッドに位置し、平面形は円形で、径0.35ｍ、深さ0.18ｍである。底面はデコボコしている。埋土は暗褐色土に大湯浮石がブロック状に混入している。遺物は土師器把手付土器（第41図210・212）が出土している。

柱穴様ピット４（Ｐ４）

ＭＢ65グリッドに位置し、平面形は円形で、径0.26ｍである。埋土に大湯浮石が混入し、遺物は土師器把手付土器（第41図214）が出土している。

柱穴様ピット５（Ｐ５）

ＬＳ68グリッドに位置し、平面形は円形、断面形は円筒形で、径0.47ｍ、深さ0.47ｍである。埋土の第２層に大湯浮石が混入する。遺物は土師器把手付土器（第41図215）が斜めになって出土した。

柱穴様ピット６（Ｐ６）

ＬＴ67グリッドに位置し、平面形は楕円形、長軸0.40ｍ、短軸0.25ｍである。埋土は黒色土で、遺物は径２㎝前後の鉄滓が６点出土した。

(6)　その他の遺構（第24図、図版11）

ＳＸ176

調査区中央部のＬＴ67グリッドに位置し、平面形は楕円形、深さ0.13ｍと浅く掘り込まれており、底面はデコボコしている。埋土は３層に分層し、そのいずれも大湯浮石粒が混入している。１層は径５～10㎜の小礫（２％）と小さな鉄滓（10％）が混入した層で、２・３層には炭化物粒子が混入し、その割合は２層にはシミ状に30％、３層には径３㎜の粒子が１％である。本遺構の西と東に１層が厚さ２㎝で広がる。

４．その他の遺構と遺物

時期不明の遺構を本項で記述する。

(1)　土坑（第24図）

ＳＫ154

ＭＥ66グリッドに位置し、平面形は円形で、断面形は円筒形である。規模は坑口部0.85ｍ、坑底部0.56ｍ、深さ0.86ｍである。

ＳＫ170

ＬＴ66グリッドに位置し、平面形は円形、断面形は浅皿形である。規模は、坑口部1.74ｍで、深さは0.27ｍである。

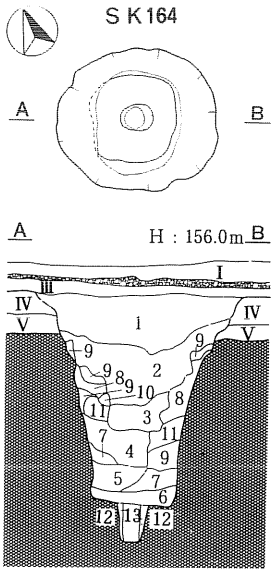
(2)　焼土遺構（第23・24図）

ＳＮ162

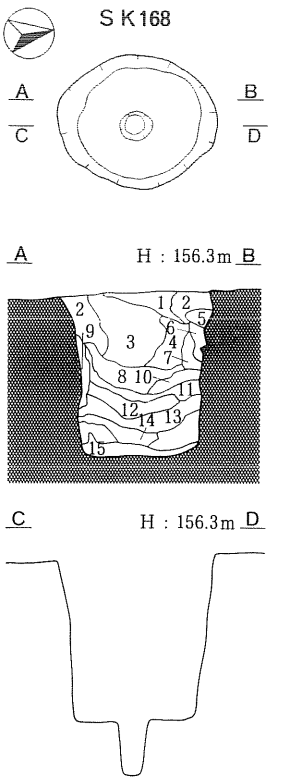
ＬＳ66グリッドに位置し、楕円形で、長軸0.88ｍ、短軸0.56ｍである。

ＳＮ171

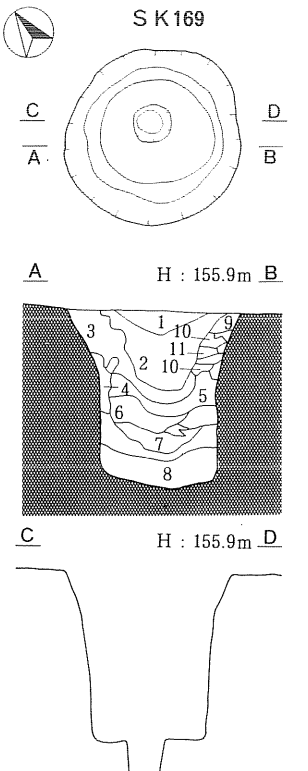
ＬＱ67グリッドに位置し、不整楕円形で、長軸1.80ｍ、短軸1.26ｍ、深さ0.10ｍである。



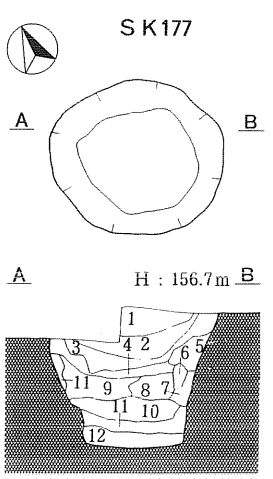
1　黒　　色（10YR1.7/1）ローム粒子（小）を少量含む
2　黒　　色（10YR1.7/1）ローム粒子（小・中）少量含む
3　黒 褐 色（10YR2/2）　ローム粒子、ローム小ブロック混入
4　黒 褐 色（10YR3/1）　ロームブロック（中・大）混入
5　黒 褐 色（10YR3/2）　ロームブロック（中）多量に混入
6　黒　　色（10YR1.7/1）ローム粒子をほとんど含まない
7　黄 褐 色（10YR5/6）　ローム粒子、ローム小ブロックから成る
8　黒 褐 色（10YR2/3）　ローム粒子、ローム小ブロック混入
9　黒 褐 色（10YR2/3）　ローム粒子少ない
10　黒　　色（10YR2/1）　ローム粒子ほとんど含まない
11　黒 褐 色（10YR3/2）　ロームブロック（中・大）混入
12　明黄褐色（10YR6/6）　粒子細、粘性若干、しまりなし
13　黒褐色土（10YR3/2）　粒子細、粘性あり、ロームブロック50%



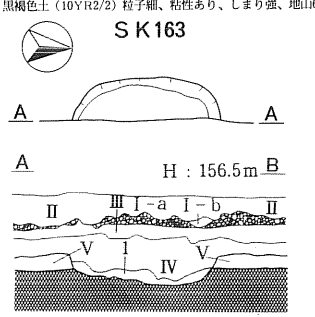
1　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒２%
2　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒20%
3　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒５%
4　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、焼土粒１%
5　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山50%
6　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒40%
7　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、焼土粒２%
8　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒70%
9　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒90%
10　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまり強、焼土粒１%
11　地山ブロック＋黒色土（10YR2/1）しまり強
12　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまり強、地山70%
13　地山ブロック（黒色土、10YR2/130%）混入、しまり強
14　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまり強、地山70%
15　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまり強、地山60%



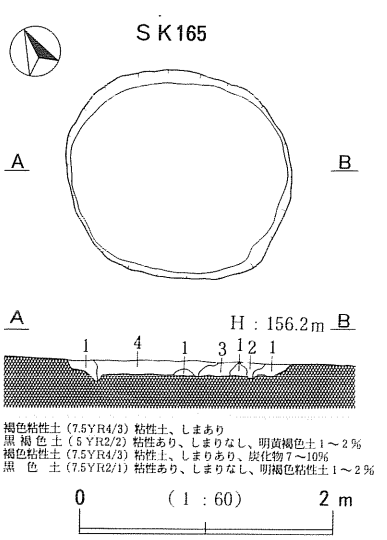
1　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒１%
2　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒３%
3　黒 色 土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒20%
4　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒70%
5　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒30%
6　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまり強、地山70%
7　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまり強、地山50%
8　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまり強、地山80%
9　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒15%
10　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒５%
11　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山20%



1　黒 色 土　（10YR2/1）浮石粒１mm～３mm大２%
2　黒 色 土　（10YR2/1）地山粒１mm～３mm大10%
3　黒褐色土　（10YR2/2）地山粒１mm～２mm大30%
4　黒褐色土　（10YR2/2）地山（軽石）ブロック状50%
5　黒褐色土　（10YR2/2）地山粒１mm～５mm大20%
6、黒褐色土　（10YR2/3）地山ブロック50%
7　黒褐色土　（10YR3/2）地山粒１mm～５mm大30%
8　黒褐色土　（10YR3/2）地山ブロック状80%
9　黒褐色土　（10YR3/2）地山粒１mm～２mm大15%
10　暗褐色土　（10YR3/3）地山粒２mm～10mm大30%
11　明黄褐色土（10YR6/8）しまり強　（地山土）
12　黒 色 土　（10YR2/1）地山粒２mm～５mm大８%



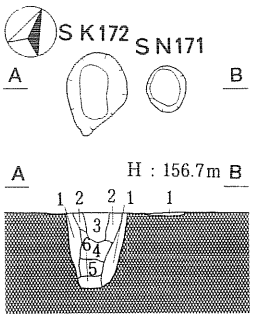
Ⅰａ黒褐色土（10YR2/2）軽石を多数含む、硬質
Ⅰｂ黒褐色土（10YR2/2）軽石をほとんど含まない
Ⅱ　黄橙色土（10YR7/8）大湯浮石
Ⅲ　黒褐色土（10YR3/2）微細軽石を少量含む
Ⅳ　黒 色 土（10YR2/1）地山粒少量混入、しまり悪い
Ⅴ　暗褐色土（10YR3/3）地山粒混入、しまり良い
Ⅴ　黒褐色土（10YR2/3）地山漸移層
Ⅰ　暗褐色土（10YR3/3）地山粒多量含む、しまり良い



1　褐色粘性土（7.5YR4/3）粘性土、しまあり
2　黒 褐 色 土（５YR2/2）粘性あり、しまりなし、明黄褐色土１～２%
3　褐色粘性土（7.5YR4/3）粘性土、しまりあり、炭化物７～10%
4　黒　色　土（7.5YR2/1）粘性あり、しまりなし、明褐色粘性土１～２%

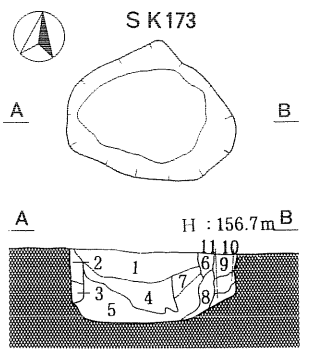
0　（１：60）　2 m

第22図　ＳＫ土坑

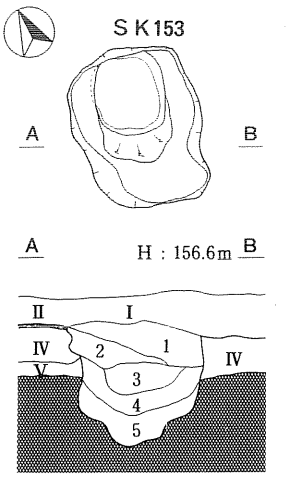


1　暗赤褐色粘性土（2.5Y3/6）粘性土、しまりあり（焼土）

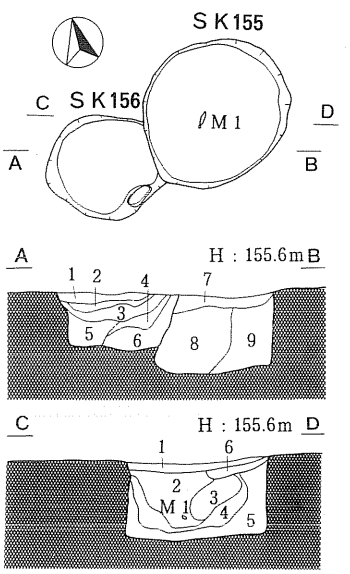
1　黒色土（7.5YR2/1）粘性あり、しまりあり
2　黒褐色土（10YR2/3）粘性あり、しまりなし、浮石粒20～30%混入
3　黒褐色土（10YR2/3）粘性あり、しまりなし、浮石粒10～20%混入
4　黒褐色土（10YR2/3）粘性あり、しまりなし、浮石粒10～15%混入
5　黒褐色土（10YR2/3）粘性あり、しまりなし、浮石粒20～30%混入
6　黒褐色土（10YR2/3）粘性あり、しまりなし、浮石粒15～20%混入



1　黄褐色土（10YR5/6）火山灰が主体である
2　黒褐色土（10YR2/2）粘性あり、しまりなし
3　黒褐色土（10YR2/2）しまりなし、地山粒10～20%混入
4　１と同じ、ただし、黒褐色土（10YR2/3）が30～40%混入
5　黒褐色土（10YR2/3）しまりなし、地山粒30～40%混入
6　黒褐色土（10YR2/3）しまりなし、地山粒10%混入
7　黒褐色土（10YR2/3）しまりなし、地山粒10～20%混入
8　黒褐色土（10YR2/3）粘性あり、しまりなし
9　黒色土（7.5YR2/1）粘性あり、しまりあり
10　黒褐色土（10YR2/2）粘性あり、しまりあり
11　暗褐色土（10YR3/4）粘性あり、しまりあり

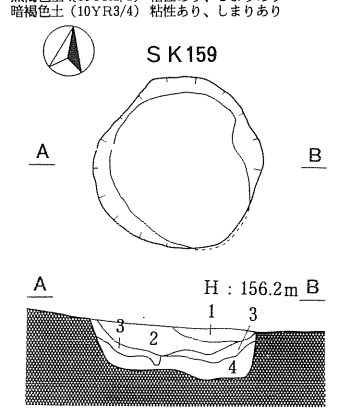


1　暗褐色土（10YR3/4）しまりあり、浮石粒１mm～５mm、軽石状のかたまり若干
2　暗褐色土（10YR3/4）しまりあり、浮石粒１mm～５mm、径10cm以上の軽石多く含む
3　粒状の軽石層、灰黄褐色土（10YR6/2）
4　暗褐色土（10YR3/4）しまりあり、径10cm以上の軽石含む
5　暗褐色土（10YR3/3）しまりなし

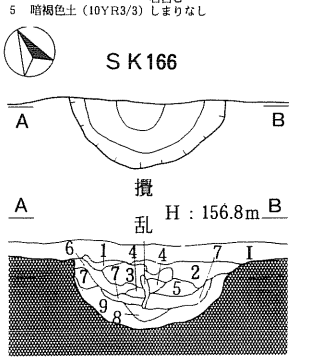


1　黒褐色土（10YR2/3）地山細粒20%、地山大粒５%
2　暗褐色土（10YR3/3）地山粒２mm～10mm大15%
3　黒褐色土（10YR2/3）地山粒１mm～５mm大10%、10mm～ブロック１%
4　暗褐色土（10YR3/4）地山粒１mm～５mm大30%、５mm～10mm大５%
5　暗褐色土（10YR3/4）地山粒１mm～５mm大10%、ブロック30mm～50mm大１%
6　褐色土（10YR4/4）地山粒１mm～２mm大20%、５mm～10mm大１%未満混入

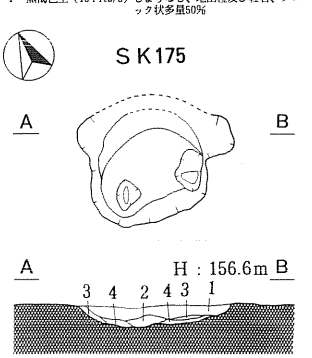
1　黒褐色土（10YR3/2）地山粒１mm～30mm大30%
2　暗褐色土（10YR3/4）地山粒２mm～50mm大40%、地山と暗褐色土が入り混っている
3　褐色土（10YR4/4）地山粒１mm～10mm大30%、炭化物１mm～２mm２～３%混入、地山と暗褐色土が入り混っている
4　褐色土（10YR4/6）暗褐色土に地山粒１mm～10mm大30%、10mm～30mm大29%
5　暗褐色土（10YR3/4）地山粒１mm～５mm大30%、30mm～50mm大５%
6　褐色土（10YR4/6）地山土体であるが、暗褐色土20%
7　褐色土（10YR4/6）地山粒１mm～５mm大30%、ブロック30mm大１%
8　褐色土（10YR4/6）地山粒１mm～５mm大10%、５mm～10mm大５%
9　褐色土（10YR4/6）地山粒１mm～５mm大５%、５mm～10mm大１%、ブロック１%



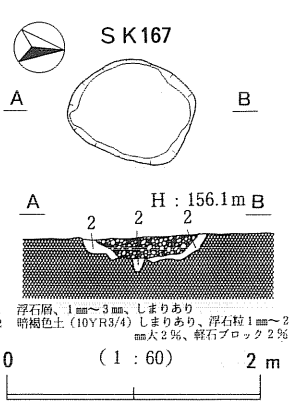
1　黒褐色土（10YR2/2）しまりあり、浮石粒１mm大１%軽石粒２mm～10mm大10%
2　黒色土（10YR2/1）しまりあり、浮石粒２mm～５mm大３%、地山粒１mm～２mm大10%
3　黒色土（10YR2/1）しまりやや欠ける、浮石粒１mm大１%、炭化物２mm大若干、軽石５mm～40mm大３%
4　黒褐色土（10YR2/3）しまりなし、地山粒及び軽石、ブロック状多量50%



1　暗褐色土（10YR3/3）しまりあり、軽石粒１mm～５mm大５%
2　暗褐色土（10YR3/3）浮石粒５%、軽石粒10%
3　暗褐色土（10YR3/3）浮石粒１%、軽石粒５%
4　暗褐色土（10YR3/3）しまりあり、軽石ブロック20%
5　暗褐色土（10YR3/3）粒子細、粘性若干あり、しまりあり、浮石粒30%、軽石１%
6　暗褐色土（10YR3/3）軽石20%、焼土ブロック５%
7　暗褐色土（10YR3/3）浮石粒10%、軽石ブロック10%
8　暗褐色土（10YR3/3）浮石粒５%、軽石粒３%
9　暗褐色土（10YR3//3）しまりあり、軽石ブロック15%

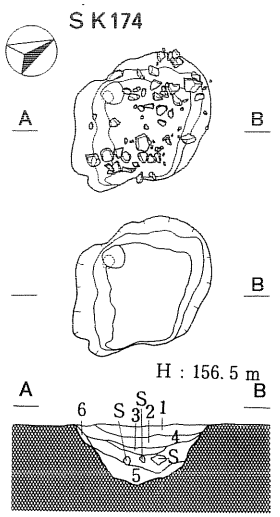


1　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性若干あり、しまりあり、浮石粒１mm～５mm大40%
2　黒色土（10YR2/1）粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒１mm大10%
3　黒色土（10YR1.7/1）粒子細、粘性若干あり、しまりあり、炭化物シミ状堆積、焼土粒２%、浮石粒10%
4　黒褐色土（10YR2/2）粒子細、粘性若干あり、しまりあり、浮石粒１mm～２mm大80%

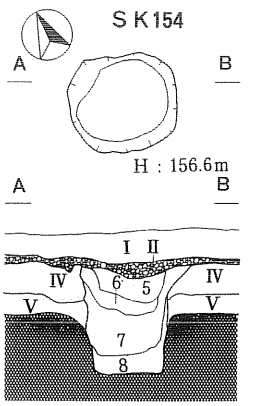


1　浮石層、１mm～３mm、しまりあり
2　暗褐色土（10YR3/4）しまりあり、浮石粒１mm～２mm大２%、軽石ブロック２%

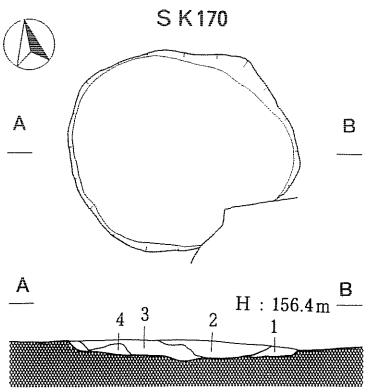
第23図　ＳＫ土坑　ＳＮ焼土遺構



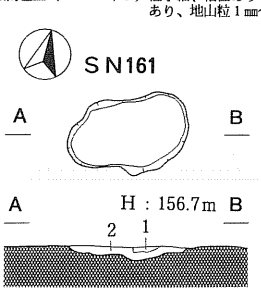
1　黒 色 土（10YR２/１）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒１㎜～５㎜３％
2　黒褐色土（10YR２/２）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒１㎜～10㎜20％
3　黒 色 土（10YR２/１）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒１㎜大２％
4　黒褐色土（10YR２/２）粒子細、粘性あり、しまりやや欠ける、地山粒１㎜～５㎜20％、小礫を含む
5　黒褐色土（10YR２/２）地山ブロック、しまりあり、地山ブロック、４と地山（軽石ブロック）の混入
6　黒褐色土（10YR２/３）粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒１㎜～２㎜



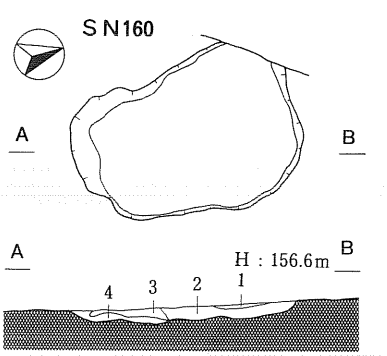
Ⅰ　黒褐色土（10YR２/２）粘性なし、締まりあり、粒子中、浮石粒１㎜～５㎜
Ⅱ　黒褐色土（10YR３/２）粘性なし、締まりあり、石状の浮石10㎜～30㎜、浮石粒１㎜～７㎜、粒子中
Ⅳ　黒 色 土（10YR２/１）粘性あり、締まりあり、浮石粒含まない、粒子細
Ⅴ　暗褐色土（10YR３/３）粘性あり、締まりあり、浮石粒含まない、粒子細、漸移層
5　黒褐色土（10YR３/２）粘性なし、締まりあり、浮石粒１㎜～２㎜が Ⅱ よりも密に混入、粒子中
6　黒褐色土（10YR３/２）粘性なし、締まりあり、軽石径150㎜混入、粒子中
7　暗褐色土（10YR３/４）粘性なし、締まりなし、軽石径150㎜混入、粒子中
8　黒 色 土（10YR２/１）粘性なし、締まりなし、軽石径150㎜混入、粒子中



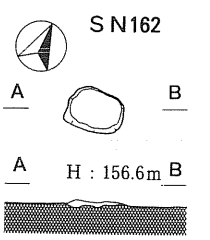
1　黒褐色土　（7.5YR３/２）　粘性あり、しまりなし、明褐色粘性土１～２％混入
2　黒褐色土　（7.5YR３/１）　粘性あり、しまりなし
3　黒褐色土　（7.5YR３/２）　粘性あり、しまりなし、明褐粘性土１～２％混入
4　極暗褐色土（7.5YR２/３）　粘性あり、しまりあり、明褐粘性土１～２％混入



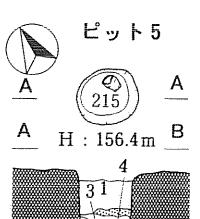
1　赤褐色土（５YR４/３）焼土、粘性あり、しまりあり
2　赤褐色土（５YR４/８）黒褐色土（7.5YR２/２）の混合土層、粘性あり、しまりなし

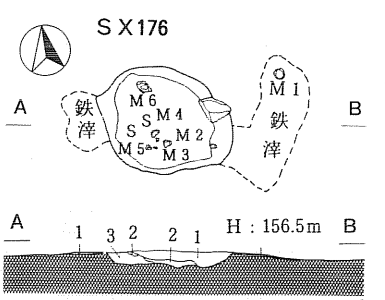


1　黄褐色浮石（10YR５/６）大山灰（To－a）が主体で、焼土がわずかに混入する
2　黒 色 土（7.5YR２/１）粘性あり、しまりなし、浮石（To－a）５～10％混入
3　黒 色 土（7.5YR２/１）粘性あり、しまりなし、浮石（To－a）30～40％混入
4　黒 色 土（7.5YR２/１）粘性あり、しまりなし、浮石（To－a）10～20％混入



赤褐色土（５YR４/８）粘性あり、しまりあり



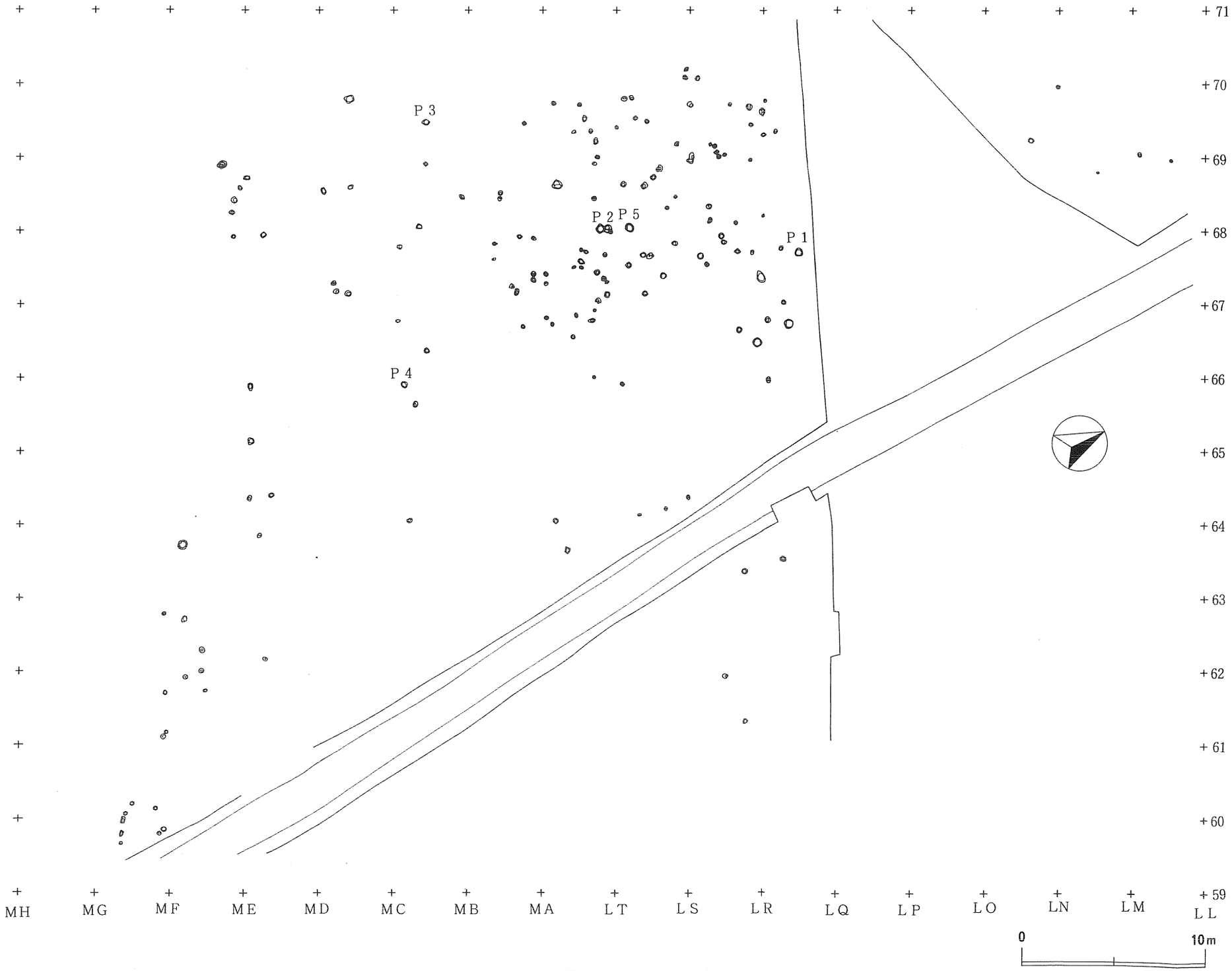


1　黒褐色土（10YR２/２）粒子細、粘性若干、締まりあり、浮石粒２～３㎜大３％、小礫５～10㎜２％、鉄澤10％
2　黒 色 土（10YR２/１）粒子細、粘性あり、締まりやや欠ける、炭化物30％、浮石粒２％
3　黒褐色土（10YR２/２）粒子細、粘性あり、締まりやや欠ける、浮石粒１～２㎜３％炭化物１％

0　（１：60）　2 m

1　黒色土　（10YR２／１）粒子細、粘性あり、しまりなし、浮石粒１㎜～３㎜大20％、軽石粒５㎜～10㎜大５％
2　灰黄褐色土　（10YR６／２）粒子細、粘性あり、しまりやや欠ける、浮石粒１㎜～２㎜大10％
3　地山ブロック（軽石）大
4　地山ブロック、軽石粒

第24図　ＳＫ土坑　ＳＮ焼土遺構　柱穴様ピット　ＳＸ性格不明の遺構



第25図　柱穴様ピット分布図

(3)　**柱穴様ピット**（第25図）

中央の遺構を中心に広く分布しているもので、規模、断面形に規則性がない。

第２節　遺構外出土の遺物

１．縄文時代の遺物

(1)　**土器**（第36～38図）

時期毎に群に別けて細分した。

第Ⅰ群　前期初頭の土器である。

a類（第36図、110～116）

いずれも胎土に繊維を混入し、羽状縄文があり、107は内面に条痕を施すものである。107、108は補修孔がある。

b類（第36図117）

胎土に繊維を混入し、表裏縄文を施すものである。

第Ⅱ群　前期前葉の土器である。胎土にやや繊維を混入し、焼成が良く硬質である。

a類（第36図104、105）

いずれも口縁部で、104は口唇部をヘラ状工具で平滑に仕上げている。

b類（第36図106、109）

いずれも胴部で、羽状縄文を施すものである。

第Ⅲ群（第36図118、119）　前期末葉の土器である。

口縁部の文様帯が狭いもので、118は胴部上半から木目状撚糸文を施すものである。

第Ⅳ群　後期初頭の土器である。

a類（第36図125・126、第37図127～130）

地文が無文で、その上に太めの平行沈線で文様帯を構成するもので、125は波状口縁である。

b類（第36図120）

縄文のみのもので、口縁部は粘土紐の貼付によって折返し口縁のように肥厚する。

第Ⅴ群　後期前葉の土器である。

a類（第36図122～124、第37図133～136）

地文が縄文で、浅い沈線で文様を区画するものである。

b類（第37図131、132）

地文が無文で、浅く細い沈線で文様を区画するものである。

第Ⅵ群　後期後葉の土器である。

a類（第37図133）

沈線による区画文内にクシ状工具による浅い条線を施すものである。

b類（第36図121、第37図138）

縄文のみを施すものである。

(2)　**石器**（第38図169）

石棒が１点出土している。

２．弥生時代の遺物

(1)　**土器**（第37図138～152、第38図153～168）

139～141、153、154は沈線で文様帯を区画するもので、153は外面に朱を塗っている。143～146、157は横位または斜位の撚糸文によって口縁部の文様帯を構成しているものである。いずれも小坂Ｘ式に比定される。

３．平安時代の遺物

(1)　**土器**（第39図170～189、第40図190～198、200～209、第41図210～213）

170～182は土師器杯、183～198は土師器甕である。200は須恵器杯、201～203は須恵器壺で、204～209は須恵器甕である。211～213は土師器把手付土器の小形のもので、210は把手部分である。

(2)　**土製品**（第40図199）

鞴羽口の破片が１点出土している。外面にケズリによる調整痕がある。

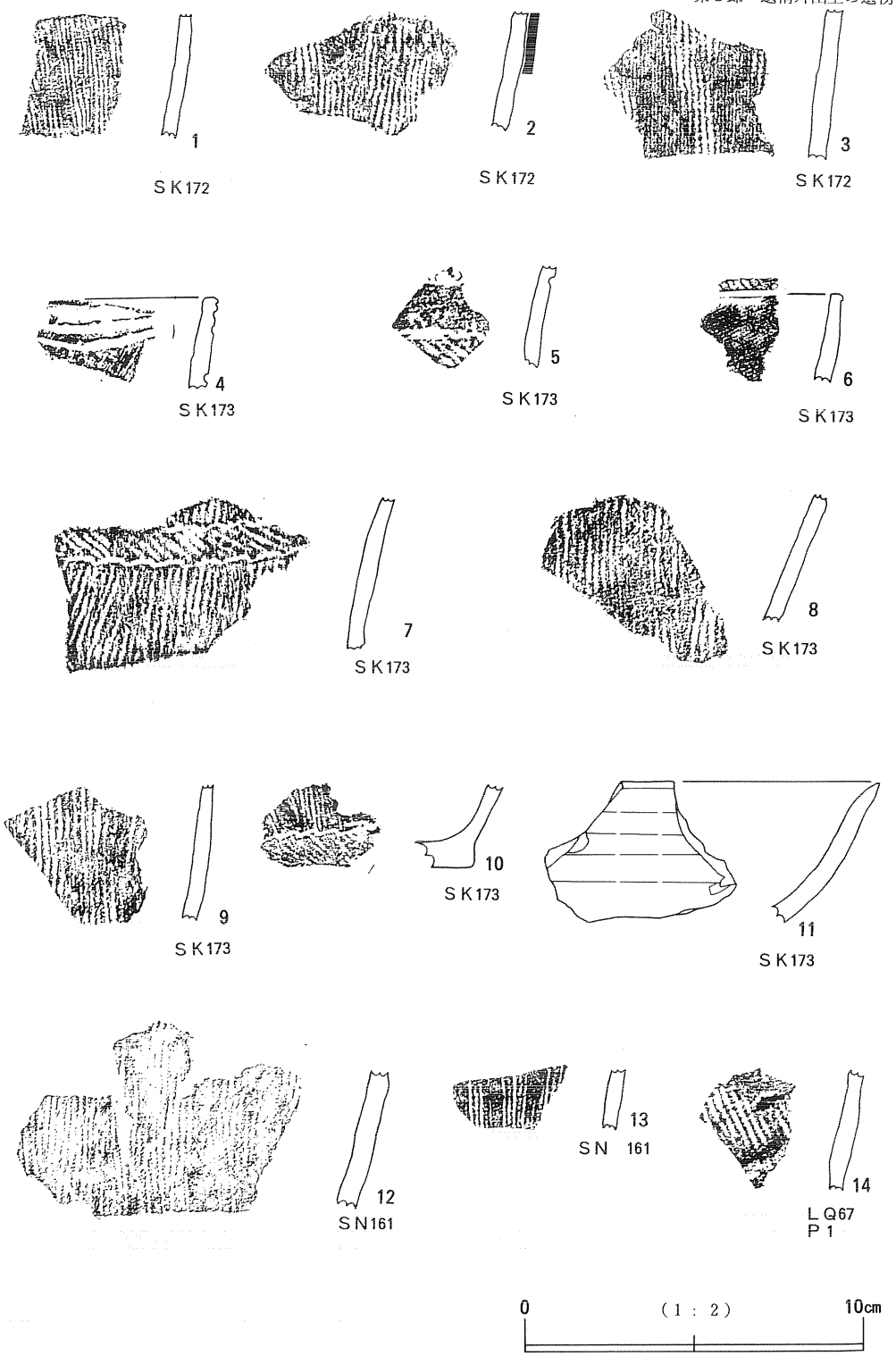
(3)　**鉄製品**（第42図217・218・220・221・225～227）

217と218は鉄鏃の基部かと思われるが、218は釘かもしれない。220、221は鎹状のものである。220は釘かもしれない。225、226は棒状を呈する。227は椀形滓でＬＴ68グリッド出土である。このグリッドからはもう１点出土しており、大きさ11.5×8.5㎝、重さ0.24㎏である。

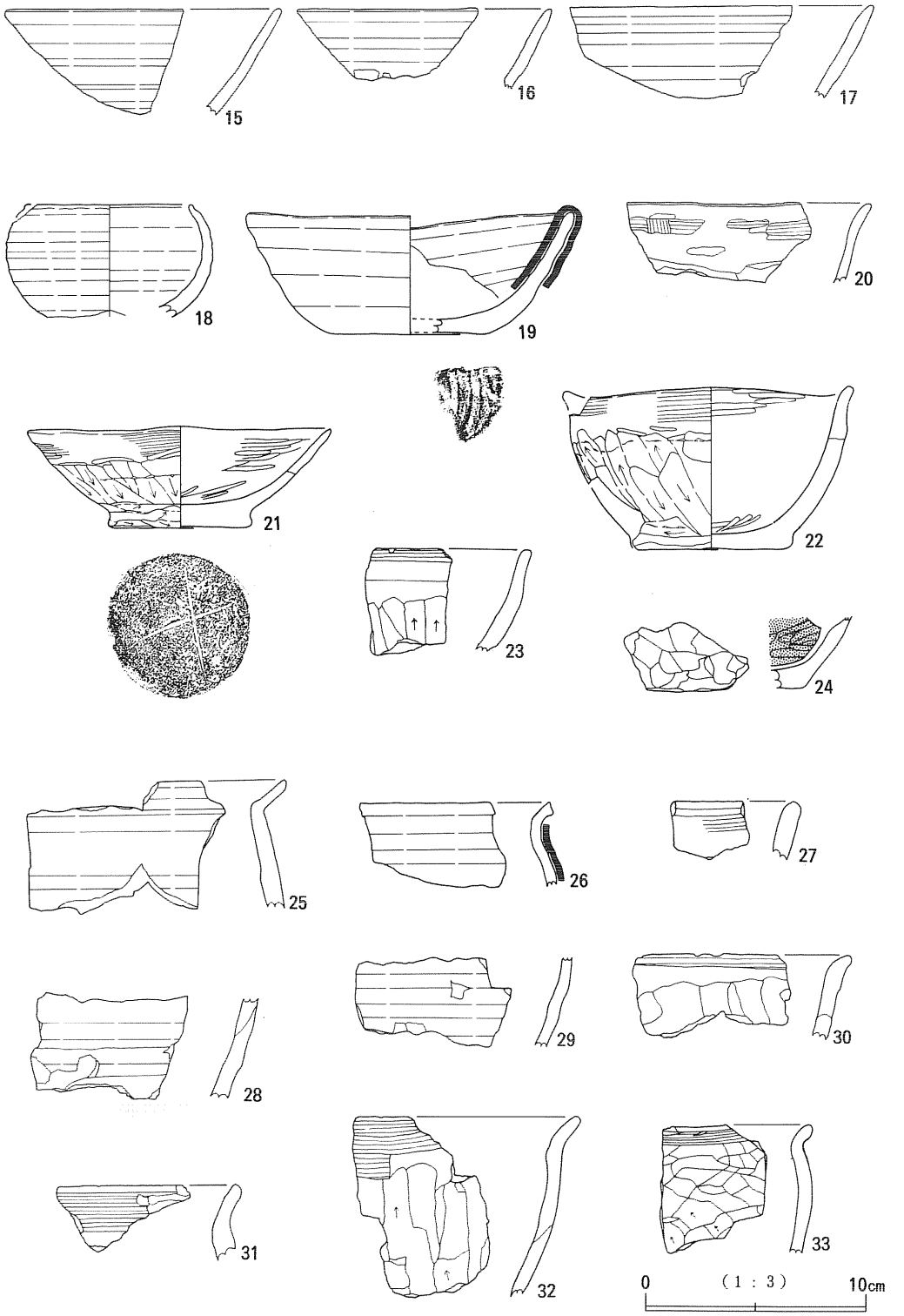
註１　遺構内出土遺物の扱い方は直接それに携わった人によって様々なアプローチの方法がある。ここでは下記の報告書に記述されている遺構内出土遺物、とりわけ住居跡からの土器の出土状況について想定できる「転用」「遺棄」「廃棄」「流入」の概念に基づいている。

多摩市遺跡調査会　『和田・百草（もぐさ）遺跡群』　多摩市埋蔵文化財調査報告３　1982(昭和57年)

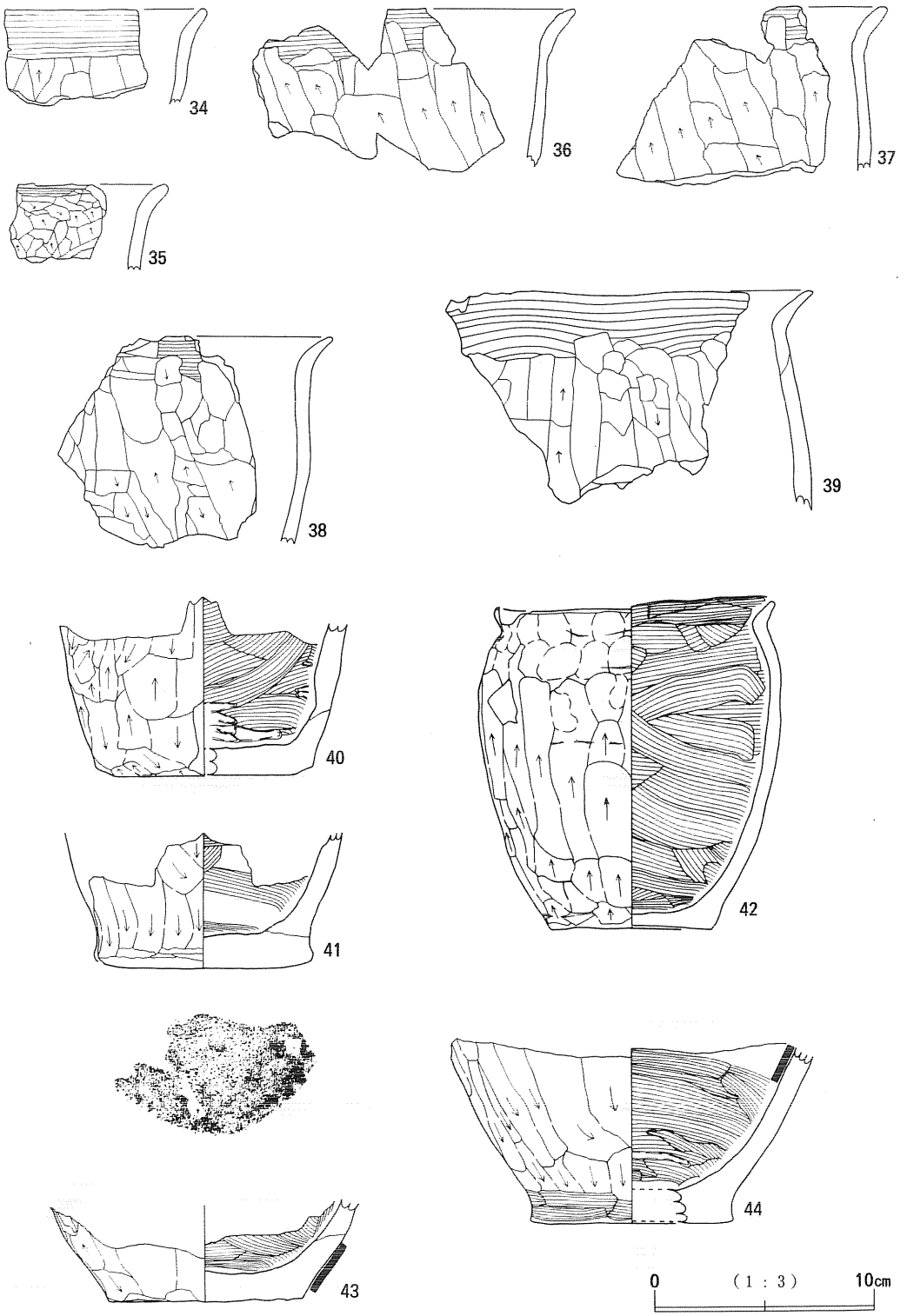
多摩都市計画道路事業１・３・１号線関連遺跡調査会　『向ケ岡遺跡』　多摩市埋蔵文化財調査報告６　1983(昭和58年)



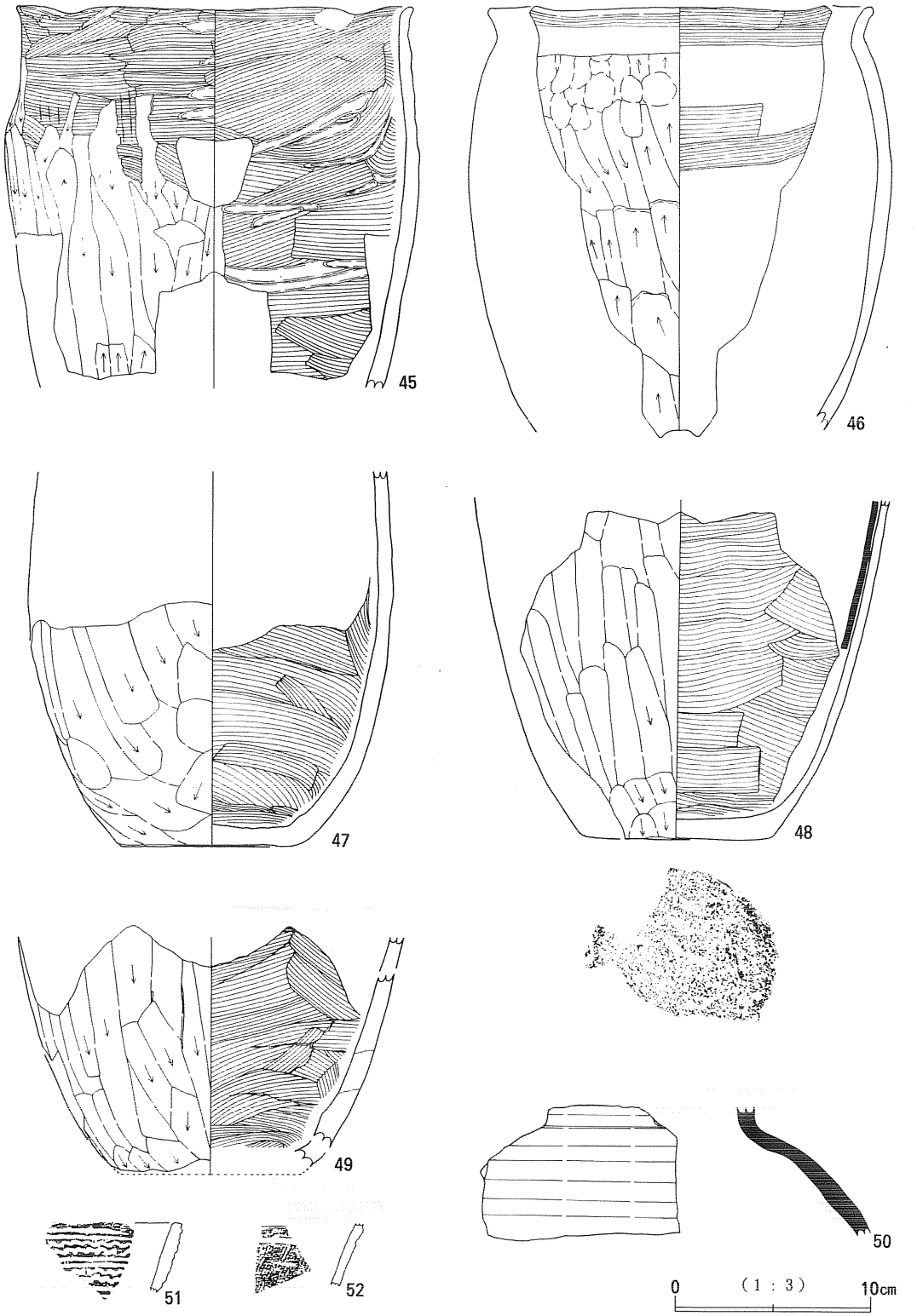
第26図　弥生時代の遺構内出土遺物



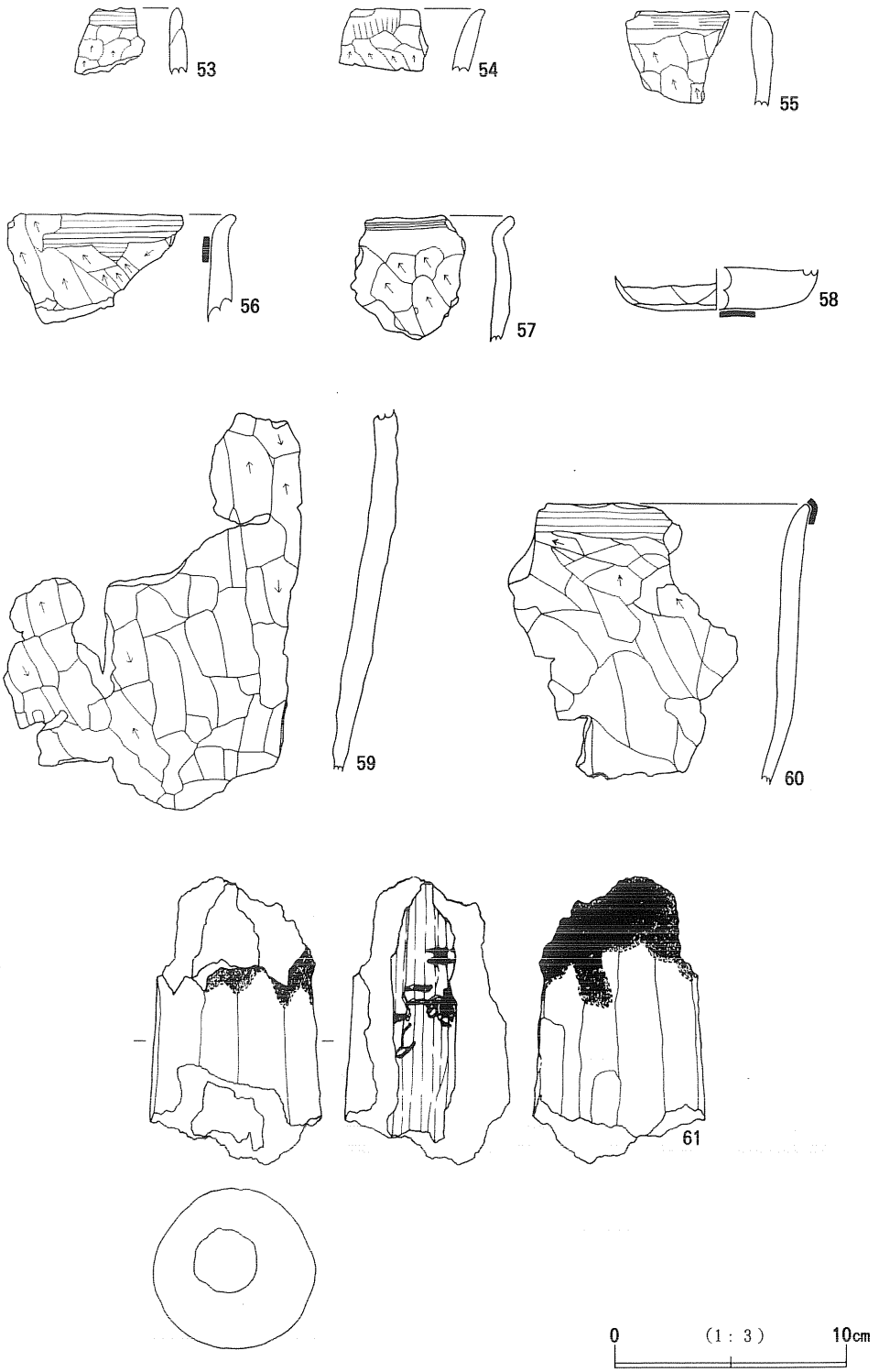
第27図　ＳＩ150竪穴住居跡　出土遺物(1)



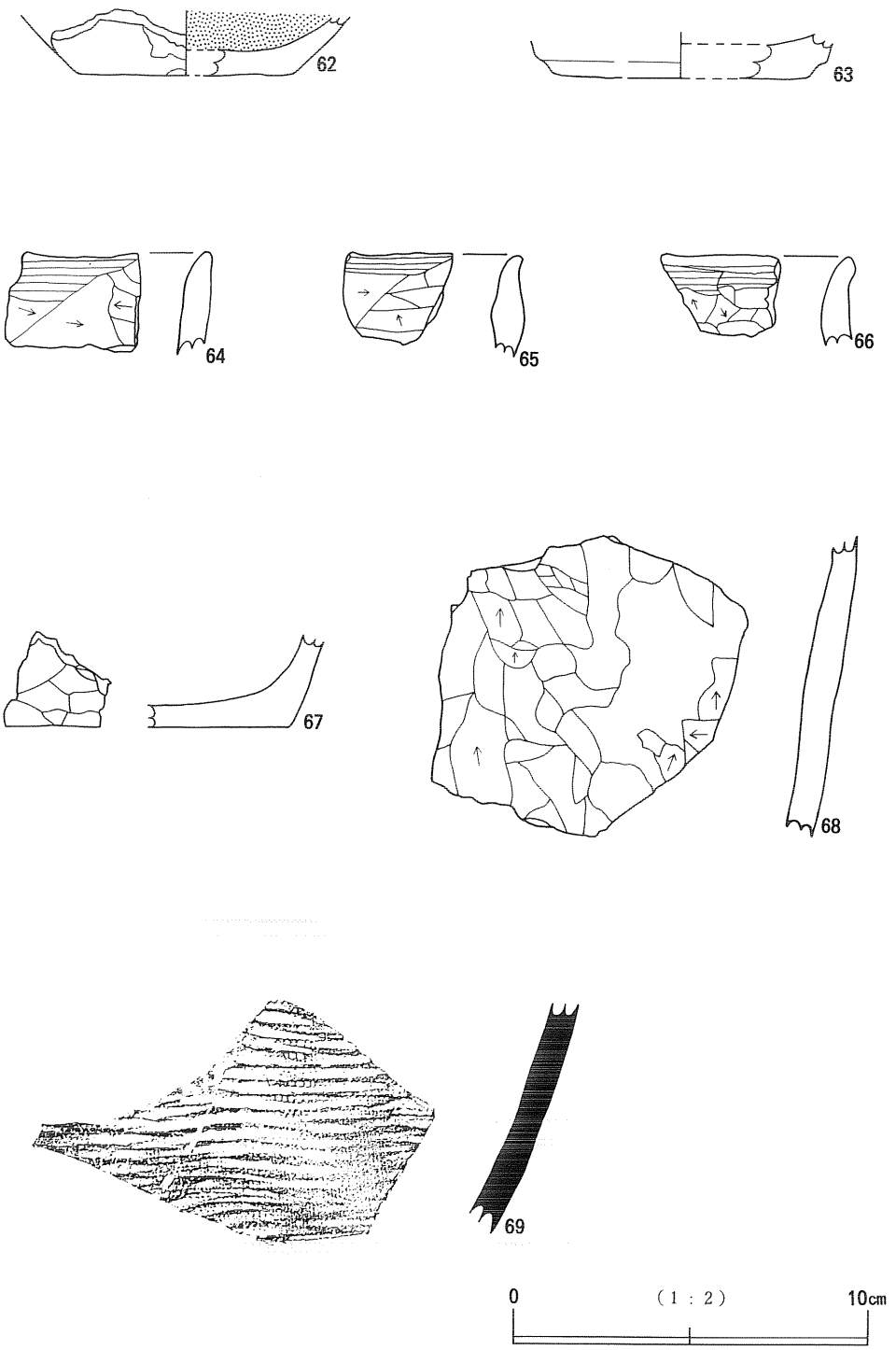
第28図　ＳＩ150竪穴住居跡　出土遺物(2)



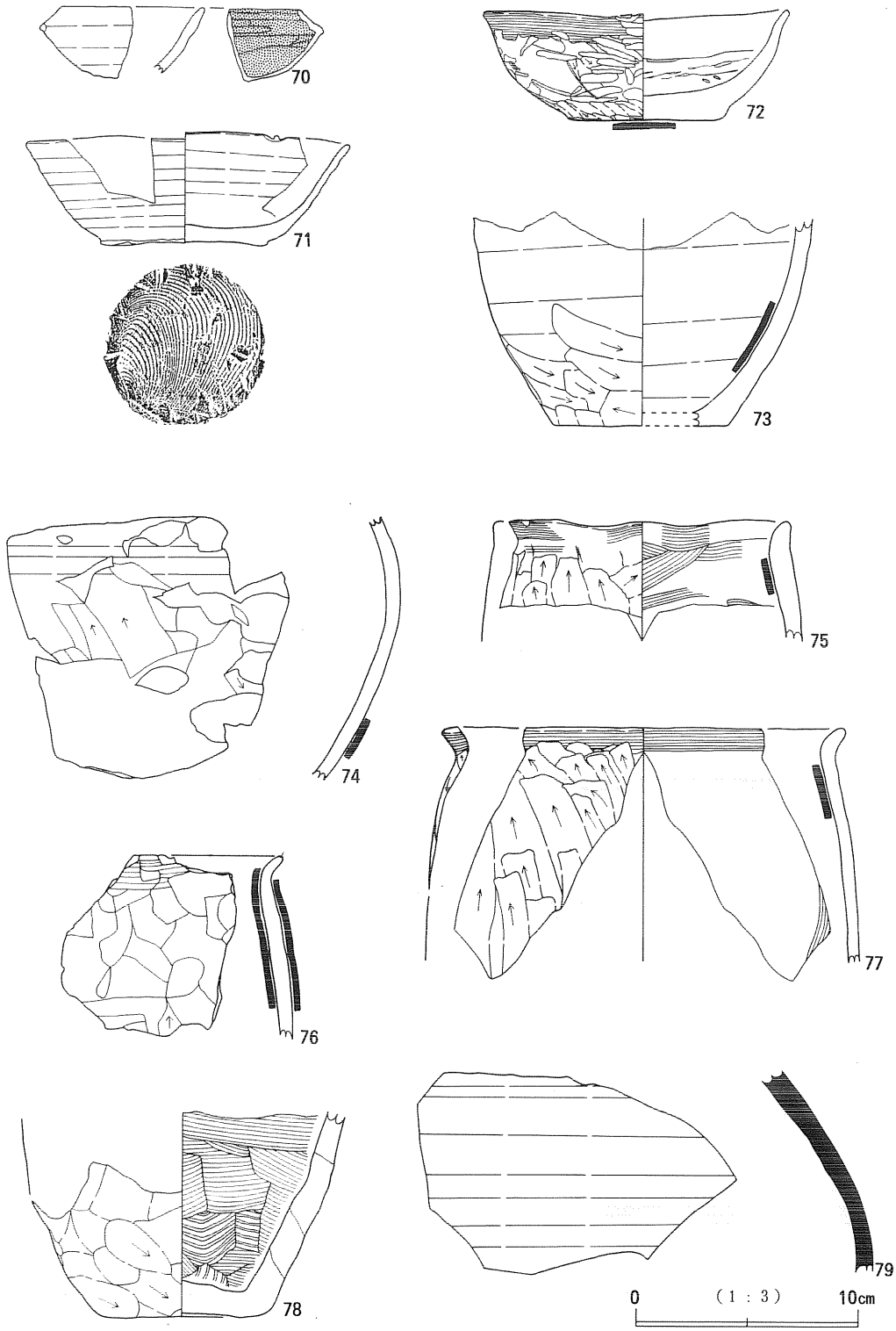
第29図　ＳＩ150竪穴住居跡　出土遺物(3)



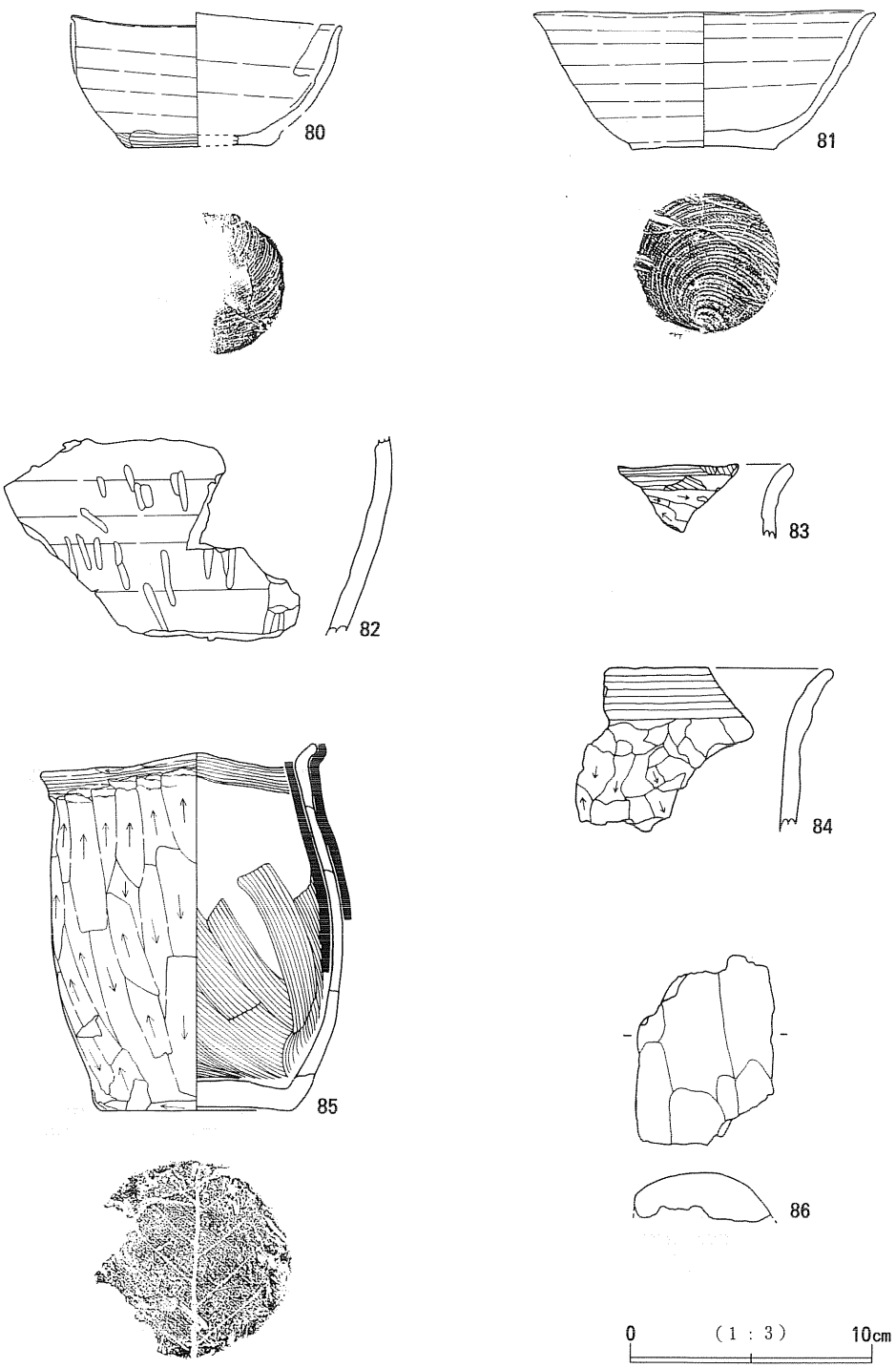
第30図　ＳＩ151竪穴住居跡　出土遺物



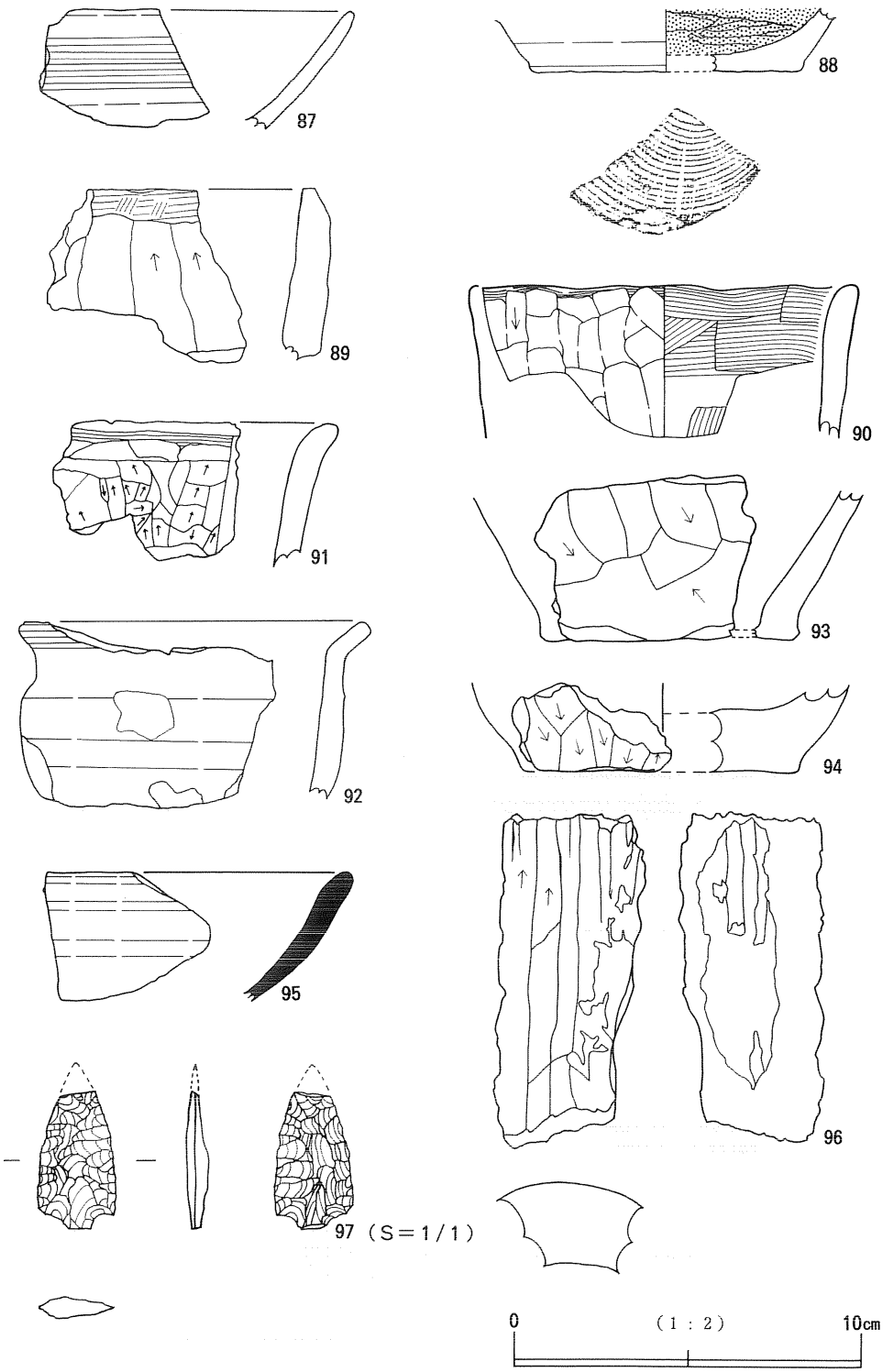
第31図　ＳＩ152竪穴住居跡　出土遺物



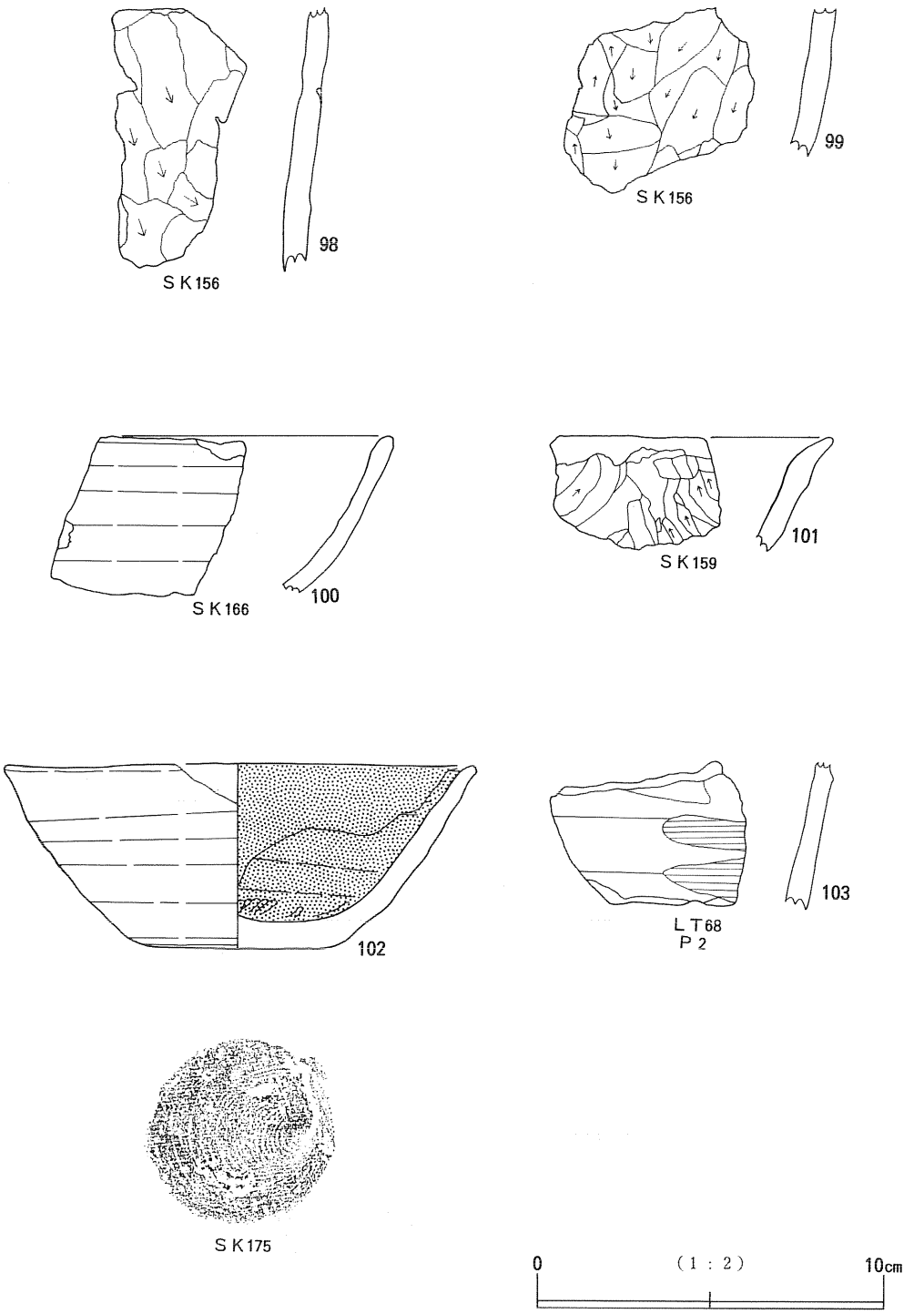
第32図　ＳＩ157竪穴住居跡　出土遺物



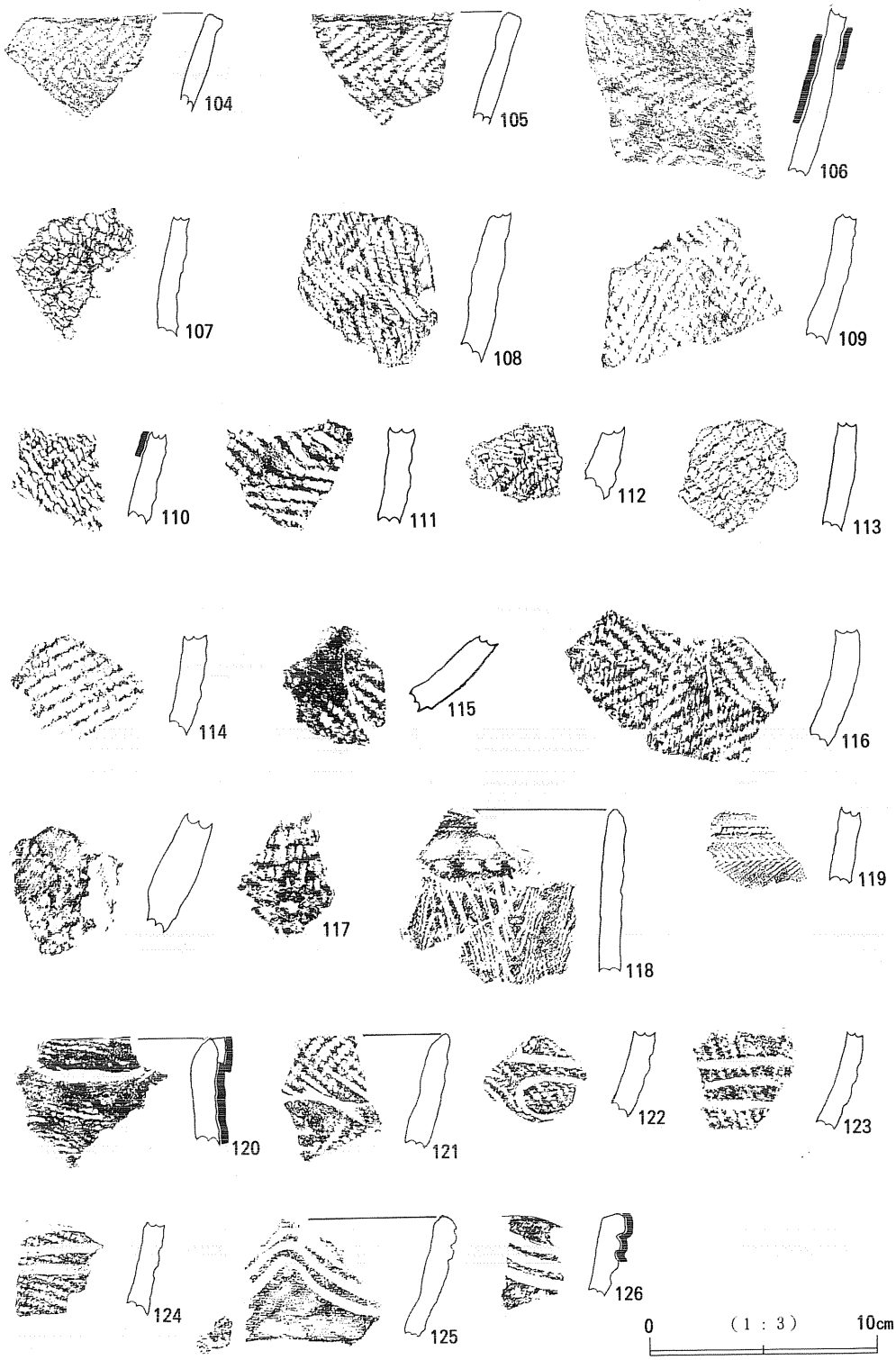
第33図　ＳＩ158竪穴住居跡　出土遺物



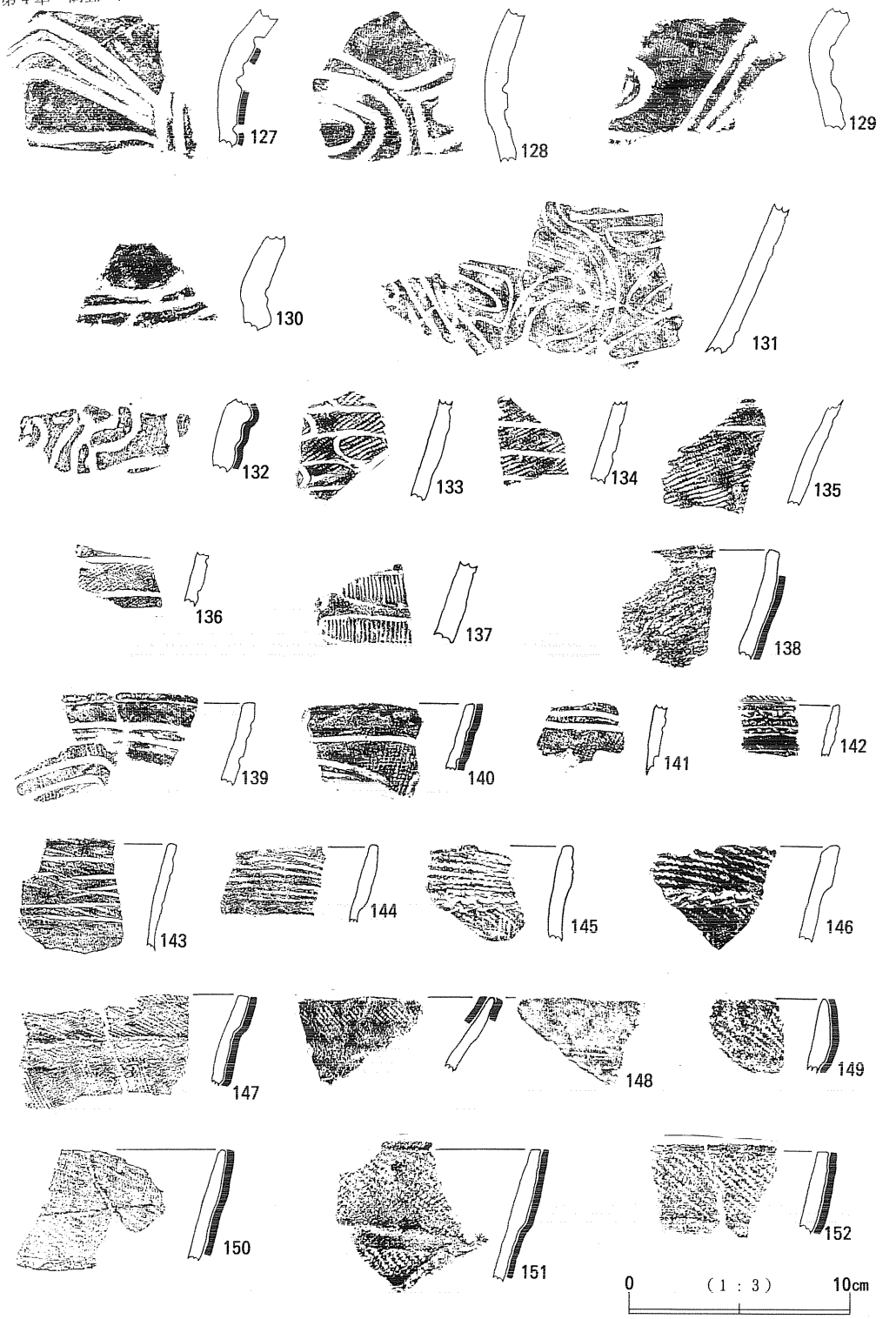
第34図　ＳＤ102空堀跡　出土遺物



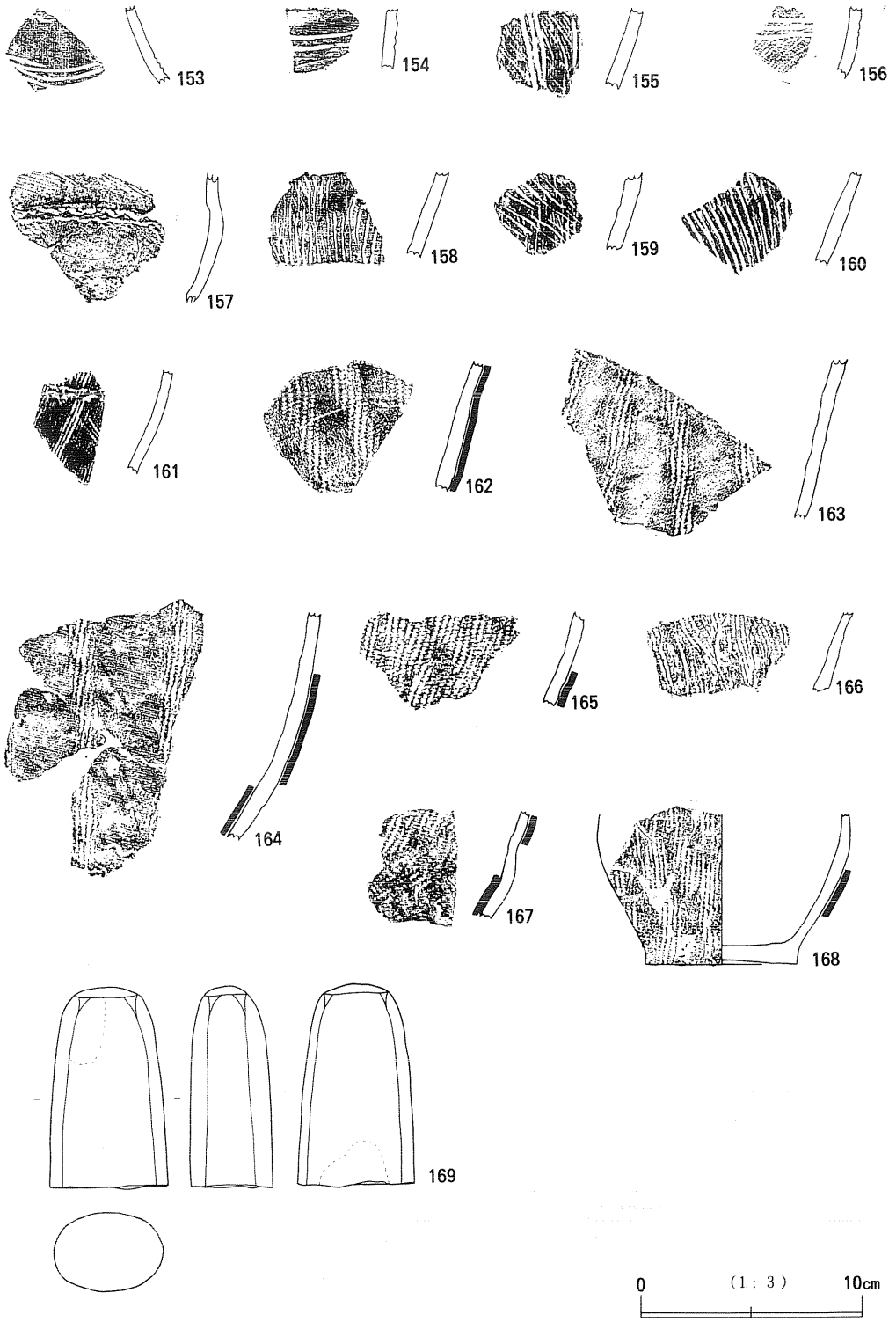
第35図　平安時代の遺構内出土遺物



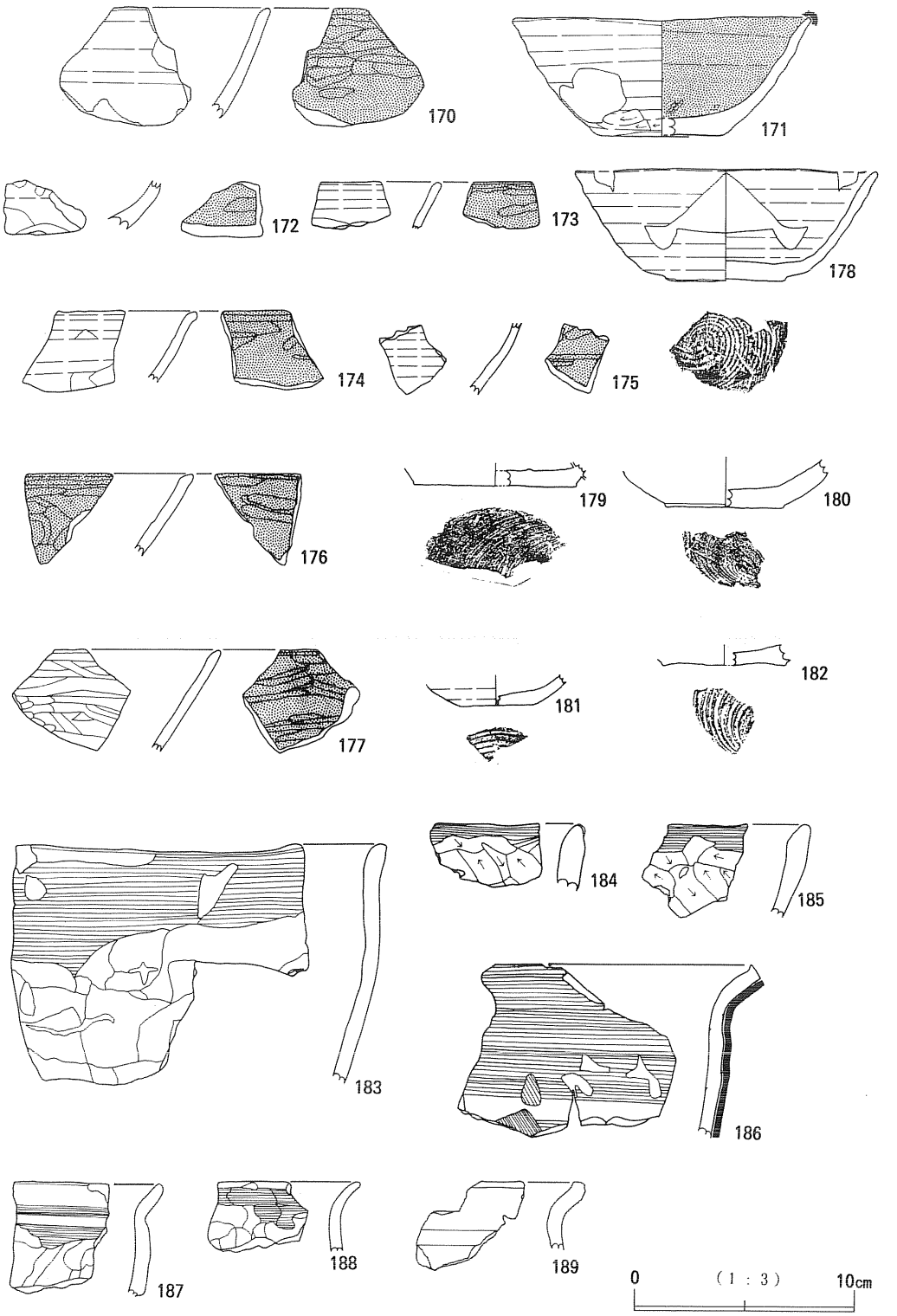
第36図　遺構外出土遺物(1)　―縄文土器―



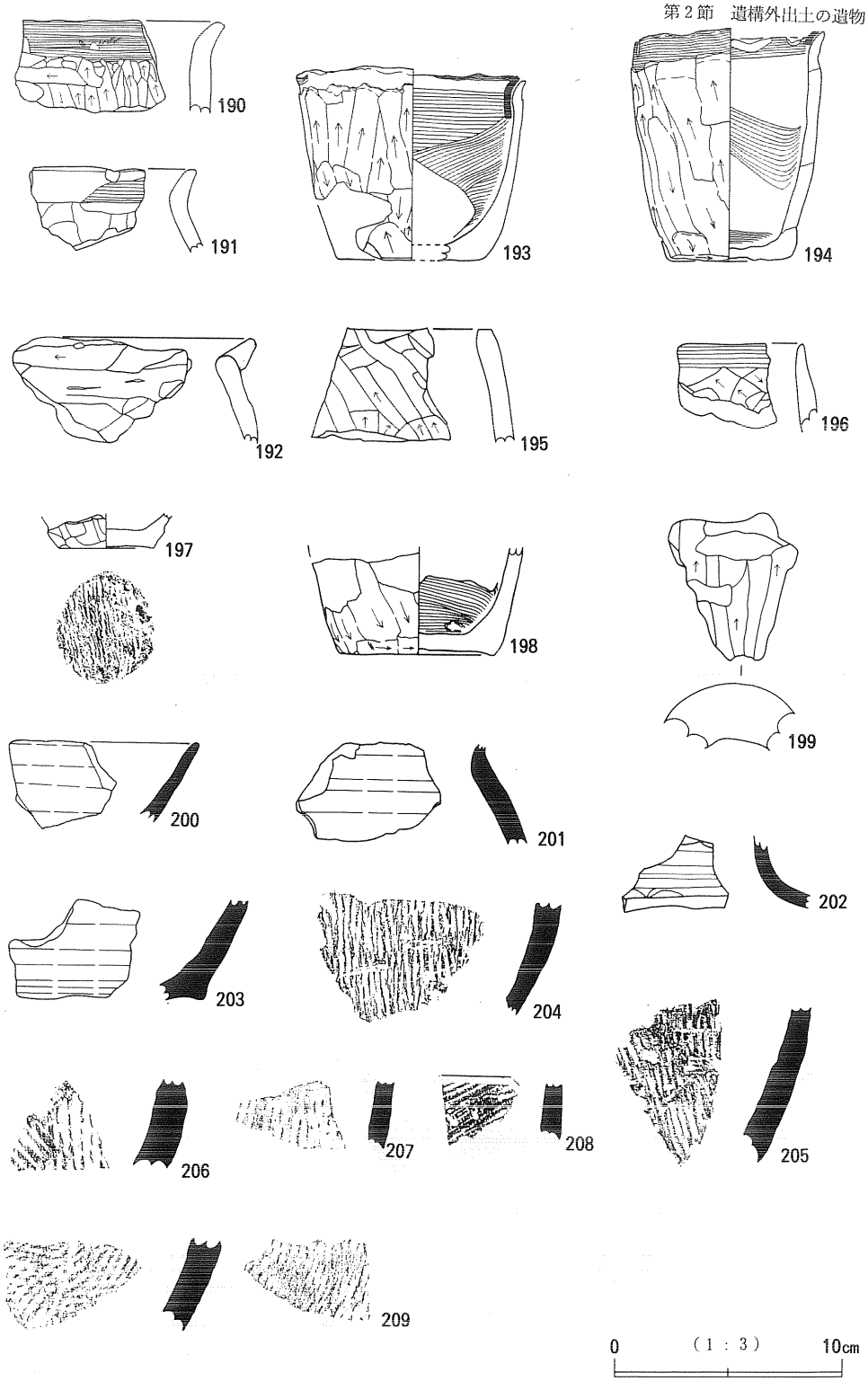
第37図　遺構外出土遺物(2)　―縄文土器・弥生土器―



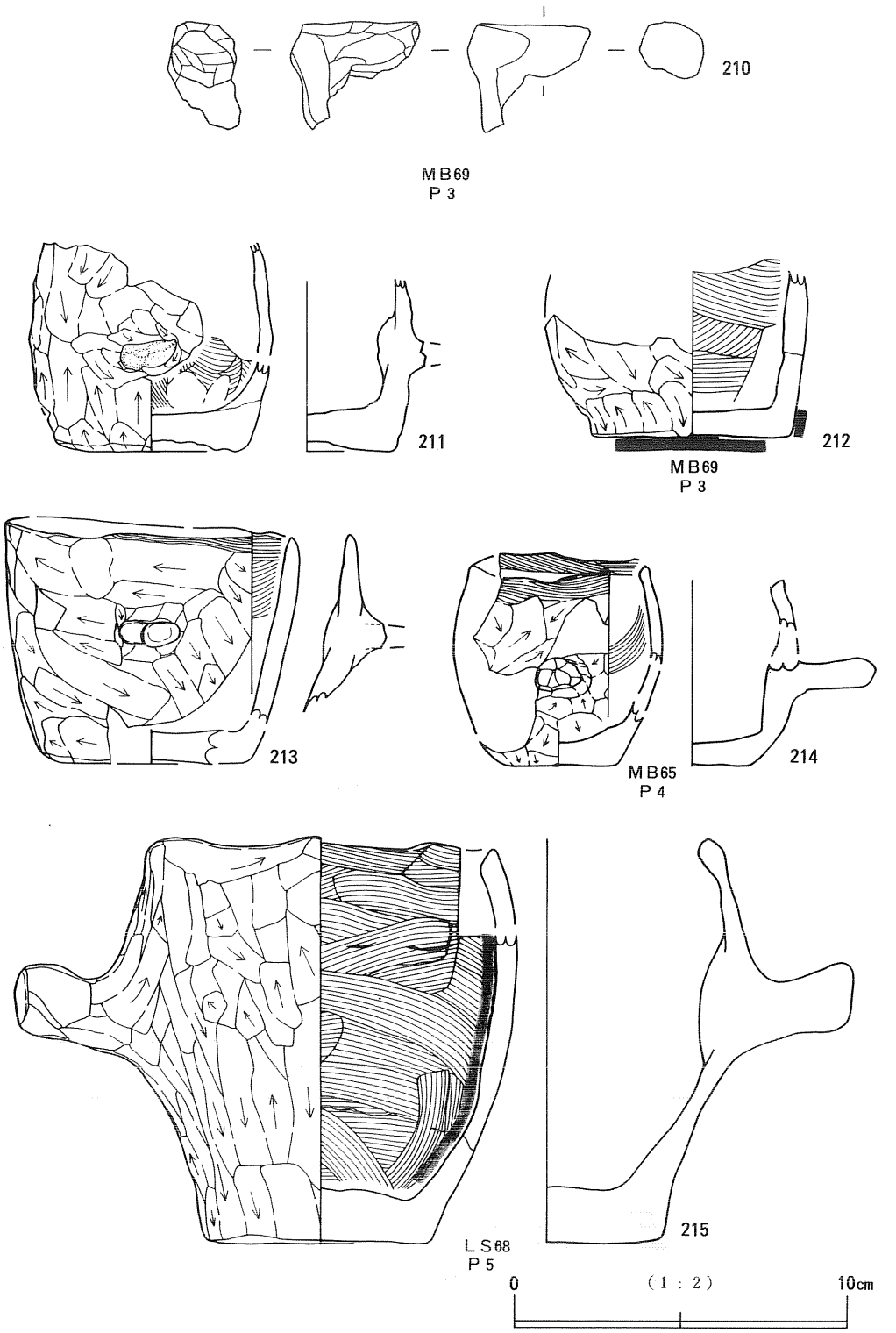
第38図　遺構外出土遺物(3)　―弥生土器・石器―



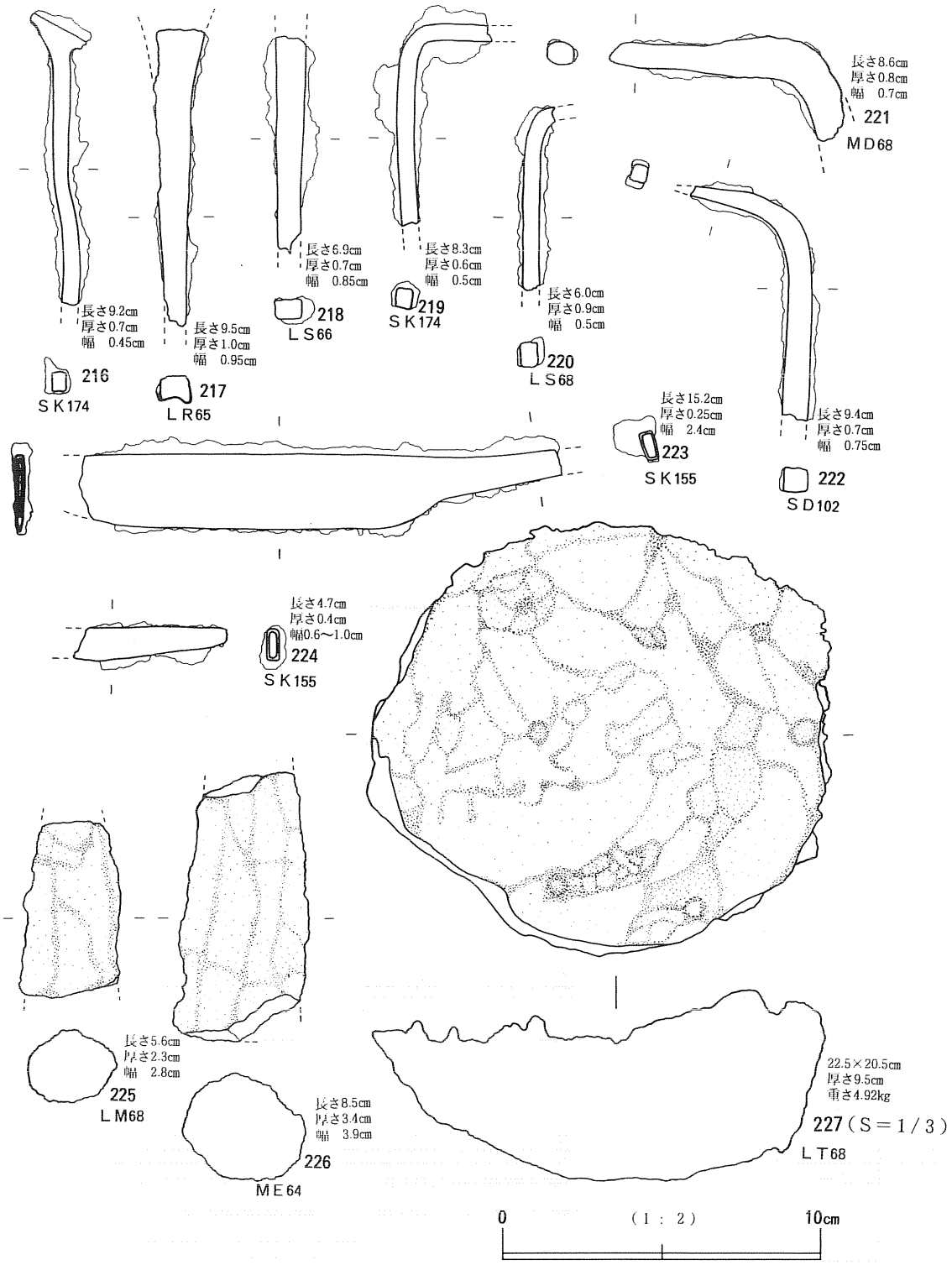
第39図　遺構外出土遺物(4)　―土師器―



第40図　遺構外出土遺物(5)　―土師器・須恵器・鞴羽口―



第41図　土師器把手付土器



第42図　鉄製品・鉄滓・鞴羽口

第４表　ＳＩ150　出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外/内	調整 外/内	備考	登録番号
27－15	カマド	土師器杯				緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	7.5YR8/4浅黄橙 10YR8/4浅黄橙	ロクロ	RP68	62
27－16	カマド	土師器杯				緻密１㎜～３㎜の砂粒少量混入	良好	2.5YR8/3淡黄 2.5YR8/3淡黄	ロクロ	RP74	63
27－17	ピット３	土師器杯	(13.8)			緻密１㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 10YR6/3にぶい黄橙	ロクロ	ピット３埋土一括 RP21	61
27－18	ピット３	土師器椀	(7.4)			緻密１㎜～２㎜の砂粒、小石混入	良好	10YR6/8明黄褐 10YR5/6黄褐	ロクロ	ピット３埋土一括	21
27－19	埋土 SD102	土師器杯	(14.8)	(7.0)	4.9～5.5	緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	7.5YR7/6～7/8 橙～黄橙 7.5YR7/3にぶい橙	ロクロ	RP29、RP30、SD102埋土一括 回転糸切り無調整	1
27－20	埋土 カマド	土師器杯				緻密２㎜の砂粒小石混入	良好	7.5YR6/6橙 10YR5/2灰黄褐	ロクロ→ミガキ	RP19 カマド一括	71
27－21	カマド	土師器杯	(13.6)	6.4	4.6	緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ→ミガキ ミガキ	RP86支脚、ケズリ出しの高台、底面ケズリ ２㎜～３㎜の砂粒付着	34
27－22	埋土	土師器椀	(12.8)	(7.2)	7.0～7.4	緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	５YR6/6橙 ５YR6/6橙	横ナデ→ケズリ→ミガキ ミガキ	RP6、RP25、ケズリ出しの高台、底面ケズリ	33
27－23	カマド	土師器椀				緻密１㎜の砂粒少量混入	良好	10YR8/4浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	横ナデ→ケズリ→ミガキ ミガキ	RP35	64
27－24	埋土	土師器杯				緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	10YR5/2灰黄褐 黒色処理	ケズリ ミガキ	RP４ 底面ケズリ	36
27－25	カマド	土師器甕				緻密１㎜～３㎜の砂粒少量混入	良好	10YR8/4浅黄橙 10YR8/4浅黄橙	ロクロ	RP78	75
27－26	埋土	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒多最混入	良好	7.5YR5/3にぶい褐 7.5YR7/6橙	ロクロ	RP24 外面炭化物付着	68
27－27	カマド	土師器甕				緻密３㎜～５㎜の小石少量混入	良好	10YR7/4にぶい黄褐 10YR6/4にぶい黄橙	ロクロ	RP66	77
27－28	カマド	土師器甕				緻密１㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ	RP56	72
27－29	埋土	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	横ナデ→ケズリ 横ナデ	埋土一括	70
27－30	カマド	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒多量混入	普通	10YR8/3浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ 横ナデ	RP36　小型	73
27－31	カマド	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒多量混入	良好	7.5YR6/3にぶい褐 10YR6/2灰黄褐	横ナデ	カマド一括	65
27－32	カマド	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒多量混入	良好	2.5Y4/2暗灰黄 10YR4/3にぶい黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP47　小型	67
27－33	埋土	土師器甕				緻密２㎜～４㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 2.5Y4/2暗灰黄	ケズリ→横ナデ ヘラナデ→横ナデ	RP18　小型	69
28－34	カマド	土師器甕				緻密３㎜～５㎜の小石混入	良好	10YR8/4浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	ケズリ→横ナデ ヘラナデ→横ナデ	RP45	74
28－35	埋土	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/6橙 10YR7/6明黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP５　小型	66
28－36	カマド	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒、小石多量混入	良好	10YR8/4浅黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP42	78
28－37	カマド	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒、小石多量混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP52、RP77	79
28－38	埋土	土師器甕				緻密２㎜～５㎜の小石混入	良好	7.5YR8/5浅黄橙 10YR7/6明黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP13	76
28－39	カマド	土師器甕	(19.6)			緻密２㎜～５㎜の小石混入	良好	10YR8/4浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP48	80
28－40	カマド	土師器甕		(9.9)		緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR6/1褐灰 10YR7/4にぶい黄橙	ケズリ ヘラナデ→棒ナデ	SI150－RP38 SI157－RP2、32(埋土)	6
28－41	カマド	土師器甕		(9.8)		１㎜～４㎜の砂粒多量混入	良好	10YR6/3にぶい黄橙 10YR5/1褐灰	ケズリ ヘラナデ	カマド一括　砂底	19
28－42	カマド	土師器甕	12.8	7.3	14.7	１㎜～２㎜の砂粒多量混入	良好	2.5YR6/8橙 2.5YR6/8橙	オサエ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP31、33、44、58、69、73、76、80、81、82 SD102埋土一括	7
28－43	カマド	土師器甕		8.9		緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	５YR7/4にぶい橙 10YR8/4浅黄橙	ケズリ ヘラナデ	RP83 外面炭化物付着	14
28－44	カマド	土師器甕		9.2		緻密１㎜～４㎜の砂粒、小石混入	良好	10YR7/6明黄褐 10YR6/4～4/3にぶい黄褐	ケズリ→ヘラナデ ヘラナデ→棒ナデ	RP64 内面炭化物付着	8
29－45	カマド 埋土 ピット３	土師器甕	20.4			緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	ケズリ→ヘラケズリ→ケズリ→棒ナデ ヘラナデ→棒ナデ→横ナデ	RP22、34、53、87 ピット３埋土一括	5
29－46	カマド	土師器甕	(19.8)			１㎜～５㎜の砂粒小石混入	良好	10YR8/3浅黄橙 ５YR6/8橙	ケズリ→オサエ→横ナデ ヘラナデ→横ナデ	RP77	35
29－47	カマド 埋土	土師器甕		9.2		１㎜～５㎜の砂粒小石混入	良好	7.5YR6/3にぶい黄褐 10YR5/3にぶい黄褐	ケズリ ヘラナデ	RP15、16、46、70、71、72、79、85	12
29－48	カマド 埋土	土師器甕		9.8		緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	５YR5/4にぶい赤褐 10YR7/4にぶい黄橙	ケズリ ヘラナデ	RP28、41、43、49、63、67 砂底	3
29－49	カマド SD102	土師器甕				緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 2.5YR6/4にぶい黄	ケズリ ヘラナデ	RP59、61 SD102埋土一括	4
29－50	埋土 ピット３	須恵器壺				１㎜～３㎜の砂粒少量混入	良好	7.5Y4/1灰 7.5Y5/1灰	ロクロ	RP８ ピット３埋土一括	81
29－51	埋土	弥生土器				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR6/8橙 7.5YR6/8橙	２条１単位の沈線間に鋸歯状の沈線文を施文	埋土一括	66
29－52	埋土	弥生土器				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR7/3にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	Rの撚糸文→横位の沈線	埋土一括	72

第５表　ＳＩ151　出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外内	調整 外内	備考	登録番号
30－53	床面	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	5 YR5/2にぶい褐 5 YR4/1褐灰	横ナデ→ケズリ 横ナデ	RP１	85
30－54	埋土	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	2.5Y4/1黄灰 2.5Y4/1黄灰	横ナデ→ケズリ 横ナデ	埋土一括	84
30－55	床面	土師器甕				緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 10YR5/3にぶい黄褐	横ナデ→ケズリ 横ナデ	RP１	83
30－56	埋土	土師器甕				緻密２㎜～５㎜の小石混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	埋土一括	87
30－57	カマド	土師器甕				２㎜～７㎜の小石多量混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR4/2灰褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP19	82
30－58	カマド	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR3/1黒褐 10YR6/2灰黄褐	ケズリ ヘラナデ	RP15 底面ケズリ、炭化物付着	39
30－59	カマド	土師器甕				２㎜～７㎜の砂粒小石多量混入	良好	7.5YR3/1黒褐 7.5YR7/4にぶい橙	ケズリ ヘラナデ	RP９、17 58と同一個体	88
30－60	カマド	土師器甕				２㎜～７㎜の砂粒小石多量混入	良好	5 YR6/4にぶい橙 10YR8/3浅黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ	RP15、16、17 58と同一個体	86

第６表　ＳＩ152　出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外内	調整 外内	備考	登録番号
31－62	埋土	土師器杯				緻密１㎜の砂粒少量混入	良好	10YR8/4浅黄橙 黒色処理	ロクロ ミガキ	埋土一括 回転糸切り無調整	37
31－63	埋土	土師器杯				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	5 YR6/6橙 10YR7/3にぶい黄橙	ロクロ	埋土一括　回転糸切り	38
31－64	埋土	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/4にぶき黄橙	横ナデ→ケズリ(横) ヘラナデ	埋土一括	91
31－65	埋土	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR8/3浅黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ 横ナデ	埋土一括	89
31－66	埋土	土師器甕				緻密１㎜の砂粒多量混入	良好	10YR7/6明黄褐 10YR8/8黄橙	横ナデ→ケズリ 横ナデ	埋土一括	90
31－67	埋土	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR8/3浅黄橙 10YR5/2灰黄褐	ケズリ ヘラナデ	埋土一括　底面ケズリ	40
31－68	埋土	土師器甕				１㎜～４㎜の砂粒小石混入	良好	10YR7/6明黄褐 10YR7/3にぶい黄橙	ケズリ ヘラナデ	RP６	92
31－69	カマド	須恵器甕				１㎜の砂粒少量混入	良好	2.5YR4/2灰赤 5 Y4/1灰		RP１、２ カマド確認面	94

第７表　ＳＩ157　出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外内	調整 外内	備考	登録番号
32－70	カマド	土師器杯				緻密１㎜砂粒若干混入	良好	2.5Y8/4淡黄 黒色処理	ロクロ ミガキ	カマド一括	100
32－71	カマド	土師器杯	13.6～14.6	7.5	4.6～5.1	緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	7.5YR8/3浅黄橙 5 YR6/6橙	ロクロ	RP12,18,30 内外面に黒斑 回転糸切り（右）	10
32－72	カマド	土師器杯	13.7	6.8	4.6～5.1	緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	2.5YR5/6明赤褐 5 YR3/6暗赤褐	ケズリ→ナデ→ミガキ ミガキ	RP10、17、25 底面ケズリ 炭化物付着、非ロクロ	15
32－73	カマド	土師器甕		7.8		緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	5 YR5/4にぶい赤褐 10YR7/6明黄褐	ロクロ→ケズリ ロクロ	RP26、28、29 内面炭化物付着、底面ケズリ	9
32－74	カマド	土師器壺				緻密１㎜の砂粒混入	良好	10YR8/3浅黄橙 2.5Y7/3浅黄	ロクロ→ケズリ ロクロ	RP26、27 内面墨痕有り	95
32－75	埋土	土師器甕	(13.3)			１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR6/3にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	ナデ→ケズリ→ナデ ヘラナデ→横ナデ	RP３、４ 内面炭化物付着　小型	29
32－76	カマド	土師器甕				緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR7/3にぶい黄橙 5 Y4/2灰オリーブ	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP23,24 内外面炭化物付着 77と同一個体	93
32－77	カマド	土師器甕	(17.9)			緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR7/3にぶい黄橙 2.5Y4/1黄灰	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP10、11、13、21 76と同一個体	30
32－78	カマド	土師器甕		10.1		緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	2.5YR7/4浅黄 2.5Y8/4淡黄	ケズリ ハケ目＋ナデ→ヘラナデ	RP34　支脚	2
32－79	埋土	須恵器壺				１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	7.5Y4/1灰 7.5Y4/1灰	ロクロ	RP７、８、９	94

第８表　ＳＩ158　出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外内	調整 外内	備考	登録番号
33－80	カマド	土師器杯	11.2	6.0	4.9～5.5	緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	10YR7/6明黄褐 10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ→ヘラナデ ロクロ→ミガキ	RP10、回転糸切り 外面籾痕有り	18
33－81	カマド 埋土	土師器杯	(14.2)	6.0	5.7	緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 10YR8/4浅黄橙	ロクロ	RP８、10 回転糸切り（右）	11
33－82	カマド	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	5 Y2/1黒 10YR8/6黄橙	ロクロ→ケズリ ロクロ	RP７、10	98
33－83	カマド	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	2.5Y3/1黒褐 10YR7/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ 横ナデ	RP６	97
33－84	埋土	土師器甕				１㎜～６㎜の砂粒小石混入	良好	10YR8/3浅黄橙 5 Y7/1灰白	横ナデ→ケズリ ナデ	RP９	96
33－85	埋土	土師器甕	(14.2)	6.0	5.7	緻密１㎜～４㎜の砂粒、小石混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/6明黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	RP2、3、4、5 内外面炭化物付着、底面木葉痕有り	13

第９表　ＳＤ102　出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考	登録番号
34－87	MA59	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	ロクロ ミガキ			51
34－88	MA59 中位層	土師器杯				緻密２㎜の砂粒若干混入	良好	2.5Y8/3淡黄	黒色処理	ロクロ ミガキ			128
34－89	MA58 中位層	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR5/2灰褐	10YR6/4にぶい黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ		口唇部を平坦に調整	53
34－90	MA58・59 中位層	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒多量混入	良好	5 YR6/6橙	10YR7/6明黄褐	横ナデ→ケズリ ナデ			27
34－91	MA59 下位層	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	7.5YR6/4にぶい黄褐	7.5YR6/4にぶい黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ(縦)→横ナデ			52
34－92	LQ59 底面	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR6/4にぶい黄褐	2.5Y8/3淡黄	ロクロ			54
34－93	MA59 中位層	土師器甕				１㎜～５㎜の砂粒・小石混入	良好	10R4/4赤褐	10YR6/2灰黄褐	ケズリ ハケ目状ナデ		底面ケズリ	41
34－94	MA58 下位層	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	2.5YR3/1暗赤灰	2.5YR4/1赤灰	ケズリ ヘラナデ		底面粗いケズリ	42
34－95	MA59 下位層	須恵器杯				緻密２㎜の砂粒若干混入	良好	7.5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	ロクロ			50

第10表　平安時代の遺構内（SK・SN・ピット）出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考	登録番号
35－98	SK156	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	ケズリ ヘラナデ		埋土一括	60
35－99	SK156	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR3/1黒褐	7.5YR3/3暗褐	ケズリ ヘラナデ		埋土一括	59
35－100	SK166	土師器杯				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/6橙	10YR8/6黄橙	ロクロ		埋土一括	57
35－101	SK159	土師器甕				緻密２㎜～３㎜の砂粒混入	良好	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	ケズリ ヘラナデ		埋土一括	56
35－102	SK175	土師器杯	13.4	5.2	5.3	緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙	黒色処理	ロクロ ミガキ		回転糸切り（右）確認面出土	17
35－103	LT68 ピット２	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR6/6橙	10YR6/3にぶい黄橙	ケズリ ナデ		小型内外共丁寧な調整	55

第11表　遺構外出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考	登録番号
39－170	LP66 Ⅲ層上面	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	10YR7/3にぶい黄褐	黒色処理	ロクロ ミガキ			99
39－171	MC74 Ⅱ層	土師器杯	(13.6)	(5.2)	5.4	緻密１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	7.5YR5/4にぶい褐	黒色処理	ロクロ→ケズリ ミガキ		口唇部付近に炭化物付着	31
39－172	LN69 Ⅱ層	土師器杯				緻密２㎜～４㎜の小石若干混入	良好	10YR8/3浅黄橙	黒色処理	ロクロ ミガキ			104
39－173	LR63 Ⅲ層上面	土師器杯				緻密５㎜の小石若干混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙	黒色処理	ロクロ ミガキ			103
39－174	LS64 Ⅲ層上面	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙	黒色奥理	ロクロ ミガキ			101
39－175	LR63 Ⅲ層上面	土師器杯				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙	黒色処理	ロクロ ミガキ			106
39－176	LO68 Ⅲ層上面	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	黒色処理	黒色処理	ロクロ→ミガキ			102
39－177	LR62 Ⅲ層上面	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	10YR7/3にぶい黄橙	黒色処理	ロクロ→ミガキ			105
39－178	LT・LS63 Ⅰ層	土師器杯	(13.6)	(5.4)	5.0	１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ		回転糸切り（右）底部付近若干ケズリ	25
39－179	LR62 Ⅰ層	土師器杯				１㎜～２㎜の砂粒少量混入	良好	5 YR7/6橙	7.5YR6/6橙	ロクロ		回転糸切り（右）	124
39－180	MT63 Ⅰ層	土師器杯				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	10YR7/6明黄褐	7.5YR6/6橙	ロクロ		回転糸切り（右）	126
39－181	LQ・LR70 Ⅰ層	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	10YR8/4浅黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ロクロ		回転糸切り（右）	125
39－182	MD72 Ⅰ層	土師器杯				緻密１㎜の砂粒若干混入	良好	2.5Y7/3浅黄	2.5Y8/3淡黄	ロクロ		回転糸切り（右）	130
39－183	LQ62 Ⅲ層上面	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒多量混入	良好	7.5YR7/6にぶい橙	10YR7/6明黄褐	横ナデ→ケズリ ヘラナデ			108
39－184	MB65 Ⅰ層	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒多量混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	ケズリ→ナデ 横ナデ		口唇部内面からの折り返し	116
39－185	Aトレンチ	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	横ナデ→ケズリ 横ナデ			111
39－186	LM68 Ⅱ層	土師器甕				緻密１㎜～３㎜の砂粒混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄褐	ロクロ→ヘラナデ ロクロ			109
39－187	LR63 Ⅰ～Ⅱ層	土師器甕				緻密１㎜～２㎜の砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙	10YR2/1黒色	ロクロ→ケズリ ロクロ		内面黒色処理の可能性有り	107
39－188	LS64 Ⅲ層上面	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒多量混入	良好	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	横ナデ→ケズリ→横ナデ 横ナデ			118
39－189	MD72 Ⅰ層	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒多量混入	良好	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロ			115

40－190	LS69 Ⅰ層	土師器甕				緻密１㎜～３㎜の 砂粒混入	良好	10YR7/2にぶい黄橙 10YR8/4浅黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ		119
40－191	LQ・LR70 Ⅰ層	土師器甕				１㎜～２㎜の砂粒 多量混入	良好	5 YR7/6橙 5 YR6/4にぶい橙	ケズリ→横ナデ 横ナデ	胎土に鉄滓混入	114
40－192	LT63 Ⅱ層	土師器甕				１㎜～３㎜の砂粒 多量混入	普通	10YR8/3浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	ケズリ ヘラナデ→横ナデ	胎土に鉄滓混入 外面口唇部直下に刻線有り	112
40－193	MC68 Ⅰ層	土師器甕	10.1～ 10.7	（6.5）	8.0～ 8.5	緻密１㎜～２㎜の 砂粒混入	良好	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR6/6橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	底面ケズリ	22
40－194	MC68 Ⅲ層	土師器甕	8.3	5.4	9.6～ 10.2	緻密１㎜～４㎜の 砂粒混入	良好	10YR4/3にぶい黄褐 10YR6/4にぶい黄橙	ケズリ→横ナデ ヘラナデ→横ナデ	RP２	23
40－195	Aトレンチ	土師器甕				緻密１㎜の砂粒 少量混入	良好	7.5YR6/4にぶい橙 5 YR6/3にぶい橙	ケズリ ヘラナデ	口唇部ケズリ 非常に堅緻	113
40－196	ME61 Ⅲ層	土師器甕				１㎜２㎜の砂粒 混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/4にぶい黄橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ		117
40－197	MB68 Ⅲ層	土師器				緻密１㎜～２㎜の 砂粒少量混入	良好	10YR6/2灰黄褐 10YR4/2灰黄褐	ケズリ ヘラナデ	底面ナデ 小型の把手付土器	129
40－198	MC66 Ⅰ層	土師器甕		6.8		緻密１㎜～２㎜の 砂粒混入	良好	5 YR2/2黒褐 2.5Y6/6橙	ケズリ ヘラナデ	底面ケズリ→ミガキ	20
40－200	LS64 Ⅲ層上面	須恵器杯				１㎜の砂粒 若干混入	良好	2.5Y8/1灰白 2.5Y7/2灰黄			121
40－201	MB69 Ⅲ層	須恵器壺				１㎜の砂粒 多量混入	普通	7.5YR6/3にぶい褐 10YR7/4にぶい黄橙		203と同一個体	110
40－202	LQ65 Ⅰ層	須恵器壺				１㎜の砂粒 若干混入	良好	2.5Y6/1黄灰 2.5Y6/1黄灰			120
40－203	MD69 Ⅰ層	須恵器壺				１㎜の砂粒 多量混入	普通	7.5YR5/2褐灰 10YR8/4浅黄橙		201と同一個体	122
40－204	LS74 Ⅲ層	須恵器甕				１㎜の砂粒 若干混入	良好	10YR4/1褐灰 10YR5/2灰黄褐			67
40－205	LT66 Ⅲ層	須恵器甕				１㎜の砂粒 少量混入	良好	10YR6/4にぶい黄橙 10YR6/2灰黄褐			85
40－206	MD65 Ⅰ層	須恵器甕				１㎜の砂粒 若干混入	良好	10YR6/1褐灰 10YR6/1褐灰			75
40－207	LL69 Ⅰ層	須恵器甕				緻密	良好	10YR8/4浅黄橙 10YR4/1褐灰			73
40－208	LT68 Ⅰ層	須恵器甕				１㎜の砂粒 若干混入	良好	10YR5/1褐灰 10YR5/2灰黄褐			80
40－209	MC62・63 ME64	須恵器甕				１㎜の砂粒 若干混入	良好	10YR5/1褐灰 10YR6/1褐灰		MC－２層 ME－３層	90

第12表　土師器把手付土器観察表

挿図番号	出土地点	部位	口径㎝	底径㎝	器高㎝	胎土	焼成	色調 外/内	調整 外/内	備考	登録番号
41－210	MB69 Ⅲ層	把手部				１㎜～２㎜の砂粒 混入	良好	7.5YR4/2褐灰 10YR6/4にがい黄橙	ケズリ ナデ	RP５ 212と同一個体	43
41－211	LR61 Ⅲ層上	体部～ 底部		5.1		１㎜～３㎜の砂粒 混入	良好	5 YR6/6橙 10YR7/6明黄褐	ケズリ ヘラナデ→棒ナデ→オサエ	粗い成形・調整 底面凹状を呈する	28
41－212	MB69 Ⅲ層	体部～ 底部		5.9		１㎜～２㎜の砂粒 混入	良好	7.5YR4/2褐灰 10YR6/4にぶい黄褐	ケズリ ナデ	RP５内面、底面に炭化物付着 213と同様の器形を呈する	26
41－213	MC69 Ⅲ層	口縁～ 底部	7.6	5.4	6.9～ 7.4	１㎜～２㎜の砂粒 混入	良好	10YR4/1褐灰 10YR6/4にがい黄橙	ケズリ→ナデ ヘラナデ→横ナデ	RP１ 底面ケズリ	24
41－214	MB69 ピット３	口縁～ 底部	5.2	3.3	5.5～ 6.5	１㎜～２㎜の砂粒 混入	良好	10YR7/4にぶい黄橙 7.5YR7/4にぶい橙	横ナデ→ケズリ ヘラナデ→横ナデ	底面ケズリ 215と同様の器形を呈する	32
41－215	LS68 ピット５	口縁～ 底部	10.0	6.8	12.3	１㎜～３㎜の砂粒 多量混入	良好	7.5YR5/4にぶい褐 7.5YR5/6明褐	ケズリ ヘラナデ	内面炭化物付着	16

第５章　自然科学的分析

第１節　火山灰分析

太田谷地館跡出土火山灰の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学教授　三　辻　利　一

１)はじめに

東北地方北部の平安時代後期の遺跡からは２種類の火山灰が出土する。これらの火山灰は蛍光Ｘ線分析法では容易に相互識別されるが、風化のため、色調は異なっており、外見上の識別はかなり難しいものと思われる。

蛍光Ｘ線分析(第46図)によると、一方の火山灰にはＫ、Ｒｂ量が多く、Ｃａ、Ｓｒ量がより少ない。他方は逆にＫ、Ｒｂ量が少なく、Ｃａ、Ｓｒ量が多い火山灰である。そして、両方の火山灰が同一遺跡から出土する場合には、必ず前者は上位にあり、後者は下位にあることが確認されている。

最近、北朝鮮と中国の国境にある白頭山山頂のパミスと溶結凝灰岩のＸ線分析のデータが出されたが、その化学特性は前者の火山灰の化学特性と一致した。すなわち、前者は白頭山火山灰と考えられる。一方、後者は十和田湖を中心とした東北地方北部地域に堆積する十和田系火山灰に対応する化学特性をもつことが明らかになった。すなわち、後者は十和田a火山灰である。

既に、筆者の手元には青森県、秋田県北部、岩手県北部の平安時代後期の遺跡から出土した300点ほどの火山灰の分析データが集積されているが、この結果を活用すれば、これらの地域から出土する須恵器の編年の研究に役立つものと考えられる。このような視点から、太田谷地館跡から出土した火山灰を分析した結果について報告する。

２)分析結果

第43図には太田谷地館跡出土火山灰のＲｂ－Ｓｒ分布図を示す。この分布図で白頭山火山灰と十和田系火山灰の特性を明確に識別することができる。これまでに得られた分析データに基づいて白頭山領域と十和田系火山灰領域を示してある。火山灰自身のもつ不均一性のためか、あるいは、長年にわたって遺跡に埋没中におこる風化や周辺の土壌による汚染のせいで分析値は

かなりばらつく。このように広い分布領域をとらなければならないのもこのためである。第43図より、Ｎｏ１、２の火山灰は両方とも白頭山領域に分布し、白頭山火山灰である可能性を示す。

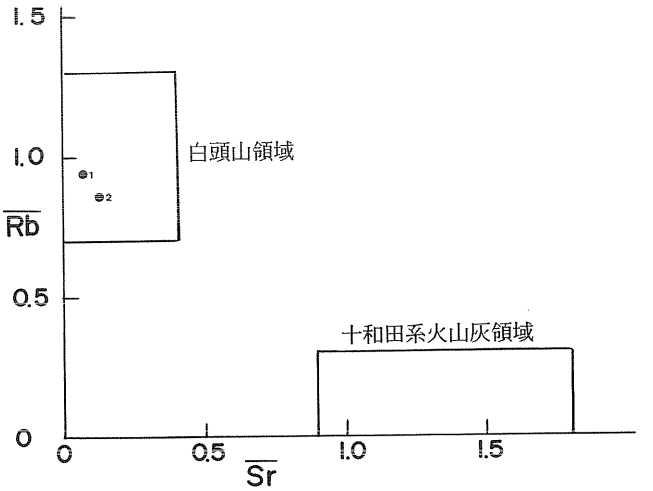
第44図にはＫ－Ｃａ分布図を示す。この分布図でも白頭山火山灰と十和田系火山灰とは明確に識別される。この分布図でも、Ｎｏ１、２の火山灰は白頭山領域に分布することがわかる。この分布図でもＮｏ１、２は白頭山火山灰である可能性を示した。

第45図にはＦｅ因子を対比してある。この分布図でも、Ｎｏ１、２は白頭山領域によく対応することがわかった。

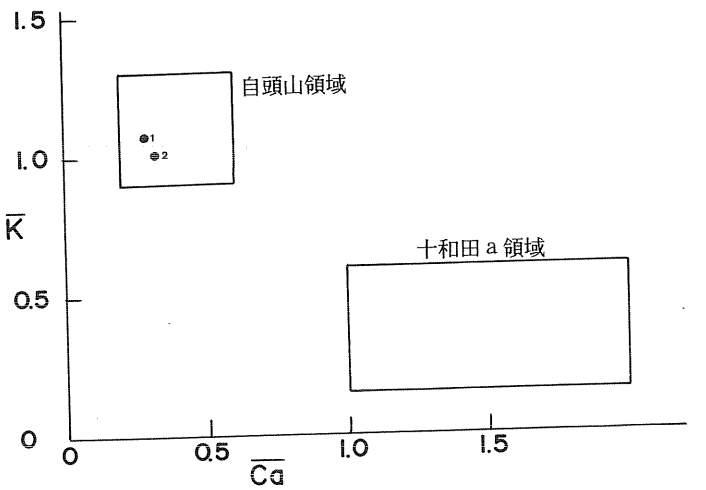
以上の結果、Ｎｏ１、２は全因子で白頭山火山灰によく対応することが明らかになった。

十和田系火山灰と比較して、白頭山火山灰がもつもう一つの特異的な特徴はＺｒ（ジルコニウム）の含有量が多いということである。第46図にはＮｏ１の火山灰と十和田系火山灰の蛍光Ｘ線スペクトルを比較してある。Ｎｏ１には明らかにＺｒ量が著しく多いことが分かる。Ｎｏ２もＮｏ１と類似した蛍光Ｘ線スペクトルを与えた。こうして、Ｚｒ因子からでもＮｏ１、２は十和田系火山灰ではなく、白頭山火山灰であることが確認された。

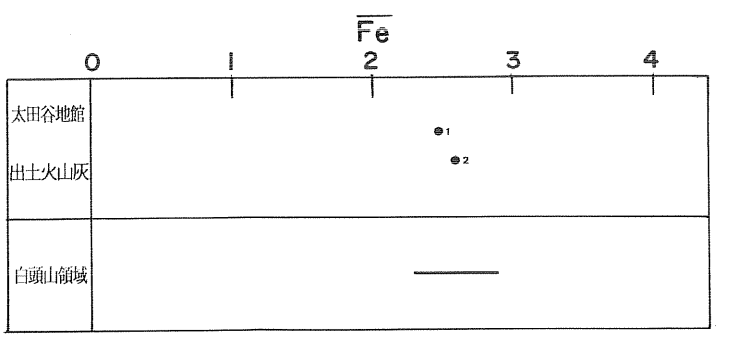
Ｎｏ１、２の分析結果を表13にまとめておく。分析値は岩石標準試料ＪＧ－１による標準化値で表示してある。



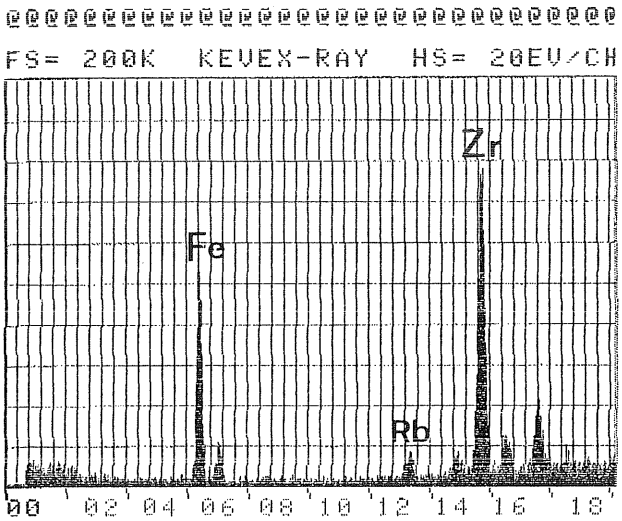
第43図　太田谷地館跡出土火山灰のRb—Sr分布図



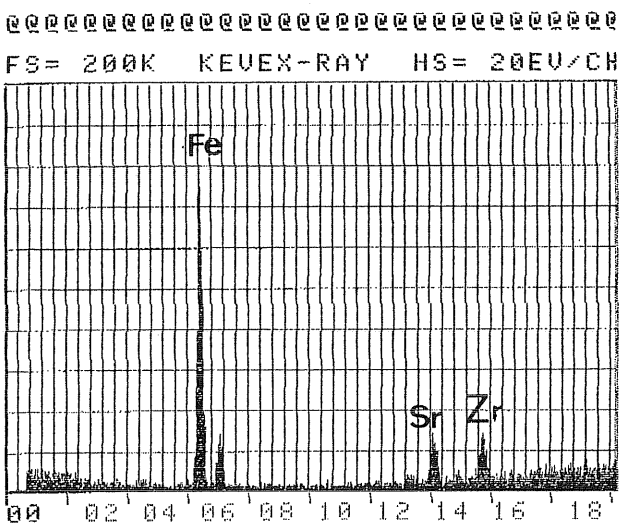
第44図　太田谷地館出土火山灰のK—Ca分布図



第45図　太田谷地館跡出土火山灰のFe量



a)　No 1の蛍光X線スペクトル



b)　十和田系火山灰の蛍光X線スペクトル

第46図　火山灰の蛍光X線スペクトル

試料番号	備　　考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	判　定
1	1OTYT SI157 竪穴住居跡の埋土	1.07	0.294	2.47	0.940	0.069	白頭山 火山灰
2	1OTYT SI158 竪穴住居跡の埋土	1.01	0.324	2.60	0.862	0.128	白頭山 火山灰

（分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値）

第13表　火山灰の分析結果

第6章　ま　と　め

今回の第2次発掘調査の結果、縄文時代の土坑6基、弥生時代の土坑2基、焼土遺構1基、柱穴様ピット1、平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑8基、焼土遺構1基、空堀跡1条、柱穴様ピット5、その他の遺構1基の他、時代不明の遺構として、土坑2基、焼土遺構2基、柱穴様ピットを検出し、柱穴様ピットを除いた遺構数は計29である。出土遺物は縄文時代、弥生時代の土器、平安時代の土師器、須恵器や鉄製品、土製品などが出土したが、平安時代の土器が主体を占める。以下、検出した遺構と出土した遺物について、若干の整理と問題点の指摘をしてまとめにかえたい。

1．縄文時代の土坑について(第47図)

検出した土坑6基は調査区内に点在しており、このうち、ＳＫ164・168・169の3基は底面中央にピットが1箇所あり、平面形は円形で、断面形は円筒形に近いがやや上に開くという同じ形態を示し、ＳＫ177は底面にピットはないものの形態は似る。規模は坑口部径は1.27～１.62ｍ、深さが1.30～2.18ｍで径はやや近い数値だが深さにばらつきがある。これは検出面の違いと思われ、例えばＳＫ164のように基本層位の第Ⅳ層上面から検出した場合と、ＳＫ169のように第5層で検出した場合は、当然深さが違ってくるので、それを差し引いて考えれば規模・形態ともほぼ似た数値を示すといえる。ＳＫ164の土層断面観察によれば、底面のピットは上端が24cmで中央に幅12cmの棒状の痕跡が認められるが、これは底面に穴を掘り、杭を立て、それを埋めて固定したと考えられる。これらは狩猟に使われた陥し穴と考えられており(註1)、最近、県内でも調査事例が増えている。この縄文時代の6基の土坑はいずれも出土遺物がなく、時期を決定できないが、遺構外から出土している縄文土器が前期・後期のものであることから、いずれかの時期に属する可能性が高いと考えられる。

2．平安時代の土器について(第48図)

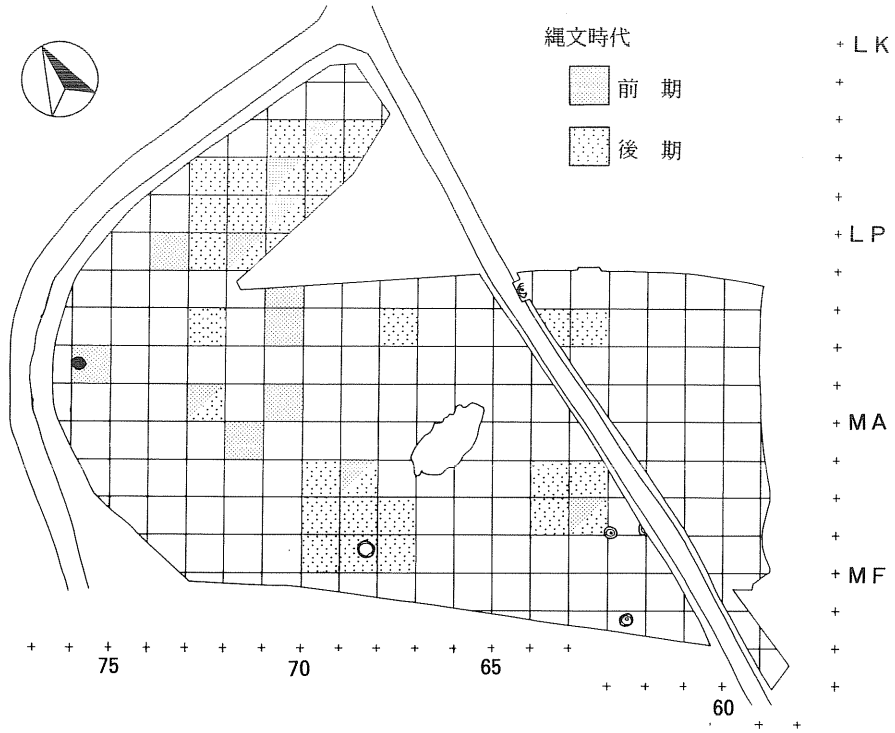
今回出土した土器は、土師器、須恵器、土師器把手付土器である。このうち土師器が主体を占め、器種には椀・杯・甕・壺がある。壺はロクロ成形で、杯・椀・甕はロクロ成形と非ロクロ成形とがある。杯はロクロ成形のものは全て底部の切り離しが回転糸切りで、これには二次調整のないものと、二次調整を施すものがある。二次調整を施すものには①内面が黒色処理で外面ケズリのもの、②内外面とも黒色処理を施すものがある。二次調整のないものには、ＳＩ150で出土している厚手の土器とＳＩ157・158で出土している薄手で洗練された感じの土器がある。次に非ロクロ成形のものは①外面にナデ・ケズリ・ミガキ・内面ミガキのものがあり、

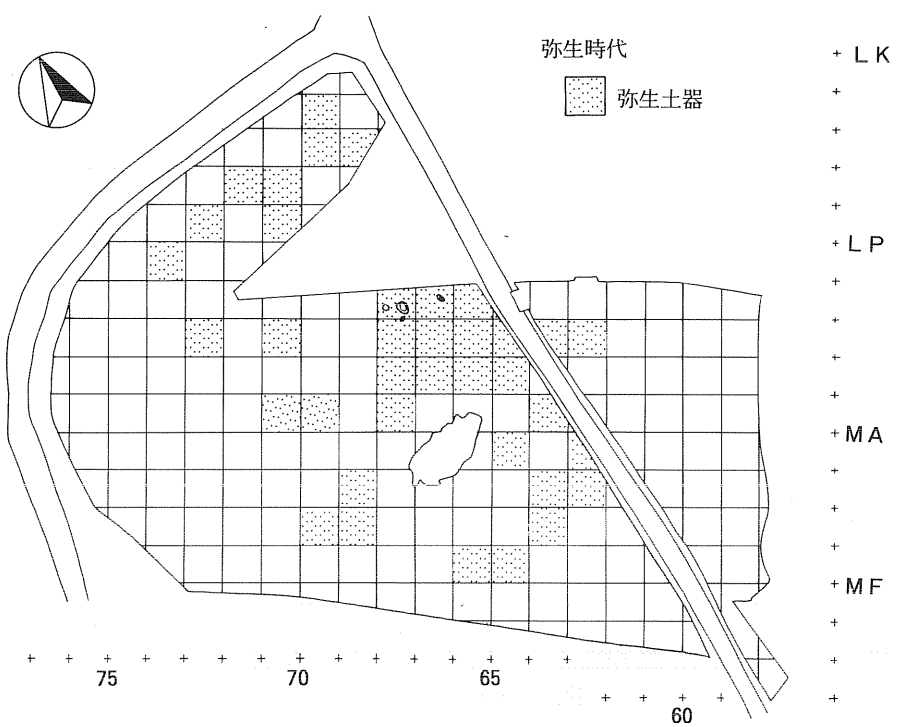
粘土紐の輪積痕を残すものもある。椀は①ロクロ成形で二次調整のないもの②非ロクロで杯の非ロクロ成形の①と同技法のものに分かれる。土師器甕はロクロと非ロクロ成形がある。非ロクロのものはいずれも外面に横ナデといわゆる「ナタケズリ」と呼ばれる粗いケズリを施すもので、内面はナデを施す。この土器の底部には砂粒が付着している、いわゆる砂底も数少ないながらもあり、中にはごくまれながら鉄滓と思われる粒子を胎土に含ませるものもある。ロクロ成形のものでも外面にはヘラケズリを施す。いずれの土器も口縁部が波打っており、その形態は一様ではないが、ＳＩ150出土土器の口縁部の器形は非ロクロ成形の場合、大別すると①内傾しながら直線的に立ち上がり、口頸部で「く」字状に外反するもの②直線的に立ち上がり口頸部が①よりもゆるく「く」の字状に外反するもの、③外傾して直線的にそのまま立ち上がり、口縁部で肥厚するもの、④外傾しながら立ち上がり、口頸部が緩く「く」の字状に外反するものなどがある。これらの中に大小の土器があるが、成形・調整技法は同じである。土師器壺は数が大変少ないが、ロクロ成形によるものである。

土師器把手付土器は６点(第４1図)出土した。小型と中型のものがあり、211～214は小型である。その中で211・214は底部下端から胴部下半にかけて内弯しながら立ち上がるもので、214は口縁部が内傾する。212・213は底部下端から胴部下半にかけて直線的でそのまま口縁部までまっすぐ立ち上がり、213は口唇部が薄くなる。215は中型のもので、器形は211・214と似る。これらの土器は外面にヘラケズリやナデ、内面にナデや指オサエを施すもので、内外面の調整は甕と同じといえる。210は把手で212と同一個体である。210はその形状から本体への装着状況がよくわかるもので、それによれば、最初土器本体に穴をあけてそこに把手を差し込み、内外から粘土で補強したものである。把手に中空のものはない。

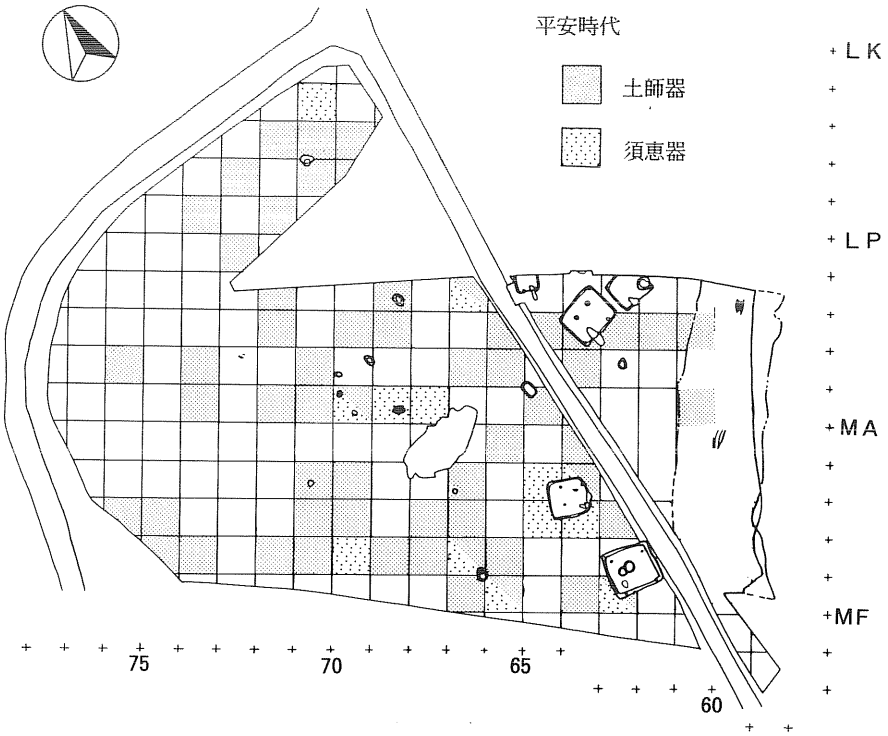
竪穴住居跡からは遺跡全体の総量からすれば比較的多くの遺物が出土したといえる。ＳＩ151・152・158は遺物が少なく、その出土状況から流入したものと考えられるため、それ以外の竪穴住居跡から出土した土器について、大まかに器種構成とその比率を述べてみたい。

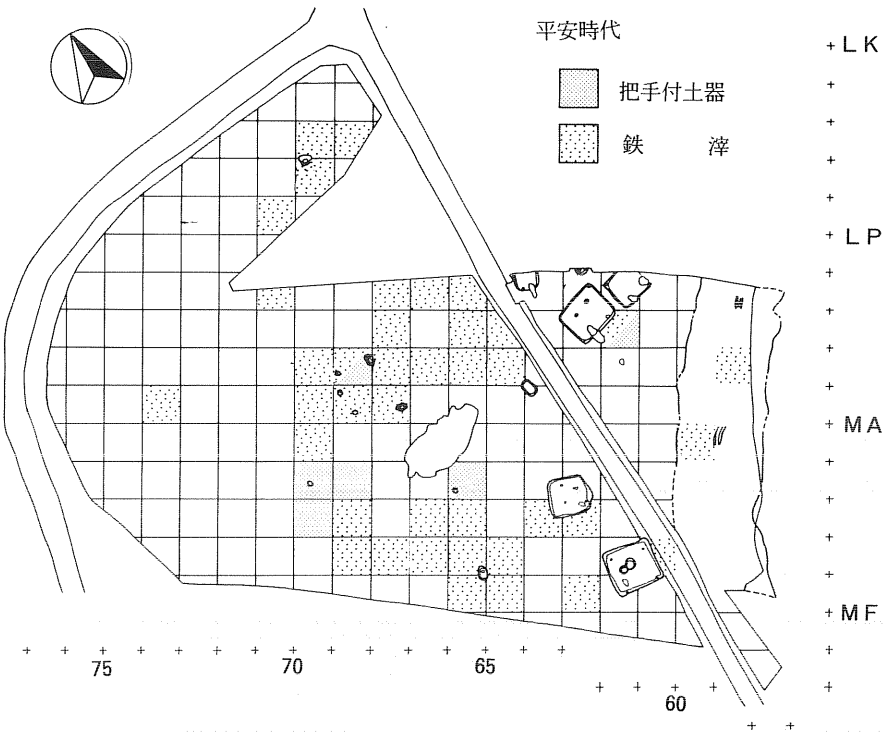
ＳＩ150竪穴住居跡から出土した遺物はカマドとそれに隣接する北東部分から集中して出土し、土器破片の総点数は100点を超える。そのうち図示できた土器は35点で、器種は土師器杯・椀・甕と須恵器壺である。その比率は土師器の杯７(20%)、椀３(８%)で計10(28%)、甕25(71%)、須恵器壺(ロクロ成形)１(１%)である。このうちロクロ成形は９(26%)で、その内訳は杯４(44%)、椀１(12%)、甕４(44%)で、非ロクロ26(74%)である。こうしてみると、土師器の杯・椀が全体の約1/3で、甕が約2/3を占め、そのうちロクロ成形が約1/4である。さらに、ＳＩ150の遺構説明で想定した転用・遺棄・流入・廃棄のうち、住居跡構築時と同じか廃絶されるまで使っていたと考えられる転用・遺棄に該当する土器は16点で、内訳はロクロ使用土器４点(25%)、非ロクロ12点(75%)である。





第47図　時代別遺構・遺物分布図(1)





第48図　時代別遺構・遺物分布図(2)

ＳＩ157の場合は５層(白頭山火山灰)下から全部で35点出土した。内訳は土師器32点(91%)、須恵器３点(9%)で、土師器は、杯・壺９点(28%)、甕23(72%)である。このうち土師器はロクロ使用土器11点(34%)、非ロクロ21点(66%)である。こうしてみると、杯・壺が全体の約13、甕が約2/3を占め、そのうち、ロクロ成形が約1/3、非ロクロが2/3である。転用・遺棄としたものは７点でロクロ使用土器は３点(43%)、非ロクロ４点(57%)である。

以上の両者の数値を比較してみると、土師器の器種毎の比率は、甕が約2/3を占める点では同じであるが、ロクロ使用土器の比率ではＳＩ157が高い。また、転用・遺棄と想定した場合のロクロ使用土器の比率はＳＩ150が1/4で、ＳＩ157が1/3を占め、ＳＩ157の比率がこれでも高いことがわかる。非ロクロとロクロ使用の場合、技法的には非ロクロの方が一般的に古いとされている。したがってＳＩ157はＳＩ150よりも新しい土器の傾向を示しているといえる。また、ロクロ使用の土師器杯をみた場合、ＳＩ150の第27図19は器肉が厚く底部下端から緩やかに丸味をもって立ち上がり、非ロクロ成形と似ているのに対して、ＳＩ157の第32図71は器肉が薄く、底部下端から緩く立上がり、体部上半では直線的に口縁部にいたるもので、洗練された感じのする土器である。これはＳＩ158の第33図81の土器についてもいえる。このことは上記の傾向を傍証する１つの証左となりうるかもしれない。

3　平安時代の遺構について（第48図）

(1)　竪穴住居跡

検出された５軒の竪穴住居跡の規模をみると大きく２つに分けることができる。①一辺が3.95～4.95mで、床面積が14～20㎡－ＳＩ150・151・152－②一辺が1.36～3.70m(推定値を含む)で床面積４～12㎡（推定値を含む)－ＳＩ157・158となる。

カマドの位置は、ＳＩ150・151・157は南壁南西隅にあり、158は南壁北東隅に、ＳＩ152は東壁北東隅に付設されている。つまり、①の中ではＳＩ150・151が同じ場所にあり、②ではいずれも同じ壁側にあるという点で共通する。

次に柱穴配置をみてみると、①の中では、ＳＩ151・152は基本的に４本の柱穴配置であるこがうかがえる。ＳＩ150は８本検出し、３コーナーにはあるが北壁北西隅に柱穴がなく、中央部北壁寄りに２本、南壁に取り付く３本があり、Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８の４本が主柱穴と思われる。②はいずれも一部が調査区外で正確を期しがたいが、検出した柱穴位置から推定すると、ＳＩ157は壁の各コーナーに４本あり、さらに西壁の中央部寄りに２本あることから東壁中央部寄りに相対する２本が配置されていたものと考えられ、計８本と推定される。ＳＩ158は南壁のコーナーかコーナー寄りに２本あり、４本の柱穴配置と考えられる。以上のことから、ＳＩ150はＳＩ157と同じで、ＳＩ151・ＳＩ152・ＳＩ158は同じ柱穴配置と思われ、①と②のそれぞれの中で配置が異なる。つまり、規模の大小は柱穴配置と相関関係にないことがわかる。

次にそれぞれの新旧関係について考えてみる。ＳＩ150・ＳＩ151・ＳＩ158は平面プランや土層断面から第Ⅱ層大湯浮石(十和田a火山灰)が降下した後に構築されている。ＳＩ157・ＳＩ158は焼失家屋で、焼失後ほどなく、白頭山・苫小牧火山灰が降下堆積しており、両住居跡とも主軸方向がほぼ一致しているので同時存在としてよいものである。したがって両住居跡とも大湯浮石の降下後に構築され、白頭山・苫小牧火山灰が降下する以前に焼失したものとすることができる。ところで、ＳＩ150・ＳＩ151の廃絶時期については、白頭山・苫小牧火山灰の降下前後のどちらかに想定できるが、ＳＩ150とＳＩ157の埋土及び出土土器を比較した場合、前述のようにＳＩ150のほうが古い様相を呈すると考えられる。したがってＳＩ150・ＳＩ151(古)→ＳＩ157・ＳＩ158(新)というようになる。ＳＩ152については、ＳＩ151と比較した場合柱穴配置は同じで、カマドの検出・土器の出土状況などが似ていることを勘案すれば、ＳＩ150・ＳＩ151と同じ時期に構築されたと考えてよいのかも知れない。

以上のことをまとめると、5軒の住居跡とも大湯浮石降下後に構築されているが、ＳＩ150・ＳＩ151・ＳＩ152が最初に作られ廃絶した後、ＳＩ157・ＳＩ158が構築され、廃絶後にほどなく白頭山・苫小牧火山灰が降下した、というふうに考えられる。

(2) 土坑、その他の遺構

鉄滓と土師器把手付土器の出土分布を見てみると(第48図)、調査区の中央部、北東部、南西部、つまり62～71グリッドラインの間に集中する傾向にある。この区域内には、前記の遺物の他に鉄製品を出土した遺構が分布している。中央部に位置するＳＫ174は不整楕円形を呈するもので、中から鉄製の釘・鋏や少量ながら鉄滓が出土している。ＳＫ174が位置するＬＳ68グリッドからも鋏かと思われる鉄製品が1点出土している。隣接する楕円形を呈するＳＸ176からも小さな鉄滓が出土しており、いずれにも埋土に炭化物や小礫が混入している。また、遺構外のＬＴ68グリッドからは椀形滓が2点出土し、ＳＫ174と同じグリッドのピット5からは把手付土器第41図の215が出土している。把手部の反対側は口縁部が故意に欠かれ、二次焼成痕、が残り内部に煤状炭化物が付着する。

把手付土器は秋田県内では下沢田遺跡など(註2)、今のところ鹿角地方に出土が限られている。また青森県の古館遺跡などでもその出土例が知られており(註3)、これらの土器は「火を使う仕事に使われた道具(註4)」と推定されている。ＳＫ174・ＳＸ176やその周辺では、前述のように鉄滓や把手付土器などが出土しており、鉄釘や鋏などの出土とあわせて考えると、鍛冶作業を行っていた可能性があり、把手付土器はその作業に使われたと推定できる。さらにその作業を行う場合は屋外とは考え難いので、中央部周辺に群在する柱穴様ピットは、作業小屋(工房跡)の痕跡としてとらえることができそうである。なお、ＳＫ175は埋土に炭化物を含み、埋土の状況からＳＸ176と類似した遺構と思われる。他に、遺物では鉄滓粒と思われるものを土師器甕の

胎土に混入させているものが2点(第40図191・192)出土している。(注5)

4．火山灰について

今回の調査では、ＳＩ157竪穴住居跡・ＳＩ158竪穴住居跡内から降下火山灰が検出された。三辻利一氏の分析により、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と中国の国境にある白頭山を噴出源とする白頭山・苫小牧火山灰であることが判明した。本火山灰は、秋田県内では能代市上ノ山Ⅱ遺跡(註6)を南限とし、八森町土井遺跡(註7)でも検出されている。鹿角地方には、十和田火山を噴出源とする大湯浮石（十和田a火山灰）が分布しており、その年代は10世紀前半頃と推定されつつある。今回検出された白頭山・苫小牧火山灰は、竪穴住居跡5軒のうち、ＳＩ157竪穴住居跡・ＳＩ158竪穴住居跡の焼失後に、降下・堆積したことが明らかになった。

5　おわりに

米代川左岸の鳥越段丘上に位置する太田谷地館跡は、昭和62年の第1次で舌状台地部が調査され、平安時代の竪穴住居跡51棟、土坑73基、空堀3条など多数の遺構が検出され、遺物は土師器甕・把手付土器・小型手捏ね土器・須恵器・鞴羽口・鉄製品などが出土した由縁の全く伝わらない「集落保塞的」(註8)館で、その年代は、土師器・須恵器には杯が存在せず、須恵器が平安時代末葉の様相を呈し、中世陶器が出土しないことなどから平安時代末葉とされた。

今回の調査では竪穴住居跡から出土した土器の器種構成やその比率からすれば、土師器杯が供伴し、土師器椀・壺を含めると1/3を占める。さらに、非ロクロ成形の土器は2/3〜3/4と高い比率を示す。このことは、今回出土の土器は第1次調査よりも相対的に古い土器の様相を呈しているといえる。

さらに、今回の調査は台地付け根部の北西側を調査し、遺構は平安時代を主体として検出された。調査区中央部で、把手付土器・鉄製品・鉄滓を出土した遺構は、自然科学的分析をもって結論されるべきことではあるが、製鉄に関する工房跡の可能性がある。第1次調査では、竪穴住居跡から鍛冶炉が検出され、把手付土器、鉄滓、鞴羽口、鉄製品が遺構内から出土している。当遺跡の第1次調査報告書中の指摘のように「製鉄品の生産・修理を行い得る設備・技術をもっていた」(註9)工人集団が存在していた、いう事が今回の調査でもうかがわれ、これらのことを、鹿角市堪忍沢遺跡の10世紀中葉〜末葉とされる製鉄炉13基(註10)の存在と考えあわせてみることは鉄の生産・供給・消費を探るうえで大変興味深いことである。

竪穴住居跡5軒はいずれも大湯浮石(十和田a火山灰)降下後に構築され、2軒には白頭山火・苫小牧山灰が堆積していたことは前述したとおりである。このことは火山灰を鍵層として遺構・遺物の年代を推定できるということであり、鹿角地方のみならず、全県的にも歴史を研究する上で貴重な資料である。

註１　瀬川司男　「陥し穴状遺構について」『紀要』Ⅰ　(財)岩手県埋蔵文化財センター　1981（昭和56年）

今村啓彌　「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2　生業　雄山閣　1983（昭和54年）

田村荘一　「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』Ⅰ　(財)岩手県埋蔵文化振興事業団埋蔵文化財センター　1987（昭和62年）

註２　下沢田遺跡発掘調査報告書中では把手付土器について「鍛冶施設及びその作業に使用される道具」と考えられている。青森県では古館遺跡・砂沢平遺跡・蓮田大館遺跡他などから出土している。

秋田県鹿角市教育委員会　『花輪館跡試掘調査報告書・下沢田遺跡発掘調査報告書』　鹿角市文化財調査資料27　1984（昭和59年）

秋田県鹿角市教育委員会　『高市向館跡発掘調査報告書』　鹿角市文化財調査報告書22　1982（昭和57年）

秋田県教育委員会　「妻の神Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』　秋田県文化財調査報告書第107集　1984（昭和59年）

秋田県教育委員会　「はりま館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』　秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）

註３　青森県教育委員会　『碇ケ関古館遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第54集　1979（昭和54年）

青森県教育委員会　『砂沢平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第53集　1979（昭和54年）

櫻井清彦・菊地徹夫　『蓮田大館遺跡』　早稲田大学文学部考古学研究報告　1987（昭和62年）

註４　青森県教育委員会　『碇ケ関古館遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第54集　1979（昭和54年）

註５　数は少ないが、第１次調査でも土師器甕の胎土中に鉄滓と思われる粒を混入させている例があり、「もしこれが鉄滓であるとすれば、土器作りする場に鉄滓があり、その細かい破片を意識的に土器胎土に混入させたと考えることができ、このことは鉄を扱う人々が土器作りをもしたことの傍証になるかもしれない」としている。

秋田県教育委員会　『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－太田谷地館跡－』　秋田県文化財調査報告書第172集　1988（昭和63年）

註６　秋田県教育委員会　『此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第114集　1984（昭和59年）

秋田県教育委員会　『上の山Ⅱ遺跡第２次発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第137集　1986（昭和61年）

註７　秋田県教育委員会　『土井遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第111集　1984（昭和59年）

註８　註５に同じ

註９　註５に同じ

上記の報文によれば「ＳＩ11竪穴住居跡の遺構Ａ・Ｂ・Ｃ」を鍛冶遺構としている。

註10　秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ｉ－堪忍沢遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第152集　1987（昭和62年）

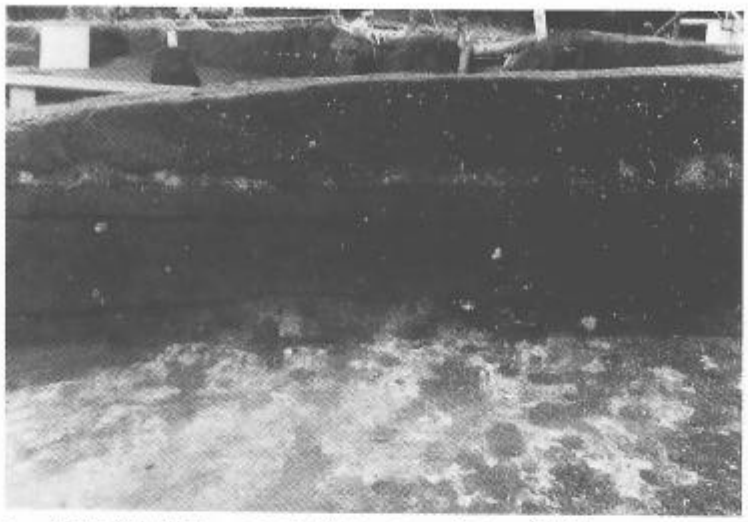
太田谷地館跡航空写真　（北▷）

1988年12月撮影

図版2

1．調査前 （北東▷）

2．調査後 （南西▷）

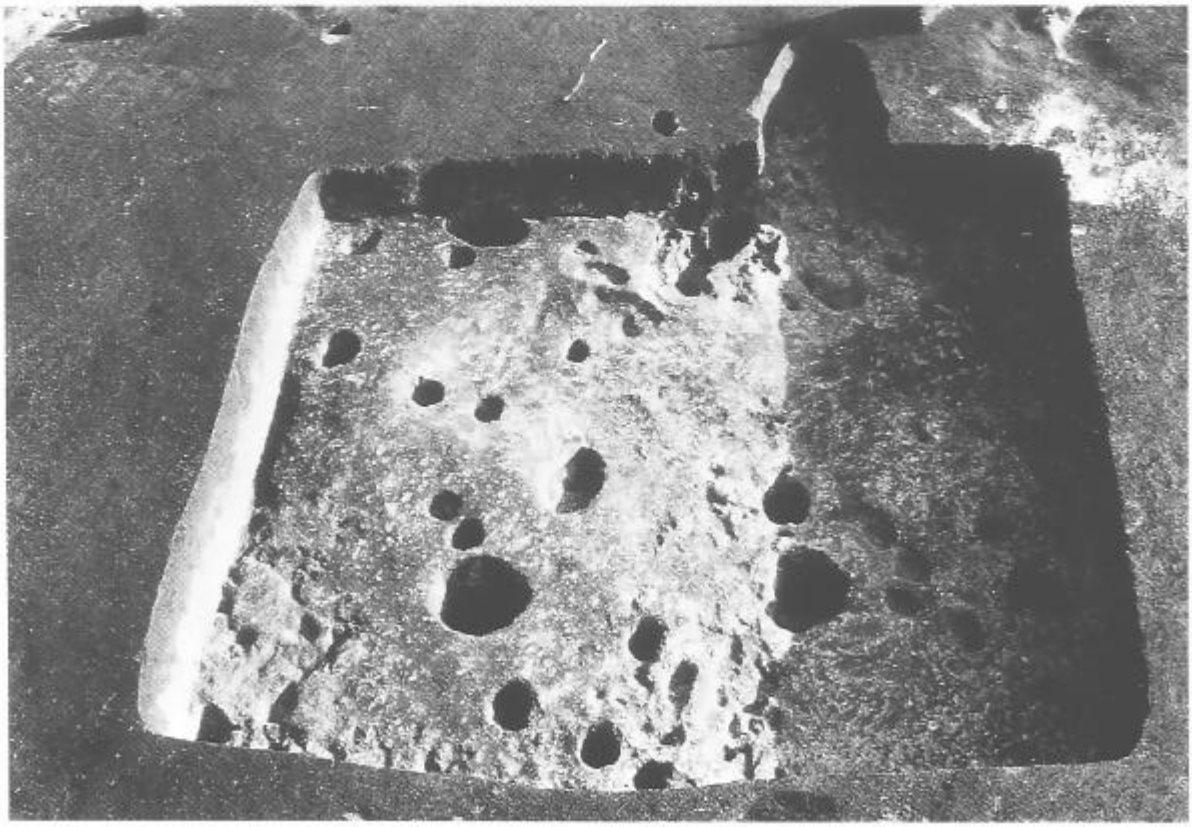


1．遺跡基本層位　MD61グリッド　東壁　（北▷）

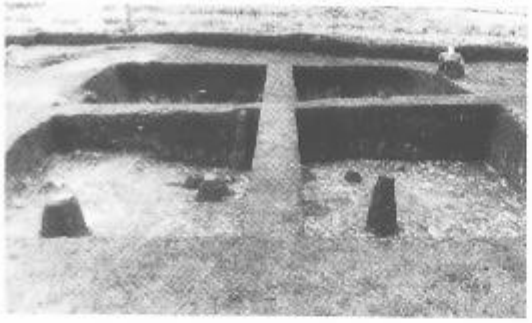
2．遺跡基本層位　MD71グリッド　東壁　（北西▷）

3．北東部大湯浮石（第Ⅱ層）検出状況　（西▷）

1．SI151　竪穴住居跡　検出状況　（北東▷）

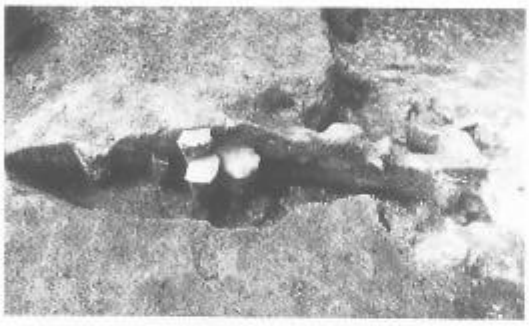


2．SI151　竪穴住居跡　完掘後　（北西▷）



1．竪穴住居跡土層断面ーC～Dー　(北東▷)

2．カマド検出状況　(北西▷)



3．カマド土層断面ーC～Dー　(北東▷)

4．カマド遺物出土状況　(北西▷)

5．カマド土層断面ーC～Dー　(北東▷)

6．カマド完掘後　(北西▷)

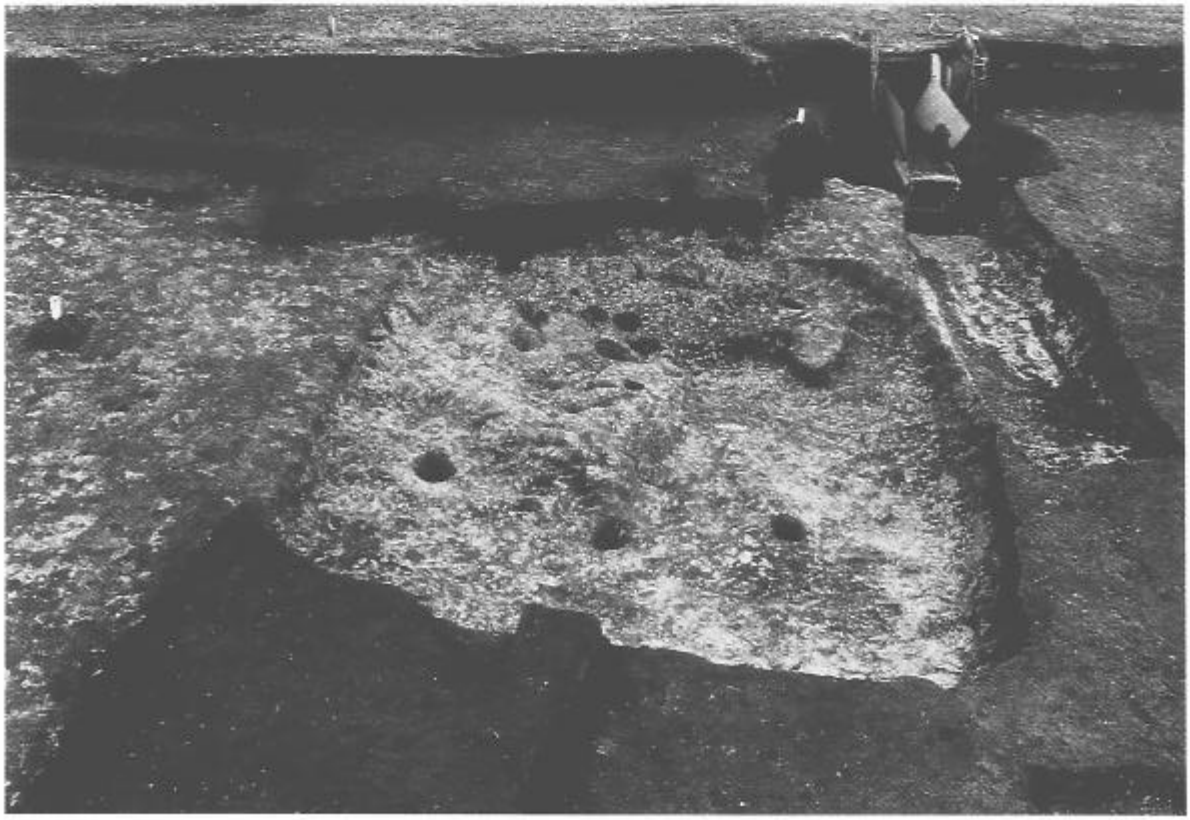
7．カマド土層断面ーC～Dー　(南西▷)

8．カマド内土製支脚出土状況　(北東▷)

SI150竪穴住居跡カマド検出および遺物出土状況など

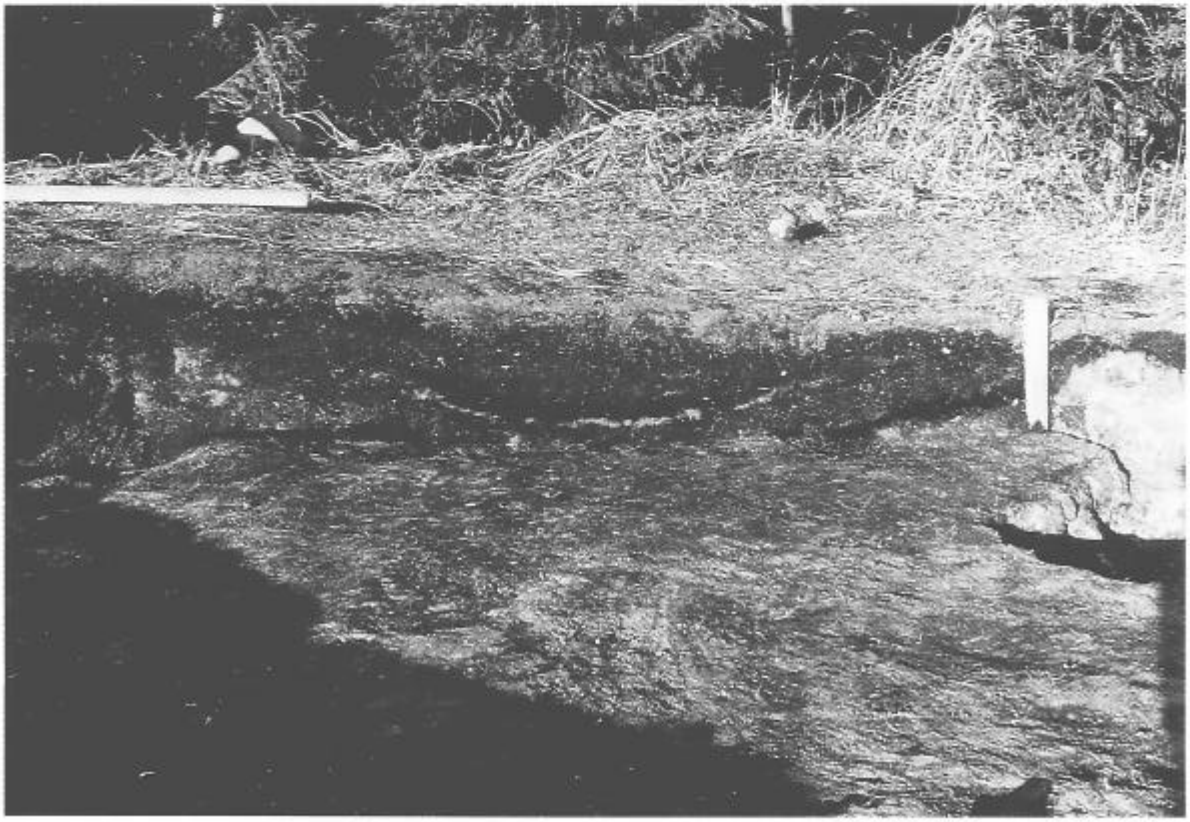
図版6

1．SI151　竪穴住居跡　完掘後　（西▷）

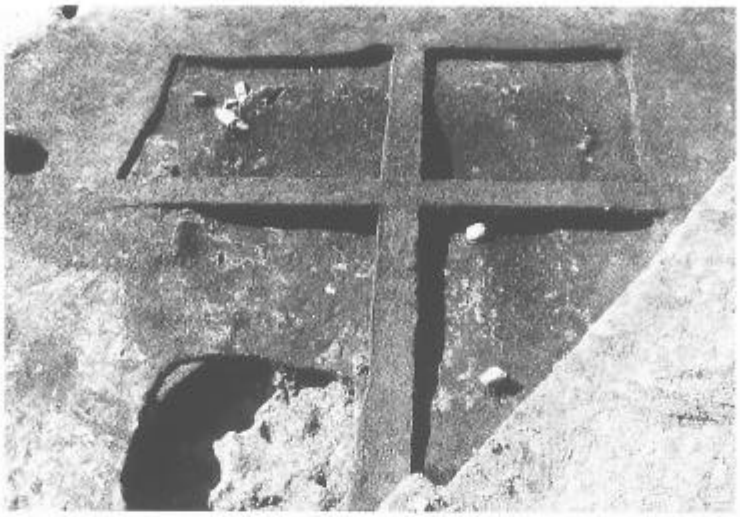


2．SI152　竪穴住居跡　完掘後　（北西▷）

1．SI157　竪穴住居跡　完掘後　（東▷）



2．SI157　竪穴住居跡　土層断面　（南西▷）



1．SI157　竪穴住居跡　火山灰検出状況　（東▷）

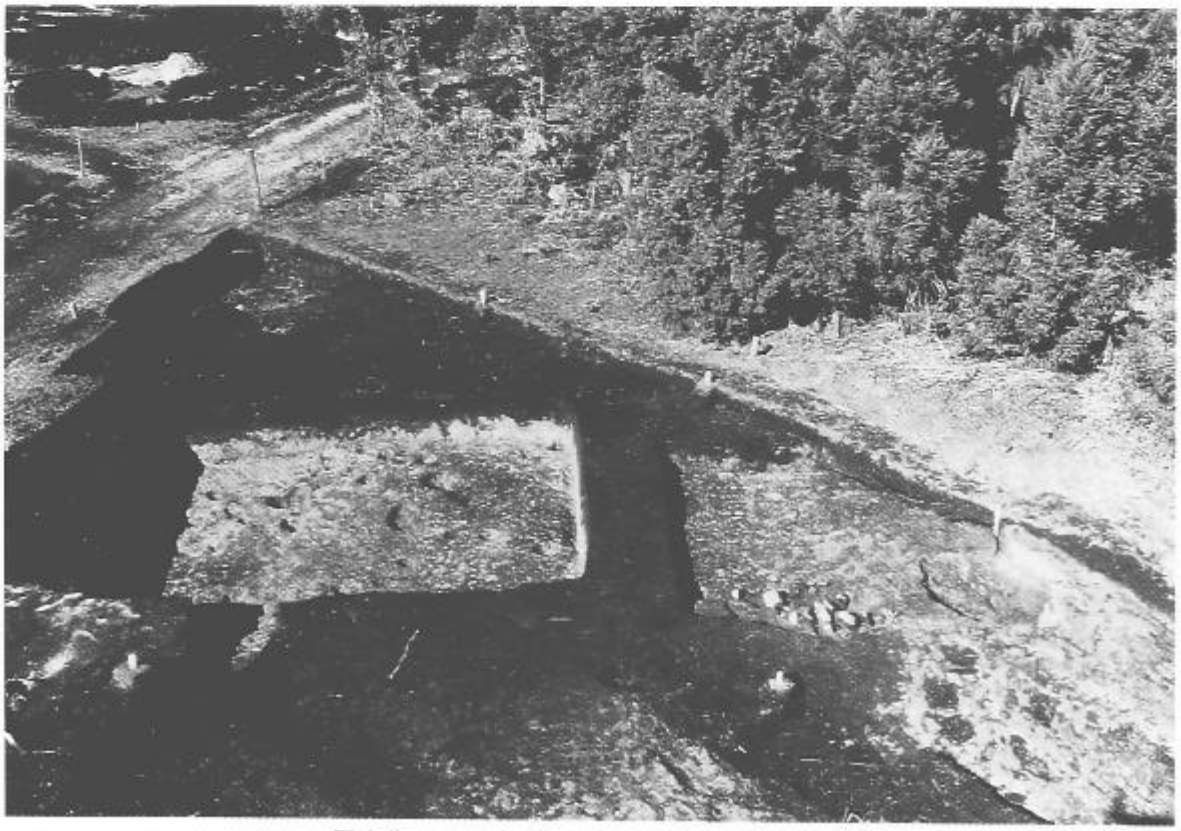
2．SI157　竪穴住居跡　火山灰検出状況　（東▷）

3．SI157　竪穴住居跡　炭化材出土状況　（東▷）

1．SI158　竪穴住居跡　遺物出土状況　（南東▷）

2．SI158　竪穴住居跡　火山灰検出状況　（南西▷）

1．SI158　竪穴住居跡　土層断面―A～B―（南西▷）



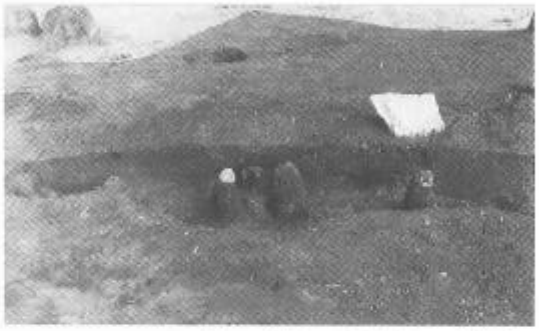
2．SI150・SI157・SI158　竪穴住居跡　完掘後（南▷）

1．SK174　土坑　検出状況　（北西▷）

2．SK174　土坑　精査状況　（南西▷）

3．SK174　土坑　土層断面　（北東▷）

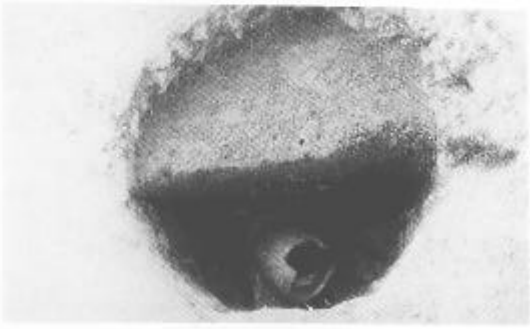
4．SX176　その他の遺構　検出状況　（北東▷）



5．SX176　その他の遺構　土層断面　（南▷）

6．SX176　その他の遺構　遺物出土状況　（南▷）

7．柱穴様ピット5　土層断面　（北東▷）



8．柱穴様ピット5　把手付土器出土状況　（北東▷）

1．SD102　空堀跡　LRライン土層断面―C～D―（北東▷）

2．SD102　空堀跡　MAライン完掘後（南東▷）

3．SD102　空堀跡　調査後（南西▷）

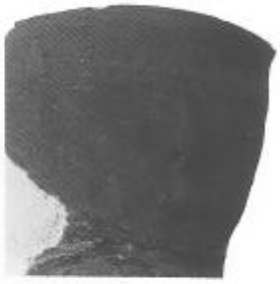
19

21

22

18

底面のヘラ書記号



40

42

外面ーヘラケズリー

47

41

43

底部ー砂底ー

SI150　竪穴住居跡出土遺物(1)

46

39

50

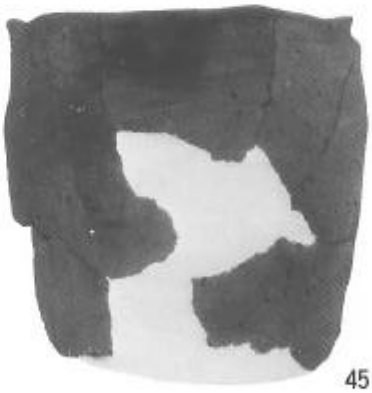
48

44

内面ーヘラナデー

底部ー砂底ー

49

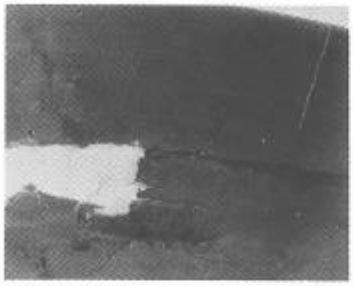

45

外面ーヘラケズリー

内面ーヘラナデー

SI150　竪穴住居跡　出土遺物(2)

71



外面ー横ナデー

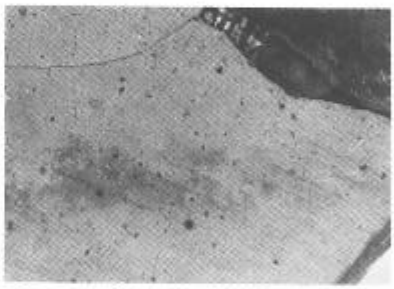
72

底面から体部の調整

73

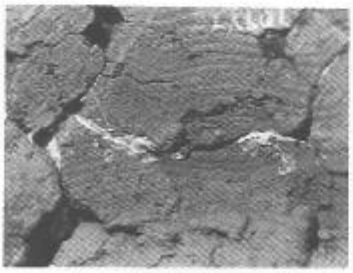
外面ーロクロ目ー

74



内面の墨痕

78



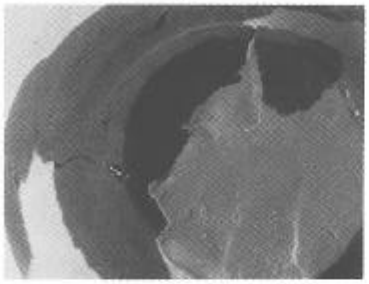
内面ーナデー

76

77

SI157　竪穴住居跡　出土遺物

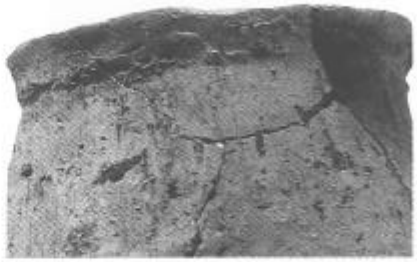
80



底部の調整

外面(体部上半)に残る板痕

85



外面ーヘラケズリー

底部ー木葉痕ー

81

215

214

把手部と本体の調整ー下からー　ピット3出土

把手部と本体の調整　ピット5出土

SI158　竪穴住居跡・柱穴様ピット3·5　出土遺物